

日本キリスト改革派教会 大会教育委員会

# 教会学校 教案誌



church school curriculum



わたしの霊は救い主である  
神を喜びたたえます。

ルカによる福音書 1章47節

vol. **71**  
2018年10-12月

「救済史」  
に基づく二年サイクル 第1年

- 【巻頭説教】「ただ一人の人を愛する」…………… 坂井孝宏
- キリスト教と公教育「公教育と教会学校の関わり」…………… 富井 篤
- 執事職について(3)…………… 相馬伸朗
- 長老職について(3)…………… 吉岡契典
- 【日曜学校・教会学校訪問】盛岡伝道所のご紹介…………… 名古屋恒彦

## 2018年10～12月カリキュラム (第71号)

—救済史に基づく2年サイクル 第1年—

月日 教会暦・行事	主 題	聖書箇所	暗唱聖句
	単元の目標		
10月7日	ダニエルと友人たち	ダニエル1：1-21	1コリント10：31
	どんな境遇でも神さまを第一としよう。		
10月14日	ダニエルとライオン	ダニエル6：1-29	マタイ6：33
	本当に自由な人生とは神の御前に生きることだと知ろう。		
10月21日	世界の終わり	ダニエル12：1-13	マタイ24：13
	世界の終わりは隠されているが、神さまを信頼すれば恐れることはない。		
10月28日 宗教改革記念日	信仰義認	ローマ1：17	ローマ1：17
	宗教改革の原点である信仰義認をルターの体験を通して学ぼう。		
11月4日	アルファでありオメガ	黙示録1：1-20	イザヤ44：6
	礼拝は、始めであり終わりである方を御言葉によって知るところ。		
11月11日	白い衣を着て	黙示録7：1-17	マタイ5：4
	神さまを信じる子どもたちは最後に完全な救いと慰めをいただける。		
11月18日	天のエルサレム	黙示録21：9-22：5	黙示録22：3,4
	やがて再び来られる主を待ち望み、神の御顔を仰ぎ見ることを待ち望む者にされたい。		
11月25日	キリストの再臨	黙示録22：6-21	黙示録22：20
	救い主イエスさまを最後に目で見て喜ぶ希望がある。		
12月2日 アドベント	人の子が来る	ルカ21：25-36	黙示録22：20
	キリストの再臨を待ち望む、落ち着いた信仰生活を送ろう。		
12月9日	洗礼者ヨハネ	ルカ3：1-20	使徒言行録2：38
	人間とその救いについて、歴史の中で語る神を知ろう。		
12月16日	マリアの讃歌	ルカ1：39-55	ルカ1：47
	ただ御言葉に信頼し服従する信仰をマリアから学ぼう。		
12月23日 クリスマス	主の降誕	ルカ2：1-20	ルカ2：12
	世界の人々とともに、神さまを賛美し、神さまによる救いの恵みを分かち合いたい。		
12月30日	少年イエス	ルカ2：41-52	ルカ2：49
	契約の子の代表であるイエスの少年時代の幸いな姿から学ぼう。		

も く じ

2018年10・11・12月カリキュラム

まえがき	
「あなたの光に、わたしたちは光を見る」	高橋 乃亜…………… 4
巻頭説教	
「ただ一人の人を愛する」	坂井 孝宏…………… 5
キリスト教と公教育	
「公教育と教会学校の関わり」	富井 篤……………10
教会学校訪問「盛岡伝道所」	名古屋恒彦……………14
CS 教師の一言	
「新所沢教会の教会学校のこと」	片桐 京子……………19
受洗・信仰告白の証「洗礼へと導かれて」	市川 太陽……………24
執事職について (3)	相馬 伸郎……………25
長老職について (3)	吉岡 契典……………28

聖書黙想・説教展開例・分級展開例……………31

10月 7日	……………32
10月 14日	……………38
10月 21日	……………43
10月 28日	……………48
11月 4日	……………53
11月 11日	……………58
11月 18日	……………63
11月 25日	……………68
12月 2日	……………73
12月 9日	……………78
12月 16日	……………83
12月 23日	……………89
12月 30日	……………94

聖句カード……………99

次号カリキュラム (2019年1・2・3月) …… 101

「子どもと親のカテキズム」案内 …… 102

教案誌自由募金案内…………… 103

執筆者よりひとこと・あとがき…………… 104

まえがき

## あなたの光に、わたしたちは光を見る

高橋 乃 亜

20世紀初頭、ドイツの写真家カール・ブロスフェルトは、植物のクローズアップを何百点も撮影し、凡庸な草木がもつ精妙なフォルムを、崇高さすら感じる生命の輝きを、写真というメディアを用いて見事なまでに写し取った。大学時代、オークションハウスで彼のオリジナルプリントを手にとった時の衝撃を、今でも忘れることができない。そして、その時イエス様の語られたあの言葉が頭に浮かんだ。

「今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか」

(マタイ6:30)

人が目に留めることもない路傍の草木でさえ(まして私たちも!)、神は眼差しを注ぎ美しく装ってくださる。装い続けてくださっている。それは一言でいえば神の愛のみわざ(摂理)だ。親が子を守り育てるように、神はご自分が創られたものを、守り、支え、愛し続けてくださっている。

自然そのものが、時に神のみわざを浮かび上がらせるように、ある作品もまた(時に作者の意図を越えて)、神の愛や美しさの断片を映し出す。たとえば、愛する人の手の温もりや安心感を、詩人はきつと十の言葉で伝え、画家はたった一枚の絵をもって伝えるだろう。音楽家は旋律や和音やリズムをもって、デザイナーは機能やレイアウトや色彩をもって伝えるだろう。ある人たちは、神の賜物によって創作へと突き動かされる。彼らは、創造の源泉を求めて自らの心を暴き、表現という名のぬかるんだ

泥沼を、重い足取りで歩き続ける。しかし、ふと目を上げたとき、世界に満ちる神のみわざの燦然とした輝きを目の当たりにするのだ。「命の泉はあなたにあり／あなたの光に、わたしたちは光を見る」(詩編36:10)「我らは、神の中に生き、動き、存在する」(使徒17:28)。まことの神を知るクリスチャン・アーティストにとって、創作は決して失望に終わることはない。自らの醜さもそのままに、神が与え給うた、その目を、手を、耳を、口を用いて、神の創られた世界へと向かい続けることができるのだから。

私が携わる IBUKI-Christian Artist Network は、教会内のクリエイターやアーティストを支援する組織で、この教案誌の表紙画を描き続けてくださっているのは、メンバーの中村未生さん(春日井教会)。この表紙デザインは今年で4年目になるが、未生さんの作品がなければ決して成り立たなかった。見ているだけで心が軽やかになるポップな色遣いと、子どものような遊び心に満ちている彼の作品は、子ども教育の教案誌にぴったりに思えた。美しい作品によって彩られた教案誌が、手に取ってくださったCS教師の皆様目を愉しませ、心を彩ってくれますように。

※ IBUKI-Christian Artist Network

(<http://ibuki-can.org/>)

※中村未生さんの作品や活動は、下記URLにてご覧ください。

(<http://www.wb.commufa.jp/atl-pop/>)

(湘南恩寵教会長老)

## 巻頭説教

## ただ一人の人を愛する

出エジプト記20章14節、エフェソの信徒への手紙5章21～33節

坂井孝宏

「姦淫」という言葉は、とても難しいですね。そして、いろんな意味があります。みんなが大きくなったら、もっとたくさんのお話したいと思っています。今は、この戒めは「結婚相手を裏切ってはいけない」ということだと覚えていてください。アダムにエバが与えられたように、私たちにはそれぞれに必要なパートナーを、神さまが与えて下さいます。その人とだけ、最後まで愛し合うことができたなら、それはとても幸せなことなのです。

みんなには、今から祈ってほしいなあ。神さまが、すてきなパートナーを与えて下さるように、と。そして、その未来のパートナーのために、自分の心も体もきよく保っていくということを、今から大切に考えてほしいのです。

今は、小学校の時から彼氏彼女とお付き合いをするのが当たり前かもしれません。人を好きになるのはとてもいいことです。でも、本当に結婚したいくらい好きな人には、そんなに簡単に出会えるものじゃないと、先生は思います。「大好き」の気持ちを、結婚する相手に出会えるまで、大切にとっておくといいと思うよ。

たくさんの人とお付き合いをしたことがないと恥ずかしいって、世の中では言われているのかもしれないね。でも、本当にそうかな？「あなたに出会えるまで、他の誰とも付き合わずに待っていたよ」って言わ

れたほうがうれしくないかな？

もしかすると、みんなの周りでは、もう誰も本当の愛なんて知らないかもしれない。でもみんなは、「愛」とはどういうことかを知っている人たちだと、先生は信頼しています。だって、神さまが、ぼくたちに「愛」を教えてくれたからです。神さまってどういう方でしたか？ 私たちが神さまを知る前から、大切に大切に、私たちに裏切らないで、ずっと愛し続けて下さった。大切な独り子を与えて下さったほどに、愛して下さいました。そして今も、愛し続けて下さる。そういう風に、ぼくたちは知っているよね。だからあなたたちも、そのように愛し合いなさいと、神さまは教えてくれているのです。

### 1. 「姦淫してはならない」の広い意味、狭い意味

今日は「姦淫してはならない」という戒めをいただきました。先ほど子どもたちとも確認したように、神さまが与えて下さるパートナーとの間の誠実、裏切ることのない愛ということを中心に考えていきたいと思います。それはとても狭い意味で姦淫をとらえることだと、覚えていてください。

姦淫と言う事を考えるには、広い意味と狭い意味と両方を踏まえることが大事だと思います。広い意味では、性的な不品行の全体を指します。『子どもと親のカテキズ

ム』にあったように、「思いと言葉と体をきよく保つことを神は求めておられる」のです。これだけ性倫理が崩壊してしまって、中学生や小学生の間でも当たり前のように性的交渉がなされている現代です。ポルノや風俗産業など、特に男性の性的欲求を満たすために、女性が商品として扱われる、またそのようにして自分をウリに出す、そういうことが蔓延している社会であって、そのような不品行を神は怒り悲しまれると覚えることはとても大切なことです。

他方、狭い意味では、姦淫とは「結婚生活においては結婚の誓いを守り、きよい家庭を築く事」とありますように、結婚生活における純潔を教えるものです。元来の意味は『『男（既・未婚問わず）』が『既婚の女』と性的関係をもつこと』であり、それはその相手の夫の結婚を犯す罪であるという理解が前提としてあります（※ここには、妻は夫の所有物という、男性中心社会の背景が色濃くあります）。平たく言えば、パートナーを裏切ってはならない。裏切らせてはならない、ということです。

## 2. 戒めの中心にある戒めの中心にある、パートナーへの誠実という教え

この狭い意味だけ考えて、広い意味での不品行は大らかにということを言いたいわけでは決してありません。そうではなく、この狭い意味での「姦淫するなかれ」ということが、この戒めの中心にあるという理解を私は採ります。性的な不品行が戒められるのも、第一義的には、結婚相手に対する誠実ということを目指すものだと考えます。独身の方であれば、ただ神が禁じておられるからと我慢するというのではなく、いつか神に与えられるパートナーのため

に、自分の純潔を守るとというのが一番の要点であろうと思います。

私は、高校生や大学生の方々と交流があって、こういう話もしばしばいたします。そういう中で、相談を受けることもあります。自分は純潔を守りたいののだが、お付き合いをしている人がクリスチャンじゃないので、なかなか理解してもらえない。どのように言えばいいか？、という悩み相談です。私もベストの答えを持っているわけではありませんが、「未来の夫、妻のために自分は大切にとっておきたい」と言ってみてはどうかと提案いたします。そして、今お付き合いしている方のことを含めて、結婚するにふさわしい方を与えてくださいと、高校生の時から祈り求めなさいと伝えます。

そういう具合に、結婚相手に対する純潔、裏切らない、最後まで一人の人と愛し合う幸いというところに、姦淫してはならないという戒めの中心をおいて、理解したいと思う。そういう思いで、今日はエフェソ書の御言葉に共に耳を傾けました。

## 3. エフェソ書の夫婦愛の教え

今日お読みした御言葉は、夫婦の愛を教える言葉です。ひと言で言えば、キリストが教会を愛しておられるように、夫婦互いに愛し合いなさいという教えです。特にそれは、男性に対して言われていますね。25節「夫たちよ、キリストが教会を愛し、教会のために御自分をお与えになったように、妻を愛しなさい」。これは、当時にあっては大変画期的な教えです。古代オリエント社会、もう少しせまくユダヤ社会にあっては、圧倒的男性優位で、女性は所有物扱いでした（日本語でも、「あの女をももの

した」などというひどい言い方がまかりとおっています)。しかし今日の教えでは、キリストと同じ愛で妻を愛しなさいと命じられています。

実は、この御言葉を巡っては、色々と物議をかもすところがあって、それは一つには、23節に「夫は妻の頭だから」、夫に仕えなさいとあるところです。こういうところに封建的で男性優位の価値観が映し出されているのは確かだと思います。だから、こういう聖書の言葉はダメだと言われることにも、一定の理解を覚えます。しかし、頭だからといって偉そうにしているいいとは言われていないのです。そうじゃなく、ここで言われているのは、夫が、もし本当に妻の頭だとするなら、頭は体抜きには成立しないのだから、自分の体のように妻をいたわり、大切にしなさいということです。

28節、「そのように夫も、自分の体のように妻を愛さなくてはなりません。妻を愛する人は自分自身を愛している」。ここで言われている「そのように」とはどのようにかと言えば、キリストが御自分の体である教会を大切にいたわり、配慮なさるよふにということです。「しみやしわやそのたぐいのものは何一つない……」まるでエステでボディケアするように、御自分の体である教会をいたわり、整えていかれる。そのように、自分の体のように妻を愛さなくてはならないと言われているのです。

#### 4. 夫婦愛の教えの前提としての、「二人は一体」という夫婦理解

この前提にあるのは「妻と自分は一心同体である」という教えです。所有物などでは断じてない。神が結んでくださった「二人は一体となる」のであって、妻をいたわ

るのは、自分をいたわるのと同じだし、逆に言えば、自分を愛したいなら、妻をちゃんと愛しなさいということです。そこをないがしろにしているのは、結局自分をもないがしろにすることになるのです。

それほどの夫婦の一体感ということをお私たちはどこまで自覚しているのでしょうか。改めて31節を考えると、これは創世記の最初、人間の創造に際して言われたことでした。「それゆえ、人は父と母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる（創世記2:24参照）」。

ここで一体となるというのは、性的交渉のことだけを言っているわけではありません。これは男と女がひとつのいのちを共有するということです。二人で一人の人間になるということが言われている。それほどの結びつきです。違う言い方をすれば、そのようにして人間は、二人そろってはじめて一人前になったということでもあるのです。父母を離れてとありますね。父母を離れるというのは人間としてひとり立ちするということです。二人そろってようやく本物の一人の人間として、ひとり立ちしたのです。

#### 5. 神からの「助け、憐れみ」として与えられるパートナー

これは結婚していないと一人前じゃないということではありません。聖書の価値観にあつては、独身であるということは決して悪いことではありません。神さまからそのように生きようと定められている方もいます。だからそういう方が何か足りないというわけではない。そうじゃなく、結婚相手が与えられるということは、その人が一人では生きていくことができない人だということです。私たちに分かるのはそ

れだけです。私は、結婚なさった方にしばしば申し上げます。あなたたちが結婚させていただいたのは、あなたがたそれぞれが、一人では生きていけない人間だからです。助け手を与えていただかないと生きていけないから、だから神さまの憐れみで結婚させていただいたのです。そういう認識をもって、これ以降、決して傲慢にならないようにしてくださいと申し上げます。

結婚相手というのは、神が与えてくださる大切な大切な助け手です。創世記1章18節、「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう」。もう少し原文のニュアンスを出すと、「彼に合う」というのは、「彼の前に、彼と向き合う」という言葉です。まったく対等な関係で、互いに人格として向き合って愛し合い尊重しあうという関係性を表しています。だから、「助ける者」といっても、お手伝いとか助手ということではない。これは、その人に与えられる「神の助け」、神の憐れみと理解すべきでしょう。この助けがなければ、生きていけないから与えられる、それほどの大切な助けです。

## 6. 25節、「キリストが教会のために、御自分をお与えになったように」

そういう強い結びつきを意識して、自分の体をいたわるように、妻を愛しなさいと言われていたのです。改めて25節を読んでみると、これはすごい言葉ですね。「夫たちよ、キリストが教会を愛し、教会のために御自分をお与えになったように、妻を愛しなさい」。妻を所有物として、自分のモノとして扱うような価値観とは対極のものとして、「自分を与える」という愛がここに示されています。言うまでもなく、それ

が、イエスさまが示してくださった「愛」です。まさにそのように、イエスさまが私たちにそうしてくださったように、命をささげてくださいましたように……、とされているのです。

これはもちろん夫にだけ言われていることではありません。当時においては夫の身勝手さを戒めるために、特に夫に対して言われておりますが、妻の側もまた聴くべきことであります。

## 7. この教えを取り次ぐ説教者の祈り

これが、「姦淫してはならない」という戒めの要にある教えです。こういう教えを、まっすぐに伝えること、これは私にとって祈りなくしてできることではありません。皆さんお一人お一人のことを思い浮かべながら、この神さまの教えがどのように皆さんの心に届くだろうか。どうか苦しみや傷とならないように、深い慰めと励ましとなって届くようにと願いながら説教準備をいたしました。皆さんの中には色々な方がいらっしゃると思います。結婚相手が与えられている方、与えられていない方。すでに天に送った方。パートナーと同じ信仰が与えられている方、そうでない方。そして、結婚生活の喜びをたくさん味わっておられる方もいれば、むしろ苦悩のほうが多い、多かったという方もいらっしゃるかもしれない。

今日の御言葉が、大変厳しく重く感じられた方もいるかもしれない。そのような方にどのようにしてこの御言葉を取り次げばいいのか、本当に分からないという思いで一週間を過ごしました。ただ私に分かるのは、もし今日の御言葉が苦しいと思う方がいらっしゃるなら、それはその人が、一生懸命に相手を愛そうとしているからだとい



うことです。きっとそういう人は、うまく愛せない、愛せなかった自分を責める人でしょう。自分の罪を責める人でしょう。でも自分で気づいてほしい。今苦しんでいるのは、あなたが懸命に愛そうとしているからです。愛そうとしてきたからです。聖書の御言葉と向き合おうとしてきたからです。そういうあなたを、神さまはいつも見ておられます。

### 8. うまく愛し合えない私たちの「罪」に、 救いをもたらすイエス

私たちの罪は、さらには罪の悲惨というものは、うまく愛し合えない現実というかたちで現れることしばしばです。とりわけ夫婦の問題は、罪の現実が最もリアルに現れるものです。最初の罪がアダムとエバのむつまじい夫婦の間に割って入ってきたように、いつでも夫婦の問題というのは罪の活躍する舞台です。最も近い関係だからこそ、深く傷つくのです。自分が願うようには相手が動いてくれない、言葉をかけてくれない。それぞれの性格、かたよりとい

うことがある中で、思いがすれ違い、もはや交わす言葉は空虚な響きしか持たない。そんな現実、泣いている私たちかもしれない。

本当に、うまく愛し合えないということに、私たちの罪が現れるのですね。罪人のみじめさが現れるのです。神さまはそういう私たちの罪深さをよくご存知です。でも、いやむしろ、だから、だからこそ、その罪から救うために、イエス・キリストをこの世界に与えてくださったのではなかったでしょうか。私たちの惨めな現実のただ中に生まれて来てくださった方は、罪から救ってくださる方です。愛し合えない罪を赦してくださる方です。深く傷ついたその心の傷をいやしてくださる方です。そして何度でも、その肩を抱いて立ち上がらせてくださって、愛する力を注いでくださる方です。愛を教えてくださいのために、そのために生れて来てくださった方です。私たちを、この罪の悲惨から救えるのは、キリストしかないのです。 (勝田台教会牧師)

キリスト教と公教育

## 公教育と教会学校の関わり

富 井 篤

私は大阪府の高校教員を30余年勤め、そしてほぼ同じ年数教会学校の教師として奉仕してきました。週5日は公教育に関わり、週1日は教会学校に携わってきたということになります。管見ではありましようが、その中から感じたことを記してみようと思います。

### 公教育に必要なバランス感覚

まず、公教育の現実を現職教員としてどうとらえるかという点に関してです。教育については、誰もが自ら関わった経験もあり、また具体的に関わっている当事者であったりして、いろいろ意見を持ちやすいということが言えると思います。そういうわけで、保護者の中にはクレームをつけてくる人もいますし、生徒もそれぞれ独自の要求を持ってきます。教員自身としても、勤務評価や授業アンケート、最近マスコミがとりあげる労働時間の問題など、考えるべきことが多くあるように思われます。

しかし、長年教員をやってきましたと、よい意味でそういういろいろなものをうまく流せるようになります。教育には流行と不易の両面があり、端的に言えば流行に惑わされずに不易の部分をしっかりとおさえるのが大切だなという当たり前のことがわかってくるからです。それは、私の担当教科である国語で言えば、文章を丁寧に読むとか、自分の意見をわかりやすく伝えるとかいう、地味で単純なことです。公教育を

担っている多くの先生方は、そういう勘どころを知っていて、日々コツコツと取り組んでいらっしゃるのだと思います。

それに比べると、流行の部分というのは、大きくとりあげられる割には、表面的なことも多いのです。例えば、時間外労働にしても、自分の信念とすることが時間内にできればする必要のないことでしょうし、時間外にする必要があれば、やらざるを得ないと割りきるしかないでしょう。部外者が勝手なものさしであれこれ言う筋合いのものでもないのです。保護者のクレームにしても、教員として取り組むべき不易の部分であるとすれば時間に関係なくとりあげ、そうでなければ参考意見としてさりと流して忘れるべきものです。そうでなければやられてはならないものではありません。

公教育とは様々な考えの人々が理解し合いながら営んでいくものですから、時には矛盾する考えや行動が起こり得ます。教員は、プロとして流行と不易の部分を見分け、不易の部分を大切にしつつ多数が納得できるように流行の部分も無視はしないというふうな、上手にバランスをとっていく見識が求められると思います。私の身近にいる若い先生の中に、流行にはまりこんでしまつて身動きがとれなくなるような人もいます。経験知を交流し、伝達し合う余裕のある職場環境が大切だなと思わされます。

## 大きな流れとして公教育が追求してきたもの

さまざまな活動を含む公教育の中で、一体何が行なわれているのかということを一言でまとめるのは簡単ではありません。けれども、昨年何回目かで夏目漱石の『ころ』を教え、漱石の生涯などを学んだ時に、彼の慧眼が現代の公教育をも見抜いていると感じました。『ころ』は国民文学とも言うべき有名な作品ですから多くの人が読まれたこともあり、あらすじなどもご存知でしょう。この作品を含めて漱石の小説の多くは、今から100年も前に朝日新聞社の専属作家として彼の問題意識を世に問うたものです。彼は、イギリス留学の経験から、日本がこれから追いかけることになる欧米文化を消化することの困難さを痛感していました。実際、留学中にノイローゼになり、最期は胃潰瘍で亡くなったということですから、悩み抜いた生涯だったと言えるでしょう。

私の教員生活を振り返ってみると、この数十年の間も公教育は欧米文化を消化吸収するために進化してきたことを感じます。その例を挙げてみますと、20年程前に教育相談ということでカウンセリングがブームになりました。最近はこれに加えて支援教育が重視されています。これらは欧米の人権思想や個人主義の影響を受けたものです。10年程前からは学校でパソコンを使った教育をすることが盛んになりました。現在もICT機器と呼ばれるプロジェクターなどを使って、手法としても生徒を主体にしたアクティブラーニングというものが進められています。これらも言うまでもなく欧米由来の機器を用いての欧米流の指導法です。さらに、2020年を目処としてセンター試験が変更されるということで検討が進め

られていますが、その目玉は英語力と国語の論理的表現力です。これらはグローバルな競争力をつけるという大義名分で行なわれていますが、文化的にはアジアの文化ではなくやはり欧米文化の基本である個人主義的なコミュニケーション能力ということになります。要するに、日本の公教育は漱石が予見し悩み抜いた欧米に追いつく苦悩の道を、今も営々と続けているということなのです。

もちろん、このような欧米文化の受容吸収は、公教育だけが社会から遊離して行なっているわけではありません。教育が主導する面もあつたでしょうが、一方で社会からの要請によって教育が変わってきたという部分もあつたはずです。社会にはいろいろな力関係がありますから、混乱することもあつたでしょう。そういったもろもろを踏まえた上で、なお現在の公教育は、明治以来の大きな流れとして欧米文化を獲得しようという道を歩んでいるのは間違いないと思われます。

## 画竜点睛を欠く公教育

ところが、このように進化を続けているように見える公教育は、決して完成することのないように定められているとも感じます。それは、教育基本法によって、国立や公立の学校においては特定の宗教教育をすることが禁じられているからです（第15条2）。この条文の影響というのは、実は大変大きいものだと思います。もちろん、このような制限が必要な理由もあるわけですが、公教育の場には多様な宗教的背景をもった生徒が集まっているわけですから、片寄った信仰教育が勝手にされたらまずいということはあるのです。しかし、人間生

活の中で宗教の果たしてきた役割は非常に大きいのに、それが制度上教えられないというきまりになっているということなのです。

それは、先に書きました『こころ』を読むときに痛切に感じることです。漱石は、日本人として欧米文化を受容していくことの危うさを感じ、それをこの作品に書き表しました。そのテーマは「エゴイズム」と言われます。キリスト教では、神に対する「罪」ということになるでしょう。「罪」に関する話は教えられるし教科書に載っているが、「救い」に関しては教えられないし教科書にも載っていないということになるわけです。

なぜこのようなことになっているのか。日本の教育制度の歴史、教育法規の由来など検証してみなければなりません。それ自体キリスト教国であった欧米の模倣なのかもしれません。日本の公教育はそういう意味では外部で宗教教育がなされないと不完全なものとして設計されたということが言えるのかもしれませんが。

いずれにせよ、漱石の『こころ』で端的に示されているように、日本の公教育は完成することのないゴールを目指して進化している途上であると言えます。問題は、宗教的要素を除いて人格の完成ということがあり得るのだろうかということです。もともと木に竹を接ぐようなことをやっている教育制度で、肝心な部分の宗教的要素を除いたら、結果としてつぎはぎだらけの表面的な教育になってしまうのではないのでしょうか。そうだとすると、その弊害というのは私たちが考える以上に大きなものになるのではないのでしょうか。まさにそうだと思います。昨今問題になっているモラルの崩

壊は、知育偏重で表面的な欧米文化の模倣がもたらした必然的な結果であると考えられます。

そして、人間が本質的に宗教的存在であるということを考えたときに、宗教を意図的に除いた教育が何を生み出すのかということが危惧されます。それは、さまざまな形の偶像崇拜にはならないだろうか、ということです。優秀な教師、そして優秀とされた生徒が、自らを偶像化することにはなっていないのでしょうか。学校自体も偶像になり得ます。そして、最も恐ろしいのが、国家を偶像とすることです。過去も、そして現在も、その危険性はあると思っています。

以上、公教育が制度として本質的に完全とはなり得ない面をもつものであるということを書いてきました。それでも、日本において公教育の重要性を認めない人はほとんどいないでしょうし、実際に子どもたちの生活は公教育を中心に回っているといっても過言ではないでしょう。これは人間の奥深い部分でもあると思います。いわゆる一般恩恵が働いていると思います。不完全な制度を神さまが子どもたちを育てるために用いてくださり、教員の賜物や、子どもたちそれぞれが持つ賜物を通して、信仰以前の形で育てて下さっているのです。ですから、公教育の現場である学校において、喜びもあり、感謝もあるわけです。

### 教会学校によって補完された教育は根拠のある一つの理想

ここで、話を教会学校へと移していきたいと思います。私は最初に書きましたように、公教育と教会学校を兼ねる生活を30年余り続けてきましたが、教会学校はまさに

公教育で意図的に除かれている点を補う場であると感じます。そして、その点というのは実は最も肝心な点なのです。それは、生活の土台となる命を与えてくれる場だからです。御言葉が与えてくれる喜び、感謝は、一般恩恵として与えられるものに比べてより堅固な根拠をもっています。したがって、教会学校は公教育が果たし得ない一つの理想的な教育の場です。公教育でスローガンとしてあげられるさまざまな理想が、ここにおいては当然のように実現されています（総合的な学習、少人数教育、インクルーシブ教育等）。

公教育の学校で推し進められているものが欧米文化の受容吸収であるとする、教会学校での学びはその核となるキリスト教信仰の学びです。それは、さまざまな文化内容の源泉ですから、公教育では学べない中心部分を学べる場です。逆に、公教育の学校においてさまざまな問題が挙げられ、実際に子どもたちが満たされないものを訴えてくるのも、中心部分を欠いた状態で無理なことをやっているのだから当然であるとも言えます。そこはある意味やむを得ないと割り切る必要があるでしょう。そして、教育制度のモデルとなった欧米諸国で学校と教会が補完しあっているように、日本においても学校と教会学校が適切に連携することによって考え得る最善の教育環境が生み出されると言えます。

ただし、何が最善かというのはそれこそバランスの問題でもあり、単純に言えない

面があります。本人の納得、家族など周囲の理解がないところでは最善とはなるかどうか疑わしいでしょう。また、根本的な問題として、日本が欧米文化に追随することが良いことなのかということもあります。現実そういう流れだからということでも最善とするには少々無理があります。漱石が危惧したのもそこでした。欧米人が数百年数千年かけて試行錯誤しつつ獲得したものを、日本人はそう簡単に自分のものとはできないのではないかということです。この問題は深い問題であり、世の流れに乗って欧米文化の完成を目指さざるを得ない私たちは、進みながらも時々立ち止まって熟考する必要があるだろうと思います。高度経済成長時代なら問題にならなかったかもしれませんが、現代においては違います。目標としてきた欧米諸国が混迷の度合いを深め、日本もまた高齢化が進んでこれまでのように突き進む余力がなくなってきて、日本独自の進み方というものが増えてきて、日本独自の進み方というものがこれまで以上に模索されていると思うからです。

最後に、教員にとっても教会学校、もしくは教会生活は非常に重要ということを書いておきたいと思います。教育の世界にはさまざまな流行があり、それにいちいち流されては身がもちません。教員自身が信仰という核を持ち、キリストという命の源に基づいて公教育の現場に立つならば、多くの祝福が与えられます。これはこれまでの私自身の実感でもあります。

(宝塚教会長老)

日曜学校・教会学校訪問

## 盛岡伝道所日曜学校の紹介

名古屋 恒彦

### 1. 盛岡伝道所

盛岡伝道所は、1979年に盛岡市郊外で伝道スタート。2009年に現在の場所に移転、JR盛岡駅から徒歩20分ほど、バス停は会堂の目の前徒歩0分という利便性の高い教会です。改革派信仰を高くかけ、地域に根ざし、地域に開かれた教会であることを願って伝道をしています。

### 2. 日曜学校の概要

日曜学校には、毎週集まる生徒5人(幼稚園年少1人、幼稚園年長1人、小学4年生1人、小学5年生1人、中学1年生1人)、主にキャンプ等の参加生徒2人(小学1年生1人、小学4年生1人)、計7人が通っています。教師は4人です。

教師は毎週日曜日の朝8:10頃に集合し、祈りをもって準備に入ります。教材準備等を行い、8:45から打ち合わせを15分程度行います。

日曜学校礼拝は9:15から9:40くらいまで。プログラムは図の週報の通りです。礼拝後は、アクティビティに取り組み10:00頃終了です。

### 3. 日曜学校の活動

「御言葉に学ぶ」礼拝と「御言葉を生きる」アクティビティの二つの柱で活動しています。

#### (1) 「御言葉に学ぶ」礼拝

礼拝は、日曜学校であっても神様への礼

拝であるという本旨を明確にしています。10:30からの「みんなの礼拝」(よく「大人の礼拝」という言葉を耳にしますが、盛岡伝道所では大人も子どもも共に礼拝する姿をめざしていますので、この言葉は使わず、「みんなの礼拝」と言います)と可能な限りプログラム構成や賛美を揃えています。

併せて、日曜学校礼拝では、礼拝のもつ学びの本質を重視し、「御言葉に学ぶ」という意義を押さえ、以下のようにプログラム構成をしています。

- ①黙とう:「みんなの礼拝」に準じたプログラムです。礼拝始めに祈り、心静める習慣形成を願っています。
- ②さんびか:毎週変わります。その日の聖書に関連する歌を選曲。幼児から中学生まで共に賛美できることを意図して選曲しています。特に中学生が子供っぽい賛美に抵抗をもたないように。
- ③おいのり:教師が祈ります。「みんなの礼拝」の開式の祈りと牧会の祈りに相当します。
- ④使徒信条:使徒信条に親しむために行っています。「みんなの礼拝」でも行っています。暗唱できる生徒が増えました。
- ⑤聖書:盛岡伝道所日曜学校カリキュラム(後述)に即しています。生徒も保護者も教師も垣根なく輪読していま

す。日曜学校で初めて聖書を読めた幼児生徒もいます。

- ⑥メッセージ：教会暦に即し、約1か月前後の単元を構成しています。メッセージでは、「子どもっぽい話し方とわかりやすい話し方は別」を意識し、幼児語などの使用を避け、しかもわかりやすくどの年齢層にも聞きやすい話し方を教師間で共通理解しています。また、プロジェクターや図書などを活用し、視覚化に努めると共に、一方通行の講話にならないよう対話型のメッセージを心がけています。生徒たちが積極的に応答してくれるときはうれしい思いがします。
- ⑦おいのり：教師がメッセージにかかわる祈りをします。
- ⑧さんびか：選曲方針は②と同じ。ここでは単元期間中は同一の讃美歌とし、単元のテーマを深められるようにしています。
- ⑨献金・感謝のいのり：生徒が当番で祈ります。定型文を用意していますが、次第にそれに頼らず自分の言葉で祈っています。幼児は教師の手本に沿ったり、先輩の祈りを聞いて覚えたりして祈っています。
- ⑩今日の聖句：その日のメッセージの主題となる聖句をみなで読みます。聖句は原則としてその日の聖書箇所の中から選び、教師が意味を解説します。メッセージの主題を御言葉で深化するプログラムです。以前は一般的な暗唱聖句をしていましたが、その日の日曜学校礼拝のテーマを深め、理解するという目的を明確にし、このプログラムを設けました。

⑪さんびか：頌栄です。「みんなの礼拝」と同じ541番を賛美します。「みんなの礼拝」でも生徒たちは元気に賛美しています。

⑫主のいのり：最後は主のいのりで終わります。「みんなの礼拝」では礼拝の前半で祈りますが、日曜学校礼拝での積み重ねから、「みんなの礼拝」でも生徒たちの祈りの声が大きくなってきました。

## (2)「御言葉を生きる」アクティビティ

日曜学校では、いわゆる分級を行っていません。学年や年齢を超えて、保護者も教師も一緒になって、「アクティビティ」に取り組んでいます。

分級を行わないというと、「人数が少なく分級ができないから」と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、そうではありません。

「御言葉に学ぶ」ことを日曜学校礼拝に託し、後半の活動では「御言葉に生きる」こと、つまり御言葉を日常の中で生きることを実際的な生活活動を通して展開することを願って「アクティビティ」を展開するのです。ですから、年齢で分ける分級方式ではなく、多様な年齢層が一緒に、つまり自然な生活の中で展開しているのです。

アクティビティは、信仰生活の一コマと位置づけ、時期ごとの教会歴や礼拝の御言葉に即した実際的な活動を中心に、1か月前後で単元化します。

たとえば、教会暦で代表的なクリスマス、イースター、ペンテコステ、宗教改革記念日は外さずに単元化し、そのための準備に当たっています。一方、夏の神様の恵みに感謝してデザートを作り続けたり、日曜学校礼拝の単元と連動させたり（たとえば、「ノアの箱舟」の時期は、箱船のミニチュ

**使徒信条**

われは天地の造り主、全能の父なる神を信ず。

われはそのひとり子、われらの主、イエスキリストを信ず。主は聖霊によりてやどり、おとめマリヤより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にてほうむられ、よみにくだり、三日目に死人のうちよりよみがえり、天にのぼり、全能の父なる神の右に座したまえり、かしこより来たりて、生ける者と死ねる者とをさばきたまわん。

われは聖霊を信ず。


聖なる公同の教会、聖徒のまじわり、罪のゆるし、からだのよみがえり、とこしえのいのちを信ず。

アーメン

にちようがっこう

**日曜学校**

**週報**



おんがつにち

2018年5月13日(日)

にっほん　かいかく　ほりおんかきようかい

**日本キリスト改革派盛岡教会**

アを用意し、紙粘土で動物を作るなど）と、単元のテーマごとに多様な活動を繰り返していきます。

また、2017度からは命を学ぶために、農業に詳しい保護者のご協力を得てバケツ稲作りに取り組んでいます。ちなみに2017年度は新米で宗教改革記念500年をお祝いしました！

さらに2017年度の秋には麦を植え、初夏には収穫・パン作りをめざしています。

農作業は数ヶ月の長期にわたるため、作付けや収穫を単元化し、管理は他の単元と併行していくなどして、活動が錯綜しないように注意しています。ときには、うまく育たないこともあり、その失敗も生徒たちに隠さず共有し、命を育む難しさや命を育ててくださる神様への感謝などを生徒も教師も学んでいます。地域の方も作物の成長

に関心をもってアドバイスをしてくださっています。

アクティビティの最後には毎回必ずおいのりをします。そうして活動を単なるお楽しみではなく、御言葉によって意味づけるようにしています。おいのりと言え、あたりまえですが、調理の単位では必ず食前のおいのりをします。ご家庭によっては普段食前のおいのりがしにくい場合もありますので、アクティビティの中で、おいのりの習慣をきちんと積み重ねるようにしています。

なお、盛岡伝道所のアクティビティは、教育学的には「生活単元学習」といわれる方法です。

### (3) 日曜学校カリキュラム

カリキュラムは、教会暦をベースにオリジナルで作成しています。教会暦の伝統に



にちようがっこう  
**日曜学校**

**プログラム**  
ねんがつにち  
 2018年5月13日(日)

☆礼拝

- ①黙とう
- ②さんびか「主はわたしの  
げんきのもと」
- ③おいのり
- ④使徒信条
- ⑤聖書(みんなで順番に)  
ヤコブの手紙5章13～16節
- ⑥メッセージ「ペンテコステ  
～祈り合う教会～」
- ⑦おいのり
- ⑧さんびか「いのりつつける」
- ⑨献金・感謝のおいのり
- ⑩今日の聖句  
ヤコブの手紙5章13節「あなたがたの  
中で苦しんでいる人は、祈りなさい。」
- ⑪さんびか 541番
- ⑫主のいのり

☆アクティビティ  
「ペンテコステに向けて花壇を整備  
しよう」

主のいのり

天にましますわれらの父よ  
 ねがわくは み名をあげさせたまえ  
 み国を来たらせたまえ  
 みこころの天になるごとく 地にもなさせ  
 たまえ  
 われらの日用の糧を 今日も与えたまえ  
 われらに罪をおかすものを われらがゆる  
 すごとく われらの罪をもゆるしたまえ  
 われらをこころみにあわせず 悪より救い  
 出したまえ  
 国と力と栄えとは 限りなく 汝のものな  
 ればなり

アーメン

従い、降誕節はイエスさまのお誕生から福音書の記事を、受難節は福音書の記事から受難を、復活節はイエスさまのご復活からペンテコステに至るまでを、聖霊降臨節は主に旧約聖書（ただし宗教改革記念日前の単元は宗教改革に関わる内容）を、待降節はクリスマスの記事を、それぞれ主に取り上げ、礼拝メッセージの聖書箇所を選定しています。いずれも1か月ほどの期間で単元をまとめています。

オリジナルのカリキュラムは毎年作成し、2018年度で三つめになります。クリスマスのように毎年繰り返すおなじみの内容であっても、学びのテーマを変え、聖書箇所選定を行っています。

アクティビティの年間単元計画も作成しています。アクティビティは礼拝の単元と連動する場合、季節に応じて独自に単元を

組む場合があります。

カリキュラムは後述する日曜学校ブログにアップしていますので、どうぞご覧ください。

#### 4. その他の活動

##### (1) 子ども文庫

2016年度から子ども文庫の充実に努めています。日曜学校に役立つ聖書物語や図鑑、地図の他、児童文学、絵本などを生徒のリクエストも受けながら整備しています。日曜学校生徒を対象に貸し出しもしています。リクエスト用紙を一生懸命書く生徒、図書を借りて帰る生徒の姿は心とめます。

##### (2) イベント

地域の方々や日曜学校生徒を対象に、多様なイベントを展開しています。

「子育て支援勉強会」は、地域の方々を

対象に、子育て論や障害支援などの講座を行っています。この会は直接伝道を意図したものではなく、教会に親しんでいただくことや、文字通りの子育て支援を目的にしています。すでに5回を数えていますが、口コミやチラシで地域の方や近隣教会の方もおいでくださり、リピーターも増えてきました。同種の試みでお料理教室を行ったこともあります。

「星空学校」は、日曜学校生徒を主な対象に、夜の教会に集まり、潮田先生からのショートメッセージの後、望遠鏡で夜空をみて楽しんでいます。

「サクラハウス応援バザー」は、2018年のイースターに初めて実施しました。宮城県でキリストの愛をもって復興活動続けるサクラハウスが主催するキャンプにいつも参加させていただいていることから、みんなでバザーをして応援しようというアクティビティ単元を組みました。手すきハガキ等を作って売りました。売り子になったりお客になったり、みんなで楽しく取り組みました。

### (3) 説教ワークシート

現在、日曜学校で力を入れている活動に説教ワークシートがあります。これは10：30からの「みんなの礼拝」のプログラム全てに子どもも参加できることをめざすものです。礼拝の中で最も「大人向け」になりがちな説教を、子どもも聞き、聞き取ったことをワークシートに頑張って書き込んでいます。ワークシートは「みんなの礼拝」の後、教師がマル付けをします。わからないことを書く欄もあり、そこから説教の中身に踏み込む対話的な学習が始まっています。幼児は保護者と書いたり、絵を描いたりでもOK。シートが5枚たまるとうちよとしたプレゼントをしています。

### (4) 日曜学校ブログ

盛岡伝道所のホームページに設けています。地域の方や県外の方も見てくださっています。日曜学校の元気を発信すると共に、伝道の思いも込めています。ぜひみなさま覗いてみてください!!

(盛岡伝道所・日曜学校校長)



## CS 教師の一言

## 新所沢教会の教会学校のこと(1)

片桐京子

新所沢教会の教会学校から三人教職者が出たということはね、とても励みになることだと思います。川杉(安美)くんと久保田(証一)くんと木村恭子さんね。その方々が教会学校にいて、教会学校の奉仕も三人ともしてますからね。で八見(将文・新所沢伝道所委員)くんは、先生って言うんじゃない、首連高(東部中会首都圏連合高校生会)のリーダーをやった。それで、ギター教室っていうのをここでやって、中高生がいっぱい集まって、五十嵐遵(花小金井教会長老)くんとかうちの息子たちとか一緒にギターをやって、それでまたそこでグーッと増えたりとか、かなり活気がありましたよ。そんな教会学校でした。

## 最初の頃

私がここにお世話になった頃の事です。リチャード・サイツマ先生がこの土地を買って、教会を建ててくださったんですね。改革派の教会をここに建てたわけですけど、そのとき同時に団地がここにできたでしょ。そしたらいろんな所から人が集まって、教派も違うし、ホーリネスだとか、セブンスデーアドベンチストだとか、教団の人だとか、いろんな人たちがいました。そういう人たちは自分たちの信仰に対する姿勢とか教理とか微妙に違うわけですよ。従来所属していた教会でも役員をやったような人たちがいたり、東大出身の方も三人いたり、いろいろと混じったんですよ。その

人たちが毎回意見交換するんだから大変だったですよ。最初に来たスイートマンさんという宣教師の方はすぐお病気になって帰られて、その後に、長島邦忠先生ご夫妻が神学校出たばかり、新婚でいらしたんです。いらしてとっでもご苦労なされたんですよ。それでも二年くらいいらして、それで辞められました。その後、前田豊先生が白石の方にいらしたのが呼ばれてこちらにいらっしゃるということになりました。

私も1959年にここに来て、そのときは世田谷の(現・日本福音キリスト教会連合)朝顔教会に籍があったもんだから、子ども二人を連れて毎週世田谷まで行ってたんですよ。朝顔教会に行けない時に新所沢教会にきていたんです。子どもが幼稚園に行く頃に前田先生が正式に教会の牧師任職されて、その頃から私はきちんと転籍してこの会員になったんです。

その頃、教会の近くに児童伝道学院というのがあったんですよ。アッタヴェーさんという外人の校長先生で、ちゃんと寝泊まりできる施設もあって、ご家族の住まいもあって、かなり広いところでした。そのスタッフで働いていた人が五、六人いたんですけど、その中の二人がうちの教会の教会学校に加わっていたんです。でも最初のうちは教会員の中で教会学校をやる人がいなかったんですよ。そこで他教派のその人たちにお願いしたという格好でした。その

児童伝道学院の人たちというのは、専門にそれを勉強していたから、それはそれは教材は豊富で、フランネルグラフで旧約の物語をされたりとか、腹話術をやったり、紙芝居を演ったり、もう本当に楽しかったです。子どもたちもものすごく多かったんですよ。他に遊びがないもんだから。もう教勢でいくと60名くらいいましたね。最初の頃、教材も改革派の教材がなかったので、日曜学校助成協会発行の「イエス様の教え」とか、日本聖書刊行会発行の「聖書教育」とか、教団の出版した「こどもさんびか」とかそういうのを使ってやってましたね。

### 最初のCSの様子（60年代頃）

CS教師がそのお二人の他に長いこといらっしやらなかったけど、やがて集まった会員の中からお二人くらい加わってくださったんですよ。それで前田先生はCS教師をまずバッチリ教育したんですよ。日曜日は毎朝、教師は8時に来て、担当者が三十分は次の教案の発表をするんですよ。それで教材がないもんだから自分たちで聖書を読んで、自分でどう教えるかっていうのを考えてきて、それを発表していました。そこに前田先生がいらして、助言をしてくださっていました。前田先生は教会学校自体には出られないんですよ。正月とかクリスマス、イースターそういう時だけは先生がお話をしてくださって、普段の教会学校は児童伝道学院のスタッフとCS教師に任せてとといった感じでしたね。それが1966年あたりの様子ですね。

1969年あたりになると今度は子ども達に「受けるよりも与える方が幸いである」という精神を指導して、海外伝道献金を始めたんですよ。一番最初、タイで宣教師を

なさっている森本憲夫先生に送りました。その次にインドネシアに送られた入船尊先生と大塚喜久蔵先生、大塚先生は短期間でしたが、お二人とも非常に交流が良かったですよ。入船先生もお手紙をよくくださいました。当時は子どもが多かったですから、献金も一回にあの当方で一万円、年間で海外宣教献金だけで九万円くらい送ることができたんですよ。それがずっと何年も続きましたね。入船先生が帰国したら必ず新所沢にいらして子どもたちや大人の伝道集会なんかで奉仕していただいていたね。それで先生ととっても親しくなりました。修養会の時に先生にきていただいたこともありましたね。海外だけではなくて、静岡盲人センター、聖恵授産所（現聖恵会）、こういうところも献金をこの頃からずっと継続してしましたね。

面白いことは、七五三ってあるでしょ。七五三の時に「本当の神様は教会なんだから」って前田先生おっしゃって、教会学校に来ている子どもたちに向けて、「七五三には教会にぜひいらっしやい」ってことを言ったら、みんな七五三のおめかしして、お母さんもおめかしして来られました。それがとっても楽しかったらしくて、大勢いらっしやるようになって。それがまた伝道の場にもなって、お母さんたちにもとても良かったと思いますね。

七五三の会の時はお母さんたち面白かったですよ。先生が一人ずつ子どもを祝福して手を置いてあげると、お母さんたちももう嬉しくって「ありがとうございます。先生これから〇〇神社の方にも行きます」って。日本人ってなんでも信じちゃえば良いつて理解でしょ。それに対して前田先生は直接は何もおっしゃらなかったですね。

お母さんたちが行ってしまってからちょっとおっしやってましたけれども、でもお母さんたちに直接はおっしやらなかったですね。「ああそうですか」とか微笑んでましたよ。

その頃の教勢はね、男子26名、女子35名、合計61名って書いてありますね。

その子ども達が今度だんだん成長していった、八児くんが、信仰告白をして、高校生会を作ったんです。そこでギターをやったり聖書を学んだり、いろいろして、その頃またどんどん増えてきて、合計で75名になりましたね。この頃やっぱり子どもたちは教会が楽しくてしょうがなかった時代なんですよ。それで今度中高生が増えてきたんですよ。中高生だけで89名、男性18、女性71だから女性が多いですね。考えられます？ 中高生だけよ。

何が楽しかったのかといえば、子ども達の作文を見ればわかるんですけど、何かすごく素直に神様を信じているのね。それと教会の隣の公園が今みたいに整備されていなくて、雑木林みたいな感じで、そこでよく遊んでいましたね。なにかのときにはそこをつかって遊んでいました。夏期学校なんかも教会で雑魚寝して、一泊したんですよ。公園で花火をあげたり、スイカ割りしたり、そういう楽しみもいっぱいありましたね。

### 中高生の時代（70年代頃）

当時私は「ラボ」っていう英語で遊んで学ぶ会をやっていました。そこからも教会にいっぱい来たんですよ。そこで夏一ヶ月ホームステイをしていたんです。その頃まだ珍しいことでした。そのエクステンジで、向こうからも外国人の子どもがホーム

ステイに来たわけです。その子どもたちも全部合宿に入れて、ちょうど今中会の春の中高生キャンプをやっていますけれど、奥多摩福音の家とか、五日市青年の家とかで、アメリカの子どもも加わってすごく楽しくやりましたね。中学生だけの歓迎会のそよ風ハイキングで天覧山に行ったりとかね。

その時も海外宣教献金は送ってますね。七五三の感謝会の時は、献金を止揚学園に送り出しました。止揚学園の働きもご父兄にお話ししたりして、これもずっと続きましたね。

この年、1974年に川杉くんと木村恭子さんが受洗してますね。高校生でした。木村恭子さんは、お母さんが私のお友達でした。（現花小金井教会の）五十嵐姉と木村恭子さんのお母さんと私、三人が割と親しくしていて、彼女は小さい頃から教会に来ていました。ラボにも来ていましたね。前田先生のお子さんとか五十嵐くんとかもみんな来ていました。川杉くんは中学生くらいから来始めたんです。中学生後半でしたかね。静かな人でしたね。久保田先生も中学生になってからじゃなかったかな。

1975年はもう子どもCSだけで94名。男21名、女68名、子ども感謝会は大人11名、子ども13名、そういう子たちがまた教会に来るようになったんですよ。どんどん増えて、クリスマスにキャロリングやったんですけど、小学校4年生以上だけで120名でした。周辺の病院とか、交番とか、駅前とか、教会員の家とか回りました。それが名物になって、みんな楽しみにして、「クリスマスにまたやる？」とか言っていましたね。子ども達の声って綺麗じゃないですか。教会員のうちに行くとクッキーとか飴とかもらって、なんかそれがすごい楽しかった



「暗唱聖句カード」と「教会学校だより」巻頭言を書いているのは、左から前田豊牧師、入船尊牧師、伊藤（現木村）恭子牧師、川杉安美牧師、久保田証一牧師

みたいですね。今では考えられないようなそんな時代がありました。

1975年から木村恭子さんがCSの教師をやってますね。中高生の修養会が五日市青年の家で38名参加しているのね。中学生だけの伝道集会ってのもやってるんですよ。それも42名も来てるんですよ。クリスマス祝会は90名って書いてある。それで教会がちょっと狭くなって、近くだった教会員の伊藤淑子さんの家のお二階とか事務所とかをお借りして、中高生のバイブルクラスみたいのをやったりしてましたね。

これ「教会学校だより」と言って、1970年から8年間、父兄向けに教会学校でやっていることを報告して渡していました。これ見るとそれこそ川杉くんとか、久保田くんとか、みんなわかるんですけどね。

1977年になったら、久保田証一くんが受洗するんです。その年は当時の八王子青年

の家で中高生の夏期学校合宿っていうのをやってるんですね。それも36名も加わってますね。それでそのキャンプをやったときに生徒が研究発表してるんですよ。それが教会学校だよりに載っていますけど、すごく力になったと思いますね。川杉先生も久保田先生も書いてますよ。これを書かせたことっていうのは良かったと思うんですよ。ただ受身で聞くだけじゃないですから。子どもたちはみんな立派なことを書いてるんですよ。聖書研究なんかね一人ずつ聖書を自分でしっかり注解書かなんか見てきて、それを発表するんです。それを聞いた子どもたちが「私たちもそういうふうになりたい」とか感想文に書いてあったりしてね。1970年代ってのはそういうんですね。この「教会学校だより」は良かったですよ。親にいい伝道になりますよ。お母さん方も教会について正直な感想を書いています



写真は前列中央が片桐京子姉、右が川杉安美牧師、後列右から木村恭子牧師、八児將文伝道所委員です。木村先生の牧師就職式にて

ね。

このくらいの時の中高生の会に集まっている子達の書いた文章を見たら、なんか今の子は幼いような感じがしますね。すごいしっかりしていますよ。難しいことをいっぱい発表しているんですから。中学生あたりで、「聖書について」とか、「主の権威について」とかみんなの前で発表しているんですけどね。うちの次男なんか立派なこと書いてるんですよ。今教会に行っていないんですけどね。当時、中学生の時に信仰告白

をしたみたいなのを行っただですよ。それを前田先生に言ったら、「中学生じゃまだダメだ。もう少しきちっと考えられるようになってから」って言われて、それで高校は私立行っちゃって、そこで部活やなんかが始まって、それでも教会から離れて行っちゃったんですよ。読むと立派なことを書いてるんですけどね、こんなこと言ってるじゃないって思うんだけど。タイミングが難しかったんですかね。

(2018年3月28日インタビュー)

信仰告白・受洗の証

## 洗礼へと導かれて

市川 太陽

2017年の降誕祭に洗礼をうけると決めた一番の理由は、本当の救い主であるイエス・キリストを信じ、救われ、神さまの子どもとされ、共に歩むことが、僕にとって本当に大切だという思いになったからです。確かに目には見えない霊なる方である神さまを信じるというのは、普通は偏見を持つ人が多いと思います。しかし、生きた真の神さまはこの世にただおひとり、人が作り出した神々……命のない偶像を拝むことは、神さまが最も悲しまれることです。僕は、真の神さまのみを知り、栄光をあらわし、喜び、神さまと人に仕えて歩む生き方がしたいと強く思っています。

僕はあまり物事を覚えていないくらいの小さい時からお父さんに連れられて、日本キリスト改革派教会名古屋岩の上教会へ毎週主の日に礼拝をささげに行っていました。家族では、お父さんだけがキリスト者で、お母さんは1年間に数回しか教会に行きません。しかし、気づいたら僕と、2つ下の弟は、9時から始まる子どもの教会から、お昼過ぎまで教会で過ごすのが主日の習慣となり、初めは何を言っているのか分からなかった聖書のお話も少しずつ理解できるようになりました。さらに去年は、相馬先生と一対一で学ぶ会も沢山あり、難しいところもていねいに教えてもらえました。今では、小さい時から教会へ通って神さまのことを学んでこられたことに、本当に感謝しています。

マタイによる福音書の18章21・22節、主イエスとペトロとの会話に、この様なものがあります。

**21節**：そのとき、ペトロがイエスのところに来て言った。「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。七回までですか。」

**22節**：イエスは言われた。「あなたに言うておく。七回どころか七の七十倍までも赦しなさい。」

僕はこの箇所を読んだとき、イエス様のような計り知れない大きな優しさで、誰の罪でも、どんな罪でも許せるような「人」になりたいと心から思いました。そして、それと同時にこのようなお方がこの地球上に一人の「人」としてお生まれになってくださったことにとても大きな喜びを覚えしました。

僕とは反対に、一生涯を終えるまで一回も教会に来ることがない人だっています。残念ながら生きている間に教会に行って、沢山のことが学べる人は多くはないのです。だからこそ、僕は正式な教会員・キリスト者になって少しでも多くの人たちにイエス様の事を、聖書の事を伝えられたらいいなと思っています。

これからも神さまのことを忘れることなく、神さまを第一に生活していきたいです。

(名古屋岩の上教会 中学2年生)



教会役員養成のために

## 執事職について(3)

相馬伸郎

### ⑥牧会的配慮を要する事柄を、牧師に知らせること。

執事は、5項で学んだように執り成しの祈りを重ねて歩みます。こうして困窮者に共苦する心が涵養され、牧会的配慮が必要な方を見いだす賜物も磨かれてゆきます。

執事は、その職制権能によって自分ひとりの判断でその方に寄り添うことが許され、求められています。執事会は小会の下請け機関ではありません。一方で、魂の配慮である牧会は、常にキリスト者の交わりである教会共同体を建てあげてを最終目標に据えてなされるべきです。得られた情報は決して無断で口外すべきではありません。しかし、執事とその会員とが個人的に親しい関係になることが最終目標ではありません。何より個人的情報は、他の執事や長老たちの配慮と認知が必要とされる場合が多いものです。その意味で、他の執事と共同して一人の方を配慮することも有益です。なお、配慮すべきことは分かっても、相互に困難な状況もあります。一人で背負おうとせず、早いうちから牧師に委ねることも執事自身を守り、その奉仕を实らせる場合もあります。

政治規準は何故、牧師に知らせることを強調するのでしょうか。それは、牧師こそ会員の魂の配慮のための最終的な責任者だからです。もとより小会は共同して会員の霊的状态を常に見守っていますから、治会長老に報告して下さってもかまいません。

ここで改めて、執事は牧師の職制をよく理解し、率先して協力することの大切さを確認しましょう。牧師は教会のあらゆる働きの指導者、教師です。会員一人ひとり、委員会の一つひとつが御言葉（教理：福音：キリストの支配）に貫かれているかを監督し指導すべき主の僕です。執事と執事会の働きにおいてその指導は決定的に重要です。多くの教会が主日の午後に小会と並行して執事会を開催します。うっかりすると牧師の指導が行き届かないことも起こり得ます。この課題を相互に認識することは大切です。牧師や小会が何をめざし、何を願って教会に仕えているかをよく理解し、協力しなければ、教会はどうなるのでしょうか。牧師や小会との意思疎通が祝福されれば、健やかな教会形成を加速させるでしょう。同時に職制権能を教会全体を鳥瞰して行使できる執事へと成長させるでしょう。

### ⑦伝道すること。

長老にも「教会員に率先して伝道すること」が規定されています。全キリスト者に伝道する特権と光栄が与えられています。伝道は、神の愛と恵み、救いと祝福とを共に分かち合うことです。伝道する心は、神と人への愛の心です。困窮する人への究極の執事的配慮は、神なく望みなく霊的に死に行く人々への伝道となるのではないのでしょうか。執事こそ、伝道するキリスト者の模範となることが期待されています。

### ⑧諸集会のために配慮すること

教会の活動は、主日礼拝式を中心にした諸集会によって担われます。主の民が集まるところにキリストの体としての教会は顕在化します。それだけに集会を怠るなら教会は弱くなります。(ヘブライ10:25) したがって執事は、率先して集会に参加しました促します。出席が困難な会員のためには、その理由を把握し、その克服のために励みます。信仰上の理由もあれば、家庭的、経済的諸事情もあります。何といても「助け」が得られない理由による欠席は克服すべきです。気軽に助けを求め、応答できる送迎システムを整えられるならば伝道の伸展にもつながります。

集まるためには場所が必要です。執事として居心地がよい空間を整頓することは基本的な奉仕です。筆者は9年間、ビルの三階の小さな部屋で開拓伝道を行っていました。確かに、集会を行う場所があるだけで感謝です。しかし未信者を始めハンディのある方々には極めて不親切な空間でした。それだけに新会堂を得るための祈りの一つは、土地を取得し会堂を得ることで未信者の方への心理的ハードルを下げることに。第二に、車椅子を利用する方がスムーズに出入りできる空間、会員に居心地のよい空間の創出でした。ただし道半ばです。玄関までのスロープを設置したのも高齢者用の椅子を設置したのも数年前です。しかしその小さな改善は、弱さを抱える会員(高齢者)からの賜物でした。教会の中に、そのような方がいて下さることは、教会堂のバリアフリー(障壁となるものをとりのぞくこと)を進め、ユニバーサルデザイン(障がい者にやさしい空間はそうでない人にとってもやさしいという真理にもとづき、製品や

サービスそして空間をデザインすること)を具現するエンジンとなるのです。まさに、「体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです。」(Iコリ12:22)

礼拝堂の掃除や椅子やテーブルの整頓、空調や音響、お茶菓子等の準備、なによりおもてなしに心を配って下さい。もとより会員や礼拝委員等にその奉仕を依頼すれば済む場合もあります。しかし、執事(とりわけ男性)は模範です。行き届いたお掃除はどれほど祝福された集いに貢献するでしょうか。まさに霊的奉仕です。

執事は、「耳の聞こえぬ者を悪く言ったり、目の見えぬ者の前に障害物を置いてはならない」(レビ記19:14)とあるように、差別的言動を止めさせ、障害物を取り除くために召された奉仕者です。常に自分の中にこびりつく差別の心に向き合い、これと闘うことへと召されています。真に居心地のよい空間とは、主が共にいてくださり、互いに受け入れあう所です。したがって、その場所を建てあげる執事職は、主の教会をふさわしく形成する要となるばかりか、日本と世界の諸課題をひもとく要ともなるはずです。確かに、現実には遠く険しいです。しかし、執事職を教会にお立てになられた主イエスの御心を信じ、教会の対外的ディアコニアの課題に取り組みましょう。計り知れないほど貢献できる可能性があります。

### ⑨教会内外の執事的必要を調査し、教会員に訴えること。

執事は、新聞の上で聖書を読んで欲しいと思います。つまり、教会外の執事的必要性について調査し、教会員に分かち合いつつ、それを担うように訴えることも託され

ているからです。確かに、所属する教会内のことであれば、通常の教会生活ができていれば、執事でなくとも執事的配慮は可能だと思われれます。しかし、教会外のディアコニアの課題を訴えるためには政治、経済、社会への高く深い関心を持つ必要があります。中大会、キリスト教関連諸団体施設、日本社会と世界の課題を知ることが求められています。

そもそも教会は、各個教会至上主義、つまり自分の教会だけの祝福を求めるなら聖書的な教会の形成は具現できません。私たちは「中会なくして教会なし」を言わば合言葉にしています。中会が各個教会、伝道所をキリストの教会たらしめるための「要」だからです。さらに「中会が教会である」とも言い得ると思います。したがって長老と共に執事もまた他教会、伝道所、中会さらには大会の働きへの関心を持つことが大切です。さらに、日本キリスト改革派教会だけが日本伝道を担い御国を伸展させているわけではありません。他教派への関心も必要です。また、近くにあるキリスト学校やキリスト教的諸施設に対しても関心を持ちたいと思います。最後に外国教会への関心です。執事は教会のディアコニアを実践する模範、ハブとなることが求められています。

さて最後に、次回に集中して取り扱う予定ですが、教会の対社会的責任つまり教会の対外的ディアコニアの課題について短く

触れます。教会はこの世界への執事的奉仕の務めを託されている共同体です。3.11以来、被災地支援活動の必要性が叫ばれ、その活動においてディアコニアというギリシャ語が私達の中で市民権を得るようになり70周年宣言には「ディアコニアは教会の本質をなす」という言葉が編まれました。教会の働きの本質であり必須の働きであることが闡明されたのです。教会は常に、他者と共に、他者のために存在します。教会は、「隣人」となろうと働くとき健康な教会でいられます。キリスト者と教会が隣人を見失ったとき、それはキリストご自身を見失っているのです。

教会の働きは多様ですが大きく分ければ四つの方向性（働き）に集約できます。車輪で例えれば上に向かう礼拝。下に向かう伝道（宣教）。横に向かう教育や交わり。もう一方のディアコニアです。これらはキリストの教会の固有の働きとして相互に異なるものです。同時に一つに結ばれています。その要、ハブになるのは「キリスト証言」です。地上においてキリストのお働きを代行する教会は、キリストの働きにのみ根拠を持っているのです。預言者、祭司、そして仕える王としての教会の働きがディアコニアを促します。ディアコニアに生きる教会の姿を地域社会が目撃するならば、新しい日本や社会を建設することに著しく貢献できるでしょう。

(名古屋岩の上教会牧師)

教会役員養成のために

## 長老職について(3)

吉岡契典

### III. 長老職の二つの系譜

#### 1. 長老派（プレスビテリアン）と改革派（リフォームド）における長老職の違い

前回紹介したア・ラスコにおける長老職の展開と、この連載では扱っていないフランス改革派教会の歴史を経て、改革派教会の長老職を中心とした教会政治についてのコンテクストは、スコットランドを中心とした長老派（プレスビテリアン）と、オランダを中心とした改革派（リフォームド）に分化していくことになる。

#### ①長老職の職務的区分の問題

長老職について、上記の二つの系譜には明確な違いがある。リチャード・デ・リッデル（Richard R. De Ridder、カルヴィン神学校宣教学教授、2011年逝去）は、長老派の職制について、「治める職務と教える職務を担う二種の長老職と、しばしばその職務が置かれられないこともあるものの、執事職がある」と述べ、また改革派の職制については、「多様な職務が実践されているが、牧師、長老、執事が、一般的に認知されている教会を構成する本質的な諸職務である」とまとめている。

長老派教会は、牧師職と長老職を、宣教長老と治会長老というかたちでひとつの長老職の中にまとめた。しかし、改革派教会は、一般的に、牧師、教師、長老、執事という四職を維持し続けた。

長老派における牧師職と長老職を包括する長老職の定義は、ロンドン亡命者教会におけるア・ラスコーの実践において現れた。

一方で、オランダ改革派教会においては、ウェゼル（Wesel）盟約（1568年）では、聖職者が同時に長老とも呼ばれ得るとされ、両者は明確に分けられていなかったが、エムデンでのシノッド（1571年）では、牧師と長老は、別の職務として明確に分けられている。

また、長老職と小会との関係については、長老派の教会政治においては、宣教を担う長老（いわゆる牧師）と治会を担う長老（いわゆる長老）の二種の長老たちだけが、小会への参加を許され、改革派の教会政治では、小会を長老たちだけの会議とはせず、それは執事職にも開かれたものとして規定されている。

#### ②長老たちによる牧会的訪問

改革派（リフォームド）においては、長老職は伝統的に、牧会訪問をその特徴としている。ドルトレヒトでのシノッド（1578年）は、その長老たちによる訪問を、「神聖なる働き」と称した。改革派の最初期の教会政治を示すウェゼル盟約（1568年）においても、既に治会のはたらきに勝る長老の役割として、牧会訪問が強調されていた。デ・リッデル（De Ridder）は、長老派（プレスビテリアン）における長老職については、「長老の統治する力（権威）に力点を

置く」とし、改革派（リフォームド）における長老職については、「長老たちによる監察（supervision）を強調する」とその特徴の違いを意識して記している。

しかしながら、このような両者の違いの強調は、ある意味においては正しいが、正確であるとは言えない。確かに、長老派の教会政治における、長老による治会の役割は強調されてきたが、その代表的な教会規程であるウェストミンスター教会政治規定（1645年）を含む歴史的な長老主義の教会規程は、訪問が長老たちの務めであると明確に語っている。

またこの事柄について、長老による牧会訪問が、改革派の系譜においては、主の晩餐の礼典と必ずしも結び付けられていないという点は、注目に値する。この種の、聖餐の礼典に直接結び付かない訪問の規定は、フラーフェンハーヘ（Gravenhage）のシノッド（1586年）に初めて見られた。しかしながら、長老派の教会規定においては、長老による訪問は、信徒が主の晩餐にふさわしくあずかるための準備教育としての訪問の一部に組み込まれ、規定されてきた。この長老たちの訪問の務めにおける長老派と改革派の違いは、何を意味しているのだろうか。

長老派の教会政治においては、誰が主の晩餐の礼典に出席でき、誰が参加できないのかということとは、とても重要な事柄であった。長老派の諸教会は、他教会との教理的また制度的違いを強く意識させられる環境に置かれる中で、信徒が正統的なプロテスタント信仰と正しく敬虔な信仰生活を守りながら、教会活動に積極的に参与することを、全ての教会員に強く求めていた。そこでは、形だけの教会への帰属は十分な

ものとは見なされなかった。その状況下で、信徒たちが、本当に活動的な、活きた教会のメンバーであるのかどうかを明らかにする試金石が、主の晩餐への参加であり、そのための長老たちによる訪問と試問だったのである。よって長老派の教会政治において、長老の治会の務めは、主の晩餐と結びつけられた訪問によって、実効化されていた。そこには礼典への出席を通じての信徒の管理と教会の秩序維持という動機があり、この実践の背景には、国家教会的な体制確立というビジョンが機能していた。

一方、改革派教会における訪問の実践からは、礼典を通じた教会の秩序維持ということよりも、教会のメンバーシップそのものがより重要であった。なぜなら、長老派教会に比して、改革派教会が置かれていた歴史的状況は、常に少数派、また迫害下という状況であったため、そこでは、礼典との関わりにのみ限定された訪問ではなく、より包括的な次元で教会員を支える牧会的配慮が必要とされ、その責任を長老たちが担当地域の信徒宅への定期訪問というかたちによって担ったのである。

### ③ RCJ の教会政治の源流

では私たち日本キリスト改革派教会（Reformed Church in Japan）は、教会政治上、上述のどちらの系譜を源流としているのだろうか。

日本キリスト改革派教会は、その名称はこそ Reformed Church であるが、その教会政治は、長老派教会（Presbyterian Church）の線に立っている。教会政治を形づくるために、RCJ は米国南長老教会（the Presbyterian Church in the United States）の教会規程を翻訳して採用した。よってそこ

での長老職も、基本的に長老派における長老職を土台としている。しかしながら、1953年に完成したRCJの教会規定は、その後改訂を繰り返しながら、改革派(Reformed)の伝統に立つ宣教師たちや教派からの影響を取り込んで来ており、現状においては長老派の土台に、改革派の教会政治の諸要素が盛り込まれて併存する形になっている。そしてこのような傾向は、決してRCJに特有のことではなく、全世界的な傾向と言うことのできるものである。つまり、PresbyterianとReformedの二つの系譜が歴史的に存在しつつも、同時に、長老主義という制度そのものは前回の連載で記したように柔軟性を持つ教会政治制度であるため、それはその制度を採用する時代や状況に適するかたちに変化することができたのである。

## 2. 長老職をめぐる現代の多様性

前項の終わりで語っている通り、長老職の在り方は現在の世界の改革派諸教会において、実に多様である。

1982年、ペルーのリマで「洗礼・聖餐・職務(Baptism, Eucharist and Ministry)」、通称「リマ文書」が、カトリックからペンテコステ教会までもを含めるエキュメニカルな教会共同体である世界教会会議(WCC)

の第6回大会において採択されたが、そこには、司教職や監督職、また使徒的職務などの、カトリック教会の職制理解に関する事柄を扱う言葉はあれど、改革派教会が重視する長老職への言及は見られなかった。このことから、改革派教会を中心とするプロテスタント陣営にとって、リマ文書は受け入れ難いものとなったのと同時に、改革派諸教会は長老職とは何かということを自問し、必要に応じてその定義を内外に言い表さなければならなくされた。その際、実際に各国の改革派諸教会における長老職についての調査が行われたのだが、そこで出された結論は、長老職は、調査したすべての教会で一様ではなく、多様な形態を採っているということだった。今日の改革派諸教会の現状では、例えばカルヴァンのジュネーブでの実践などの、かつての歴史の一時点に存在した長老職の一つの形態のみを取り出して、それを普遍化、また絶対化することはもはやできなくなっている。

このように、もちろん聖書に根差しつつ、長老職については二つの系譜が存在し、それらを源流としながら、現代においては、ちょうど私たちの教派に見られるようなかたちで、分化し、交じり合い、発展しているのである。(つづく) (板宿教会牧師)

聖書默想・説教展開例・分級展開例

---

10月7日 ダニエル書1章1～21節

【解説と黙想】

## ダニエルと友人たち

今回は、ダニエルという人物と、彼の信仰の姿について記します。ダニエルは10代半ばという若さで3人の友人たちハナンヤ、ミシャエル、アザルヤと共にバビロンの宮廷に連れて行かれ、捕囚の全期間をそこで過ごしました。ダニエルは、ヨシヤの治世にユダ王国で生まれました。誕生から捕囚までの約15年間、故郷ユダで過ごした日々が、ダニエルのその後を決定したと言われます。その時代はヨシヤ王の治世です。ヨシヤは紀元前628年に国から偶像礼拝を一掃するために立ち上がり、改革は紀元前622年の過ぎ越しにおいて頂点に達しました。このような全国的な宗教改革が推進されている頃、エレミヤが預言者として召命を受けました。しかし、ヨシヤ王の宗教改革は、その目的を十分に果たすことはできませんでしたし、エレミヤの預言者としての活動も、同時代の人々に歓迎されることはありませんでした。けれども、ヨシヤ王やエレミヤの働きが、ダニエルと3人の友人に大きな影響を与えたことは確かのようなのです。また、彼らの両親や家族を通してなされた信仰教育が、彼らの最も根本的な人生の土台となっていることでしょう。「創造主なる神への信仰は、決して環境によって左右されるものではない。むしろ、どのような環境であれ、それを乗り越えていくものである。大切なことは、『神との関係』であり、『神への従順』である」。そのような教えを通して、ダニエルは「神への恐れ」と「謙遜」という、彼の最も大切な信仰の特質を養ったのでしょうか。それは、彼を祈りへと導きました。彼はどんな時にも神の御心を問い、栄光を神に帰しました。異教徒の中にあってさえ、真の神に対する恐れ

と従順こそが自らの身を守り、すべての人への祝福の器として用いられる秘訣でした。

囚われの身であるダニエルと3人の友人は、強制的な力をもって迫ってくる異教文化の前にどのように歩んだのでしょうか。彼らは、真の神への礼拝を中心に置きながら彼らを取り巻く現実を受け入れることで、自分たちの礼拝する神の御力を仰ぎ見たのでした。

信仰は、ある一面では両親から教えられることで継承される賜物ではありますが、人が親から独立するとき、それだけでは真に生きることはできません。ダニエルにとって、バビロンへ連れて来られ、王の前に立たされたときに、神はもはや自分の両親の神ではなく、ダニエル自身の神となったのです。それは、異教文化のただ中でダニエルと共に立ち、生きてくださる神です。

ネブカドネザル王から突き付けられた厳しい条件と訓練は、実は本質的な神からの教訓だったのです。これを神からの訓練として受け止め、神に知恵と力を求めつつ過ごした3年を通して、ダニエルたちは、初めにバビロンの宮廷に連れ出されたときの彼らとは別人のように訓練された神の兵士、異教の宮廷に神によって遣わされる神の戦士として整えられていました。彼が異国の王に仕えることができたのは、神に仕えることをそのすべてとして歩んでいたからに他なりません。

今日、キリスト教会は、世俗文化の嵐にもまれています。ダニエルの信仰の姿とそれを導かれる主の恵みを学ぶことの意義は非常に大きいと思われれます。（小澤寿輔）

《参照聖句》 ダニエル書（新聖書講解シリーズ旧約17） 千田 次郎著

《教理問答》 「子どもと親のカテキズム」 問15、16



10月7日 ダニエル書1章1～21節

【説教展開例】

## ダニエルと友人たち

◇..... 単元のねらい .....◇

異国の地で神と共に生きる少年たちの信仰と志を学ぶことを通して、いかなる境遇に置かれても神の御心を第一として神に喜ばれる生き方を求めることこそ幸いな人生であること、そして、その決心を与えてくださるのは神ご自身であることを学びたい。

### 「御心の道を選び取る者」

教会学校に来ているお友だちの多くは小学生ですね。もし、みんなが中学生くらいの年（15歳くらい）のときに家族から引き離されて、全く知らない遠い国に連れて行かれて、そこでずっと過ごさなくてはならなくなったら、どうでしょう。怖くて寂しくて耐えられないかもしれないですね。今日の聖書のお話に登場するダニエルと3人の友人（ハナンヤ、ミシャエル、アザルヤ）は、まさにそのような人生に導かれることになったのです。

当時、ダニエルは、ユダという国に住んでいたのだけど、この時代のユダは、神さまの教えを守らず、偶像礼拝をし、神さまに喜ばれないことをする罪だらけの国でした。神さまは預言者エレミヤを立てて、ユダに向かって、「神に立ち返るように」と何度も語られました。けれども、人々の心は変わりませんでした。神さまは、ついにユダを裁くことになさいました。神さまは、ユダの罪に対する裁きのために、当時強力な勢力となっていたバビロンという国を用いたのでした。ユダの人たちは、ネブカドネツアル王によってバビロンに連れて行かれ、そこに住まなくてはならなくなりました。それを「バビロン捕囚」と言います。

捕囚は、なんと70年間も続きました。

ダニエルと3人の友人も囚われの身となり、愛する家族から引き離され、自分の国を後にして、異国の地に連れて来られました。そこは大人でも耐えられないような孤独と辛さの世界です。ましてや15歳そこそこの少年にとって、それはどんなに辛く、悲しく、耐え難いことだったでしょう。

でも、実はね、これまで起こったことも、これから起こることも、すべては神さまのご計画とお導きのもとで起こっているのです。神さまのご計画とは、この裁きの中で、ダニエルを神さまのご用のために召し、整えて、神さまの素晴らしい救いの御業を成し遂げるというご計画です。聖書箇所2節を読むと、「主は、ユダの王ヨヤキムと、エルサレム神殿の祭具の一部を彼の手中に落とされた」とあります。ユダに勝利したネブカドネツアルは、自分の力でエルサレム神殿の祭具を手に入れたと思ったかもしれませんが、けれども、神さまのお許しがなければ、ネブカドネツアルの勝利はなかったのです。ネブカドネツアルは確かに地上の帝国の支配者でした。しかし、彼はまことの支配者であられる主なる神の御手の中であって、神のご御心を実現するための道

具でしかありませんでした。すべては神さまのご計画のうちにあるのです。みんなも、そのことをよく覚えていてね。

異国の地バビロンに連れて来られたダニエルと3人の友人たちは、神さまのご計画によって、多くの捕囚の民の中から特別に選り出されて、大きな特権を与えられることになりました。王さまは、自分に仕える侍従長に「イスラエル人の王族と貴族の中から、体に問題がなく、見た目が美しく、何事にも才能と知恵があり、知識と理解する力があり、宮廷に仕える能力のある少年を連れて来なさい」と命じました(3節4節)。すると、ダニエルと3人の友人が選ばれて、宮廷に連れ出されました。王は、宮廷の肉類と酒を毎日彼らに与えて、3年間教育してから自分に仕えさせることにしました(5節)。毎日美味しい肉料理が食べられたら、みんなだったら嬉しいかな。私も嬉しいです。でも、その宮廷の肉類と酒というのは、その国の偶像に捧げられて汚れた食べ物だったのです。まことの神さまを信じ、神さまの前に正しく生きていたダニエルは、そのような汚れた食べ物や飲み物によって自分を汚すまいと決心し、そのようなことはさせないで欲しいと、自分たちを世話してくれる侍従長にお願いしたのでした。

しかし、よくそのようなことをダニエルは言えましたね。これは王さまの決めたことです。下手をすれば、「王の決めたことに従わないのか」と言われて殺されるかもしれません。しかも、それは美味しい肉料理が毎日食べられるという最高の条件です。しかし、ダニエルにとって、これは単に何を食べるか、何を飲むかの問題ではなく、信仰の問題だったのです。もし、「これくらいならいいだろう」と言って、良く

ないと分かっていながら出されたものを食べたら、その後のすべてを失っていたことでしょう。これは大きな戦いだと思います。自分の信仰を守り通すために、ダニエルは、命をかけて神さまに喜ばれる生き方をする決心をしたのでした。そして、その決心を喜ばれた神さまは、彼の歩みとともに働かれたのでした。ダニエルは侍従長に提案しました。「どうかわたしたちを十日間試してください。その間、食べる物は野菜だけ、飲む物は水だけにさせてください。その後、わたしたちの顔色と、宮廷の肉類をいただいた少年の顔色をよくお比べになり、その上でお考えどおりにしてください」(12、13節)。侍従長はそれを認めました。神さまのお計らいによって、侍従長はダニエルに好意を示し、親切にしてくれたのでした。10日後、食べる物は野菜だけ、飲むものは水だけの4人の顔色はどうだったでしょう。彼らの顔色と健康は、宮廷の肉類と酒を食べていたどの少年よりも良かったのでした。こうして彼らは偶像に捧げられていた食べ物や飲み物で身を汚す危険から自分たちを守り、まことの神さまへの信仰を守り通すことができたのでした。ダニエルたちにとって、生きる上で最も大切なことは、どこに住んで、何を着て、何を食べるかといった問題ではなく、「神さまとの関係」であり「神さまに喜ばれること」でした。新約聖書のコリントの信徒への手紙一10章31節には、「だから、あなたがたは食べるにしろ飲むにしろ、何をするにしても、すべて神の栄光を現すためにしなさい」ありますが、彼らはまさに、その通りの生活をしたのでした。ダニエルと3人の友人は、神さまに信頼し、神さまの栄光のために、野菜と水だけを食べるという生活を選びま

した。そして、それをご覧になった神さまは、彼らを喜ばれ、豊かに祝福してくださいましたのでした。

ネブカドネツアル王は、ダニエルと3人の友人に食べ物を与え、教育しようとしてしました。しかし、実際に彼らを教育したのは、神さまご自身でした。神さまは、この4人の少年に、知識と才能と、文書や知恵も与えられました。3年の訓練の期間が終わり、ネブカドネツアル王の前に連れ出されて王のテストを受けてみると、この4人に並ぶ者はほかに誰もいませんでした。それどころか、国中のどの占い師、祈祷師よりも10倍も優れていたのです。こうして4人は、王のそばに仕えることになりました。神さまは、とくにダニエルに、どのような幻も

夢も解く力もお与えになったのでした(17節)。この賜物を通して、これから後、色々な夢や幻を解くためにダニエルが特別に用いられるようになるのです。

今日の聖書の言葉がぼくたち私たちに教えようとしていることは何でしょう。それは、私たちがどこに行こうとも、何をしようとも、神さまの御心を第一として、神さまに喜ばれる生き方をする人生こそ、幸いな人生であるということです。みんなも、これから先、どこに行こうとも、何をしようとも、いつも「私は何をしたらいいですか?」「神さまは私に何をさせようとしておられるのですか?」と神さまに聞きながら、神さまに喜ばれる人生を歩みましょう。

(小澤寿輔)

---

《今週の暗唱聖句》

だから、あなたがたは食べるにしろ飲むにしろ、何をするにしても、すべて神の栄光を現すためにしなさい。(コリントの信徒への手紙一10章31節)

10月7日 ダニエル書1章1～21節

【幼稚科】

## ダニエルと友人たち

### 〈ねらい〉

神さまは、大変なときも、神さまを信じ従う人に知恵を与え、導いてくださる。

### 〈展開例〉

とても緊張したときや、強い子たちが自分やお友だちに無理やり何かしてきたとき、あなたはどうしますか？

強い子たちに合わせて、言われたとおりのことをする子もいるかもしれません。もしかして喧嘩をしたたかう子もいるかもしれません。緊張したときは、何もできなくなるという子もいるかもしれませんね。

15歳くらいだったダニエルさんやそのお友だちはどうしたのでしょうか。信じている神さまが違って、しかも自分たちよりずっと強い人からの命令でも、その命令で「おかしい」と思ったことは、その言うとおりにしていませんでした。その強い人の悪い心や悪いものから自分たちを守るために、神さまから知恵をもらって賢く行動していましたね。

なぜそれができたのでしょうか？ 王さまや強い人がどんなに偉くても、自分たちはまずは誰のいうことを信じて誰の言うとおりにしなければならぬかをダニエルさんやお友だちは知っていたからです。それは誰でしょうか？ そう神さまですね。

お友だちやそのほかの人との間でどんな大変なときも、「神さまはどうお考えかな、何を望んでいるかな」と、いつもお祈りしながら考えて、その神さまの「ご意思」に従えるよう練習をしていきましょう。教会学校に来ているみんなは、それができるようになるはずです。

もう、イエスさまも生き方で教えてくれていますね。教会学校で聖書のお話を聞いて、お祈りをして、神さまを賛美しつづけてみましょう。そしてそういうお友だち、仲間が増えるようにお祈りしていきましょう。いつもあなたと共にいる神さまが、きっとダニエルさんたちのように、知恵を与え、賢く行動できる、素敵なお友だちになれるように導いてくださいます。

### 〈祈り〉

すべてをつくられたすばらしい神さま。神さまはあなたを一番大切に思いあなたに従う人に、すばらしい知恵とたくさんの祝福をくださいます。もっともっとあなたのことを知って、もっともっと愛し大事に思うことができますように、わたしたちを導いてください。

### 〈やってみよう〉

♪ハレル、ハレルヤ、主をほめよ♪をうたいましょう。

10月7日 ダニエル書1章1～21節

【小学科上級・中学科】

## ダニエルと友人たち

### 1. ダニエル書1章1～5節を読みましょう

①ネブカドネツアル王の捕虜として連れてこられた若者のつとめは何でしたか。

②王は、将来自分に仕えさせるために、何をさせましたか。

### 2. ダニエル書1章6～16節を読みましょう

③ダニエルはどんなことを侍従長に願い出ましたか。

④依頼を受けた侍従長はどう思ったのでしょうか。

### 3. ダニエル書1章17～21節を読みましょう

⑤ダニエルは、自分が幻や夢も解くことができると知って、この能力がどこからきたのかと思いましたが。

⑥ダニエルは捕虜として敵であるネブカドネツアル王に仕えることとなりましたが、優れた能力を発揮しました。敵のために心を込めて仕えることをどのように考えますか。

10月14日 ダニエル書6章1～29節

【解説と黙想】

## ダニエルとライオン

### I. ダニエルの時代

ダニエル書はバビロンに捕らわれたダニエルらの信仰の戦いの物語と彼に与えられた幻から成っています。信仰者ダニエルは神から豊かな賜物を与えられて不思議なことに、異教国にかかわらず高位行政職として用いられました。栄華盛衰を繰り返す国際関係の中でダニエルはいつも主に信頼して人生を歩んだのでした。

さて、南ユダを滅ぼしたバビロニアはアケメネス朝ペルシャのキュロス王によって滅ぼされ、歴史の主人公はバビロニアからペルシャに移ります(紀元前538年)。キュロス王は捕囚中のユダヤ人を解放しエルサレム神殿の再建を許したことで有名です。キュロスは戦死し、その後を継いだ息子のカンピュセスはエジプトまで遠征をしました。その間に政変が起こり、後を継いだのがダレイオス王(前522～486年)です。彼は、東はインダス川、西はエーゲ海、南はエジプトまで広大な領土を支配しました。全国を20州に分けサトラップと呼ばれる総督・知事を任命しました。さらに王の親族をサトラップの見張りとして「王の耳」「王の目」と呼ばれる役職で配置しました。ダレイオスは火を拝む拝火教ゾロアスター教の信者だったようです。

ただしある批評的聖書学の立場からは以上のような歴史的事実と照らして、ダニエル書は架空の記事を書いていると主張する

ものもあります(たとえば聖書ではダレイオス王の即位は62歳、しかし歴史のデータでは28歳など矛盾があるというのです)。しかし聖書のいうダレイオス王は歴史上有名なダレイオス王とは別人ではないかと推測されます。ペルシャは地域ごとのある程度の自治・独立を認めていたからです。つまりダレイオスはペルシャのある地域の摂政だった。ただし歴史上の記録はない。私たちは聖書に書かれているという事実を素直に大切にすべきです。

### II. 法と法のぶつかり合い

ダニエルが王から特別な寵愛を受けたことで、同僚たちは嫉妬し、彼は命を狙われるようになります。ただしダニエルにはどこにも落ち度がありませんでした。そこで同僚はダニエルの信仰に目を付けました。ダレイオス王以外を拝む者は、獅子の穴に投げ込まれるという法律を作ったのです。

新たなこの法律は十戒の第一戒と衝突を起こします。王の法律を無視すれば命が危ない。しかしダニエルは「いつものとおり」(11節)部屋の窓を開けて、神に祈りました。信仰を内面の問題、つまり心の問題に矮小化してはいけな。心も身体も信仰を表すのです。たった30日の禁止期間なのだからダニエルは部屋の隅に隠れて心の中だけで祈ることもできたことでしょう。しかし彼は「いつものとおり」祈りました。(西堀 元)

《教理問答》 「子どもと親のカテキズム」問62、63

10月14日 ダニエル書6章1～29節

【説教展開例】

## ダニエルとライオン

◇..... 単元のねらい .....◇

人どうしの関係だけがすべてなら、地位が上の者は傲慢になり、下の者は上に媚を売るだろう。また地位が同じなら、互いを比較し足を引っ張り合うのが罪の現実ではないだろうか。しかし信仰者はそのような争いから自由である。神がそれぞれに賜物と働く場所を与えられていることを知っているからだ。本当に自由な人生とは神の御前に生きることである。

### 「ライオンの穴に放り込まれたダニエル」

皆さん、ドラえもんは見ますか。のび太君は勉強がすこし苦手です。ドラえもんはネズミが怖い。ジャイアンは乱暴なところがありますね。スネ夫君はいつも自慢していて嫌な感じがするかもしれません。のび太君、ドラえもん、ジャイアン、スネ夫君みんなどこか弱点があるんだと思います。でもデクスギ君はどうでしょうか。勉強もできる。スポーツもできる。スタイルもよくてかっこいい。だって名前のおりデクスギ君だからしょうがないですね。

みんなの友だちにデクスギ君のような人がいたらどう思うかな。ちょっとうらやましいと思うんじゃないかな。聖書の中にもデクスギ君のような人がいました。それはダニエルという人です。ダニエルさんは少年の時、イスラエルの国がバビロンという国に滅ぼされてしまつて自分も奴隷として捕まえられました。でも神さまの恵みでも頭もよくて今でいうところのイケメンだったので、王さまに仕える訓練を受けて大臣にまでなつたのです。

ずっと外国で暮らしてダニエルは年をとつたときダレイオスという王さまに仕えることになりました。とても大きな国で

120人の総督がいました。日本の都道府県数は47だからきっと日本よりもっと大きい国だったと思います。120人の総督のさらに上に3人の大臣がいました。ダニエルは3人の大臣の中の一番でした。それは神さまがダニエルを祝福してくださつて沢山の賜物をくださったからです。でもダレイオス王は本当の神さまのことは分かりませんが、ダニエルがとにかく素晴らしいと思ったので他の誰よりも大事にしていました。

それを見ていた他の大臣や総督たちはダニエルが憎たらしくてなりません。どうしてダニエルだけあんなに王さまからひいきにされて大事にされるんだ。俺たちだっているんだぜって思ったでしょう。何とかして一番のところから引き下ろしてやりたいとみんなで集まって相談をしました。でもダニエルにはまるで欠点が見つかりません。だってダニエルはデクスギ君みたいな人だから。でもずーっと考えていたら良い方法を思いつきました。

そこで王さまのところに行きこう言ったのです。「王さまが永遠まで生きてほしい。一つの禁止を定めてください。これが

ら30日間ダレイオス王さまのほかを拝んだり願い事をする人は、だれであってもライオンの穴の中に投げ入れる」と。王さまは少し考えたと思いますが、自分が大事にされるのは悪くはないと思って大臣たちのもってきた法律を作ることに決めました。

さて、ダニエルさんはどうなったでしょうか。この法律をきいて恐ろしくなったでしょうか。これまでずっとダニエルさんは自分の家の二階の窓を開けて、神さまにお祈りを一日に三回していました。だからもしもダニエルさんが神さまにお祈りをするなら、法律を破ったことになって、ライオンの穴に入れられてしまいます。でも逃げ道はありました。王さまの命令はだいたい一か月くらいのことだったのでその間だけこっそりとみんなに見えない場所でお祈りをすればいいのです。

みんなはどう思いますか。自分のいのちが取られてしまうことが分かったら、神さまを裏切るわけではないから、心の中でこっそり礼拝をすればいいんだと思いませんか。ダニエルは自分たちユダヤ人がもうすぐ外国の支配から助けられることも知っていたのです（9章1節以下参照）。なおさらちょっとの間だけ神さまを心の中で拝めばごまかせるはずです。

でもダニエルはそうは考えませんでした。十戒の一番はじめ「あなたには、わたしをおいてほかに神があつてはならない」という言葉をダニエルさんは信じていまし

た。そしてダニエルさんは神さまを信じるということはただ心の中で信じるだけでなく、どういう風にふるまうかも同じくらい大事なことをしていました。だからダニエルさんは恐ろしい法律が出た後も神さまを信頼し「いつものとおり」二階の窓を開けて祈ったのです。

さて、他の大臣たちはダニエルのことをしっかりと見張っていて、ダニエルが法律を破ったことを王さまに報告します。王さまは大変心が苦しくなります。だって自分の大好きなダニエルをライオンの穴に投げ込まないといけないからです。この国では王さまでも一度作った法律を変えることはできませんでした。王さまはダニエルを助ける方法を一生懸命考えましたがどうにもなりません。ついに時間切れ。とうとうダニエルはライオンの穴に放り込まれたのです。

王さまはその夜、眠ることができませんでした。徹夜をした王さまは朝日が昇り始めるとダニエルの入れられた穴に走っていきます。そして叫んだ。「ダニエル！ ダニエル！ お前の神さまはライオンから助けてくれたのか！」。穴から声がしました。「神さまが天使を送ってライオンの口をふさいでくれたので何が何もないですよ！」。王さまは嬉しくなってダニエルを穴から引き出させました。何のケガもありませんでした。彼は神さまを信頼していたからです（24節）。（西堀 元）

---

#### 《今週の暗唱聖句》

「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる」（マタイによる福音書6章33節）



10月14日 ダニエル書6章1～29節

【幼稚科】

## ダニエルとライオン

### 〈ねらい〉

神さまは神さまに従う人を必ず守られることを覚える。

### 〈展開例〉

お友だちは先生からいつもほめられていいなあ。あの子はお父さんお母さんからチヤホヤされてうらやましい、なんか面白くないなあ。そんなことを思ったことはありませんか？ そんなとき、あなたはどのようにしているでしょう。逆に、あなたがうらやましいなあと思われたり、それでお友だちやきょうだいにいじめられたこともあるかもしれませんね。

ダニエルは、敵の国の王さまの下で、神さまからいつもよい考えをもらって行動していたので、偉い大臣さんになって王さまに特に気に入られていました。こうなると、同じ大臣さんたちは面白くないですね。そこで、その大臣さんたちは悪い心が働いて、ダニエルさんが守れない命令をわざと王さまにださせたのでした。それは、ダニエルが一番大事にしている「神さま」ではなく、「王さま」を一番にしないと、ライオンのいる穴に投げ込むというものでした。ライオンは檻がなかったら人を殺すおそろしい力がありますね。

さて、ダニエルはどうしたでしょう。どんな怖いことを言われても、王さまや周りの人たちの目を気にするよりも神さまが一番大事にして、いつもと同じく窓を開けて神さまにお祈りし賛美して礼拝したのでした。そのことで、ライオンが何匹もいる穴に投げ込まれてしまったダニエル。ダニエルを気に入っていた王さまも、気が気では

ありませんでした。

ダニエルはどうなったのでしょうか。素晴らしいことに、神さまが天使を送って、ライオンの口をふさいで、なんとどこにもケガをせずに無事に救いだされたのでした。逆に、ダニエルを痛い目に合わせようとした大臣たちはみんなライオンたちに殺されてしまい、かえってダニエルの信じるまことの神さまが、国中でほめたたえられたのです。

このことはどうして起こったのでしょうか。ダニエルは、神さまなら助けて救ってくださいと信じて大丈夫と思っていたから守られたのです。このように、神さまは神さまを信じて「神さまに」従う人を必ず守ってくださいます。

今わたしたちには神さまであるイエスさまも聖霊さまも与えられました。ダニエルがいた時よりももっと神さまと近くなっています。だから、自分の心の中だけでなく、こわがらずに、「神さまが、イエスさまが一番」と大声で言いましょ。

### 〈祈り〉

愛する神さま、いつもぼくたちわたしたちが、ダニエルのように、神さまを一番にして、神さまの言葉を聞いて神さまに従っていくことができますように。大変なときや悲しいときも神さまに助けを求めて頼ることができるようにさせてください。アーメン。

### 〈やってみよう〉

こどもさんびか♪イエスさまがいちばん♪をうたってみましょ。

10月14日 ダニエル書6章1～29節

【小学科上級・中学科】

## ダニエルとライオン

### 1. ダニエル書6章1～9節を読みましょう

- ①大臣や総督はなぜダニエルを陥れようとしたのでしょうか。
  
- ②ダニエルの敵たちが見つけた、ダニエルの唯一の弱点は何ですか。また、これは本当に弱点だったのでしょうか。
  
- ③ダニエルを陥れるために作った法律はどんなものでしたか。

### 2. ダニエル書6章10～18節を読みましょう

- ④ダニエルは王様を拜むように命令されて、どうしましたか。
  
- ⑤ダニエルが、わざと窓を開けて祈り、賛美したのはなぜですか。

### 3. ダニエル書6章19～29節を読みましょう

- ⑥獅子が、ダニエルを襲わずに陥れようとした者たちの骨までかみ砕いたのは、なぜだと思えますか。
  
- ⑦ダニエルに優れた霊が宿っていたというのは、どういう意味でしょうか。

10月21日 ダニエル書12章1～13節

【解説と黙想】

## 世界の終わり

10章20節から続く、一連の預言の最後の部分である。

**1節～4節：大患難、救い、死者の復活の告知、預言の封印。**

**1節：**国が存在して以来、かつて無かった程の苦難の中、大天使長ミカエルが、神の民を守るために立ち上がる。しかし、その時に、あの書に名前が記されている人々は皆、救われる。『あの書』とは、「命の書」のこと。(出32：32,33、イザ4：3、詩69：29、フィリ4：3、黙3：5,13：8,17：8,20：12,15,21：27)。

**2節：**『地の塵』とは「墓」「陰府」の両方を意味する。『眠る』とは「死ぬ」ということ。『目覚める』とは「復活する」ということ。復活の告知は、旧約では他に一か所のみ(イザ26：19)。「ある者は永遠の命に」、「ある者は永遠の恥辱と憎悪に」甦るのである。『憎悪』に関しては、新天新地の預言(イザ66：24)に同じ言葉がある。

**3節：**『目覚めた人々』とは、神様によって悟りを与えられた、「賢者」。その人達は、大空の光、太陽のように輝かされる。『多くの者の救いとなった人々』は、「多くの者を義に導いた者達」と理解されている。直訳は、「義とされた多くの人々」だと思ふ。彼らは永遠に星々のように輝かされる。

**4節：**『終わりの時』は、終末の完成の時。全く同じ言い方が9節に現れる。『秘め』『封じておく』とは、終末まで、預言を保管するための命令。『動揺する』とは、右往左往する様を表す。

**5節～10節：結びの幻。**

**5節：**『二人の人』は天使的存在。天使的存在は、川の両岸に一人ずつ立って、終末的歴史展開において、役割を果たしている。

**6節：**『あの麻の衣を着た人』とは、10章5、6節に登場した超自然的な姿をした天的存

在、すなわち、主イエス・キリストだと思われる。天使は、『あの麻の衣を着た人』に、大患難がいつまで続くのか尋ねている。『驚くべきこと』とは大患難のことである。

**7節：**『あの麻の衣を着た人』は『永遠に生きるお方』によって誓った。誓いは、通常片手だけだが、両手を上げることにより、厳粛さが強調されている。『永遠に生きるお方』は、父なる神様を指す。『一時期、二時期、そして半時期』は、何度も繰り返されている、長さの言い方(7：25,9：27)。『聖なる民の力が全く打ち砕かれる』とは、信仰者が絶望を経るということ。

**8節：**ダニエルは、聞いたものの、終わりの時に『どうなるのか』分からなかった。それで、天的存在(主)に尋ねている。

**9節：**しかし、天的存在(主)は、答えられない。それは、終末の時まで、封じられ、秘められたことだからである。

**10節：**信仰者は迫害を通して、益々清められ、白くされ、精錬される。『逆らう者』とは、神に逆らう「邪悪な者」のこと。邪悪な者は、依然として邪悪で、何も悟らない。しかし、『目覚めた人々』(v.3と同じ言葉)すなわち、神様によって悟りを与えられた「賢者」は、理解するであろう。

**11節～13節：最後の締めくくり。**

**11～12節：**アンティオコス四世のユダヤ教迫害の勅令から、神殿の浄化が成されるまでの長さであると言われるが、解釈は様々である。とにかく、最後まで耐え忍ぶことを勧めている(マタ24：13)。

**13節：**死ぬまで、神様の前に忠実に歩み、永遠の命に入るようにとの、ダニエルへの勧告。世の終わりの神の御国の完成の時に、神の祝福された割り当ての地に、甦るだろうと予告されている。(袴田清子)

《参照聖句》 マタイ24・25章、1コリント15章35～58節、1テサロニケ4章13節～5章11節、黙示録21・22章

《教理問答》 ウェストミンスター信仰告白32・33章、ウェストミンスター大教理問答86～88問

10月21日 ダニエル書12章1～13節

【説教展開例】

## 世界の終わり

◇..... 単元のねらい .....◇

世界の終りは隠されたままであるが、主に望みと信頼を置けば、恐れはないことを知る。

### 「世界の終わり」

最近、世界のあちこちで異常気象となり、各地で民族紛争や、宗教的な違いからくる争いについて、毎日のようにニュースになっています。そういうことを聞く度に、聖書が教えている、終わりの時が近いのではないかと思ってしまう。そして、どんな苦しみ待ち受けているのだろうと、暗い気持ちになってしまったりします。

聖書には、終わりの徴として、偽メシアが現われ「『わたしがメシアだ』と言って、多くの人を惑わすこと（マタ24：5）、そして、「戦争の騒ぎや戦争のうわさを聞く」（マタ24：6）こと、また、民族同士、国同士が互いに争い、世界のあちこちで飢饉や地震が起こる（マタ24：7）と、私たちに、前もって教えてくれています。

しかし、聖書は、私たちがいたずらに恐れを覚えたり、動揺したりするように、しようとしているわけではありません。むしろ、イエスさまは、「慌てないように気を付けなさい」と、動揺しないように勧められています。そういうことは起こるに決まっている、けれども、それは、終わりの時の「産みの苦しみの始まり」に過ぎないと言われています（マタ24：8）。「産みの苦しみ」というのは、お母さんが赤ちゃんを産む時に味わう痛み、つまり、お産の時の苦しみです。赤ちゃんは、お母さんにとって大切な新しい命です。産む時には、本当に苦しい思いをしますが、赤ちゃんが生まれると、お母さんは、それまでの痛みをすっかり忘れて喜びに満ちるのです。終わりの時も、それと同じだと、イエスさまは教え

ておられます。

世界の終わりの時は、神さまの御国が完成を迎える時です。確かに、イエスさまを信じる者たちは「苦しみを受け、殺される」と、まで聖書は書いています。そして、イエスさまの御名前のために（クリスチャンだということ）、私たちが「あらゆる民に憎まれる」と、はっきりと書かれています（マタ24：9）。しかし、それは、神さまが御国を完成へと導いておられる確かな徴なのです。

終わりの時には、多くの人がつまずき、互いに裏切り、憎み合うようになります。法律に反していても、平気で悪いことをするのが当たり前になるので、それまで愛を心に持っていた多くの人々は、もう愛さないようになると言っています（マタ24：11）。世界中がそのようになるので、そこに生きているクリスチャンもその苦しみから逃れられずに、酷い苦しみに耐えなくてはならないでしょう。

「しかし、最後まで耐え忍ぶ人は救われる」（マタ24：13）と、主イエスさまは言われます。

旧約聖書にも、終わりの時の出来事が預言されている所があります。今日読んだダニエル書12章は、その一つです。

イエスさまが生まれるずっと前に生きていたダニエルは、神さまから世界の終わりがどういうものであるか、神さまに幻で知らされ、それを後世に伝えるように命じら

れます。実は、ダニエルも、本当の神さまを信じているということで、迫害された人でした。まだ少年だった頃に、自分の国から遠く離れたバビロンと言う国に、捕まえられ、連れて行かれてしまいました。ダニエルは、本当の神さまを信じないバビロンの文化の中で、神さまの前に汚れたことはしないように努力し、信仰を守り通します。王さま以外礼拝してはいけないという命令が出た時も、それまでしていた真の神さまを礼拝することを止めませんでした。燃え盛る炎を通らされても、ライオンの穴に落とされても、神さまに対する信仰を捨てませんでした。神さまは、そのようなダニエルを、あらゆる艱難から救い出して、いつも助け、守って下さったのです。

確かに、終わりの時、この世界が「はじまって以来、かつてなかったほどの苦難が」続くと言われています。しかし、「その時、大天使長ミカエル」と言って、天使の中でも最も強い天使が、神さまの民を守るために立ち上がってくれます(1節)。そして、この時「命の書」、つまり、神さまが御国に受け入れられる人たちの名前を書き留めておられる本に、名前が書かれている人々は、みな救われると言われています。死んでしまった人が、復活させられ、ある人は永遠の命に、ある人は永久に続く恥と憎しみの的になる、と言われています。皆さんはイエスさまを信じているので、「命の書」に名前が書かれていて、永遠の命に甦らせられるのです。

真の神さまによって、悟りを与えられた、目覚めた人々、つまり、聖書の御言葉をよく学び、神さまの言葉をよく理解した人は、大空に光る太陽のように輝かされます。イエスさまを信じた私たちは、空に輝く星々のように神さまによって、永遠に輝かされるのです。

ダニエル書の預言には二人の天使と、主

イエスさまだと思われるお方が登場します。「麻の衣を着た人」と記されている人です。二人の天使の内一人が、「これらの大患難はいつまで続くのですか。」と尋ねると、「麻の衣を着た」イエスさまは、両手を上げて、父なる神さまによって厳かに誓われたのです。「聖なる民の力が、全く打ち碎かれると」、大患難は終わり、「天の御国が完成する」と。ダニエルは、もっと詳しく知ろうとして尋ねましたが、神さまは、それ以上は秘密にされました。

しかし、この世界がそれまで一度も経験したことの無い、大患難の中で、信仰者は益々清められ、白くされ、精錬されていくと言われています。神さまに逆らう人たちは誰も、何も悟りません。神さまに立ち帰ることをせず、依然として罪の中で、終わりの時が来ていることを悟りません。しかし、目覚めた人たちは神さまによって悟りを与えられ、理解するのです。

迫害や大患難は、信仰を持っている私たちをも、絶望させることでしょう。「しかし、最後まで耐え忍ぶ者は、救われるのです」(マタ24:13)。

そして、神さまの永遠の御国が完成した姿で、私たちの前に表れる時、「神が人と共に住み、人は神の民となる」のです(黙21:3)。「神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの涙をことごとくぬぐい取って下さる」(黙21:3~4)のです。「もはや死ななく、悲しみも嘆きも苦労もない」(黙21:4)のです。「神と小羊(主イエスさま)の玉座が都にあつて、神の僕たち(私たち)は神を礼拝し、御顔を仰ぎ見る」のです。

だから、信仰を強く持ちましょう。大天使長によって助けて下さる、神さまの御計画に信頼しましょう。悪に負けずに、善を行いましょう。必ず、「最後まで耐え忍ぶ者は、救われるのです」。(袴田清子)

---

#### 《今週の暗唱聖句》

しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。(マタイによる福音書24章13節)

10月21日 ダニエル書12章1～13節

【幼稚科】

## 世界の終わり

### 〈ねらい〉

神さまは神さまに忠実に歩む者を永遠の命の希望に生かしてくださることを覚える。

### 〈展開例〉

みんなは住む家や食べるもの、着る服がありますか？ 色々な安全が守られている日本では大体の人が「あります」と答えるでしょう。でも世界中をみわたすと、みんなと同じくらいの年の子ども、いきなり町を攻撃されて家族を失ってしまったり、食べ物がなかったり色々なことで自分が死んでしまうかもしれない怖い思いと闘っている人たちがいます。なぜこのようなことが起きるのでしょうか。神さまなぜですか？ と聞きたくなります。

ダニエルさんが預言者だった時代、神さまはダニエルさんに、“この世の中はこのままずっと続くわけではなくて終わりがあるよ”と教えてくれました。この世の終わりについて、神さまが教えてくださったこととはどんなことでしょうか。

世の終わりのとき、今までなかった程の苦しいことが起こるといふこと。でもそのとき、大天使の長であるミカエルさんが、神さまを信じるものたちを守るために立ち上がってくださること。つまり神さまの「命の書」に名前が書かれている人は救われるということが約束されています。世の終わりが来たとき、それまでにもう死んでしまった人たちも含め、この「命の書」に名前がある人たちは「永遠の命」に復活します。でも残念ながら名前がない人たちは、永遠に憎しみと悪を向けられてしまう存在

に復活するというのです。

そうなると、“命の書”に自分の名前が書かれているのか気になるよね。命の書に書かれるのはどのような人たちなのでしょう？ それは、神さまが独り子イエスキリストを十字架につかせ、死んで復活させてくださったこと、それは、この“わたし”を救ってくださるためだと信じた人たちです。

特に、神さまによって本当の意味を理解して歩んだ人は、大空の光、太陽のように輝かされること。そして特に多くの人たちを神さまの救いに導いた人は、永遠に星たちのように輝かされる、と神さまはダニエルさんを通して教えています。

神さまを信じ始めると、神さまのことも自分のことも、少しずつ、色々なことがわかってきます。神さまを信じたからこそ受けるいじめも、あるかもしれません。

それでも、最後まで神さまに素直に信頼して祈っていきましょう。神さまがきっと私たちが従うことができるようにさせてくださいます。今を生きる私たちにダニエルさんが神さまの言葉でそう励ましてくれているのです。

### 〈祈り〉

神さま、あなたを信じる人にはこんなに素晴らしいこと、希望が待っているのですね。ダニエルさんのように、素直に神さまに従うことができますように助けてください。

### 〈やってみよう〉

賛美しよう♪まもなくかなたの♪

10月21日 ダニエル書12章1～13節

【小学科上級・中学科】

## 世界の終わり

1. ダニエル12章1～4節を読みましょう。

①「その時」とは、何の時のことですか？

②「その時」には、どんなことが起きますか？

③あなたは、世の終わりがいつか分かりますか？

2. ダニエル12章5～13節を読みましょう。

④「麻の衣を着た人」とは、誰ですか？

⑤世界の終わりに、私たちはどうなりますか？

⑥私たちは、終わりの時までどのように歩めば良いですか？

10月28日 ローマの信徒への手紙1章17節

【解説と黙想】

## 信仰義認

宗教改革を記念する主の日ですので、ルターの福音主義的転換をもたらしたローマの信徒への手紙1章17節を取りあげます。

ルターの生きた時代も、教会は罪の赦しを提供していました。それは悔悛の秘跡によるものです。その赦しは①心による痛悔、②口による懺悔、③司祭による赦免宣言、④行いによる償いから成っていました。死や罪の問題で悩んだ人たちは、当時も多かったことでしょう。しかしルターが他の人と違ったのは、その問題の解決として当時の教会が与えていた在来の解決に満足できなかったことです。彼はそれによって自らの罪の赦しを確信できませんでした。

なぜできなかったのでしょうか。それはルターが人一倍罪の問題を深く把握していたからです。罪の問題を観念的ではなく、体験的・実存的に捉えていたからです。それゆえ、在来の教会が与えていた救いの理論は、彼のこの切実な求めに応えることができませんでした。宗教改革の出発点は、一人の人間の一人倍深い罪認識にあったことを忘れてはなりません。

そのルターに、罪の赦しの確信を与え、福音主義的転換をもたらしたのは聖書の御言葉でありました。ローマの信徒への手紙1章17節には「福音には、神の義が啓示されています」とあります。ルターはこの「神の義」を、能動的な義と教えられ、理解していました。すなわち、「神の義」とは、神が義であることであり、それゆえ神は罪人と不義な者を正しく罰したもうと考えたのです。

この理解はルターを苦しめました。彼は修道士として、誰よりも厳しく苦行に励んだのですが、平安を得ることができなかつ

たのです。ルターは当時を思い起こして後にこう言っています。「いかに欠点のない修道士として生きていたにしても、私は神の前でまったく不安な良心をもった罪人であると感じ、私の償いをもって神が満足されるという確信をもつことができなかった」。こうしてルターは「神の義」を憎んだのです。

このルターに転換をもたらしたのは、この御言葉の真の意味を把握することによりました。彼は17節の後半にある「正しい者(義人)は信仰によって生きる」に注目し、それと「福音には、神の義が啓示されています」との関係を考えました。その結果、この節が教えている「神の義」は、神がまったくの恵みによって信仰を通して私たちを義としてくださることを指していることに気づいたのです。

神は恵みによって罪人を義と認めてくださる。そこに「神の義」が現されるのです。それゆえこの「神の義」は、能動的な義ではなくて受動的な義です。人間は救われるために、その義を「受動的」に受け入れればよいのです。人は「神の義」を神から受け取り、その義によって人は義と認められるのです。その受け入れの手段が信仰です。それゆえまさに「それは初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです」。

ルターは、この御言葉が教える福音の真理を知った時、「今や私はまったく新しく生まれたように感じ、戸が開かれて、天国に入ったように感じた」と述べています。

この福音の喜び、救いの喜びが、現実一人一人のものになっているかが最も大切です。宗教改革を覚える意義は、ここにあるといえるでしょう。(袴田康裕)

《教理問答》 「子どもと親のカテキズム」問35、ウェストミンスター小教理問答 問33



10月28日 ローマの信徒への手紙1章17節

【説教展開例】

## 信仰義認

◇..... 単元のねらい .....◇

宗教改革は、1517年10月31日に、ドイツの修道士であったマルティン・ルターが95箇条の提題を發表したことに由来しています。これをきっかけに教会は大きな変革を余儀なくされ、社会も時代も変わっていきます。そのスタート地点に、小さな一人の人間が立っています。ルターを動かしていたのは一体なんだったのでしょうか。宗教改革の原点である信仰義認を、ルターの体験を通して学ぶことをめざします。

### 「正しい者は信仰によって生きる」

私たち改革派教会は、プロテスタント教会に属しています。プロテスタントとは、16世紀に宗教改革によって生まれた教会を指します。今日は、その宗教改革を記念する日です。みんながお誕生日をお祝いするように、プロテスタント教会は宗教改革を記念してお祝いするのです。

宗教改革を始めた人は誰でしょうか？それはマルティン・ルターというドイツ人です。500年前に生きていた人です。このルターさんは、法律家になるために大学で勉強していたのですが、ある時、彼の人生を変えてしまう出来事が起こりました。それは両親のいる実家から大学に帰る途中の出来事なのですが、激しい雷に襲われたのです。ルターさんはあまりの恐怖に神さまの御使いに対して叫びました。「助けてください。助けて下されば、私は神に仕える修道士になります」。雷に打たれなかったルターさんは、こうして大学を辞めて、神さまに仕える者となるために修道院に入りました。お父さんとお母さんは、とても怒って強く反対しました。なぜなら、ご両親はルターさんが法律家になって、将来の生活の面倒を見てくれることを期待していたからです。しかしルターさんは、神さまが自分を召されたと確信していましたから、反対を押し切って修道院に入ったのです。

修道院に入ったルターさんは、自分の罪の問題と向き合いました。自分が神さまの前に罪人であって、本当に赦されなければならないと思いました。そこでルターさん

は、一生懸命、自分の罪が赦されるための努力をしたのです。当時の教会は、自分の罪が赦されるためには、罪の告白をするだけでなく、その罪に見合った償いの業、よい行いが必要だと教えていました。ルターさんは、一生懸命よい行いに励みました。定められていた規則をだれよりも厳しく守りました。徹夜でお祈りもしました。罪が赦されて天国に入るためなら、どんなことでもしました。だれよりもがんばったのです。しかしどうしても、神さまが罪を赦して下さったと感ずることができませんでした。どれだけがんばっても、心に平安がなかったのです。

ですからルターさんは、いつも心に苦しみを抱えていたのです。罪が赦されていないということは、神さまが自分を怒っておられるということです。その恐怖がいつも心に満ちていました。

その時代の多くの人たちも、自分には罪があり、罪の赦しが必要だということは知っていました。そして、教会が教えたとおりに罪を告白し、償いをして、自分の罪は赦されたと思っていました。でもルターさんは、同じようにしても、どうしても自分の罪が赦されたとは感じなかったのです。それは自分の罪深さを深く見つめていたからでした。浅く見ていただけならば、悩むことはありませんでした。ルターさんは誰よりも深く、自分の心を見つめ、罪を知り、それに怒る神さまを感じて、恐怖感にとらわれていたのです。

あまりに元気がないルターさんを見て、ある先生が、自分ばかりを見ずに聖書を学ぶように言いました。そこでルターさんは、本格的に聖書を学ぶようになったのです。

ルターさんを苦しめていたのは、神さまの正しさ、つまり「神の義」でした。どんなによい行いに励んでも、神さまは完全に正しい方なので、正しくない人間を赦すことはされず、罰を与えられる。その基準で考えれば、ルターさんはどんなにがんばっても、神さまの正しさを満たすことはできないと感じたのです。神さまの正しさを知れば知るほど、その神さまの前における自分の罪を知らされました。自分はとても神さまを満足させられない。それどころか、神さまは自分に対して怒っておられると感じたのです。こうしてルターさんは、神さまの正しさを憎んだのです。神さまが完全に正しいお方であれば、自分の罪はどこまでいっても赦されることはないと思ったのです。

そうした苦しみを抱えながら、ルターさんはある時、ローマの信徒への手紙1章17節を学んでいました。そこには「福音には、神の義が啓示されています」と記されています。しかし後半には「正しい者は信仰によって生きる」と記されています。

ルターさんは、この聖書の言葉の意味を一生懸命に考えました。ルターさんは、神の義、神さまの正しさがいつも自分を苦しめていると思っていました。罪人を罰する正しい神さまを憎んでいました。しかし、聖書には、違うことが教えられていることに気づいたのです。

正しい人はよい行いによって生きる、と書いてあるものではありません。正しい人は信仰によって生きるを書いてあります。また、神の義は「初めから終わりまで信仰を通して実現される」とも書いてあります。行いではなく信仰だと聖書が教えていることに気づいたのです。

---

#### 《今週の暗唱聖句》

福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。「正しい者は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。(ローマの信徒への手紙1章17節)

そこから、聖書が教えている「神の義」の意味も、これまでルターさんが思っていたのとは違うことが分かりました。これまでは、神は正しいから罪人を罰する、それが「神の義」の意味でした。しかしここでは、神さまが恵みによって罪人を赦して下さるところに、神の義が現されていると教えているのです。人間が自分の力で罪の赦しを獲得するのではなく、神さまがイエス・キリストのゆえにその人の罪を赦して、義としてください。それがこの箇所の教えている「神の義」の意味なのです。

人間は救われるために、その義を受け入れればよいのですが、その手段が信仰なのです。イエス・キリストの十字架の贖いを信仰によって受け入れる時、私たちの罪は確かに赦されるのです。それが聖書の福音であり、信仰義認の教えなのです。

それまで、神さまの正しさのゆえに苦しんでいたルターさんは、この聖書の真理を知った時に、「まったく新しく生まれたように感じ、戸が開かれて、天国に入ったように感じた」と述べています。ルターさんはここで、自分の罪の赦しを確信し、また聖書が教えているすばらしい救いの福音をはっきりと知ったのです。

このルターさんの体験が、宗教改革の出発点です。みなさんは、自分の罪が本当に赦されたことを知っているでしょうか。罪が赦された喜びを知っているでしょうか。

この福音のすばらしさと喜びを大切にしているが、私たちプロテスタント教会なのです。

私たちの罪の赦しは、自分自身のよき行いによるのではなく、ただイエス・キリストのみ業によります。そして私たちは、信仰によってそれにあずかるのです。私たちの救いは、ただ恵みのみによって与えられるのです。それが聖書の教える福音なのです。(袴田康裕)

10月28日 ローマの信徒への手紙1章17節

【幼稚科】

## 信仰義認

### 〈ねらい〉

神さまは行いではなく信仰をみて正しい者と認めてくださることを覚える。

### 〈展開例〉

みんなは、やってはいけないよ、と家族の人や先生に言われても、またやってしまった、ということはありませんか？ 自分では気をつけているつもりだけど、同じことを繰り返してしまったり、よいことをしようと思ったんだけど、かえって怒られたり、失敗してしまったり……。それとも、いつも言われたことを正しく守っているから、失敗なんてしない、という子もいるでしょうか。

あなたが怒られたり失敗してしまったり、神さまはなんと言うのでしょうか？ 神さまはみんながよいことや言われたことをできなかつたり、失敗したとしても、あなたのことをもちろん地獄に落とすようなことはしないし、嫌いになつたりもしない。それどころか「あなたはそのままで大丈夫だよ」と優しく言ってくださる方です。神さまはあなたを救ってくださる方なのです。でもどうやって救ってくださるのでしょうか？ それは、あなたが神さまを必要とするかどうかにかかっています。自分の“罪—神さまの目に悪い心”をゆるすために十字架にかかって下さったイエスさまを、信じることによってです。

「自分はどうせ他の子と比べてできないから」とすねたりうらやましいなと思う必要もありません。怒ってる人を逆に怒る必要もありません。いつも神さまに心の目を向けて、「神さま助けてください」と祈っ

てみましょう。神さまはあなたの“やっていること”ではなく、あなたが神さまに頼って、神さまの「あなたを愛しているよ」というメッセージを受け止められるかな、というのを見ています。十字架のイエスさまを信じるなら、イエスさまによって神さまはあなたのことを正しいと認めてくださる。どんなに失敗してもです。なんとすばらしくうれしいことでしょうか。

ですから、私たちは、大好きな神さまが望んでいることを“もっと知りたい”と思うようになり、それを“できますように”と願うようになります。そして具体的に“どうすればできるようになるかな”と考えますね。そうすることで、私たちはよい行いをするができるようになっていきます。

決して、よい行いをするから神さまが私たちのことを愛してくれるという順番ではありません。神さまから怒られないようにと、自分の“罪”をゆるしてもらう為によい行いをしなくてよいのです。イエスさまをただ信じるときに、神さまのあふれる恵みによって私たちは救われ、“罪”はゆるされるのです。

### 〈祈り〉

神さま、すばらしい愛をありがとうございます。そのことに約500年前、もう一度(ルターさんを通して)気づかせてくださってありがとうございます。私たちがいつもあなたに目を向けられますように。

### 〈やってみよう〉

♪両手いっぱい愛♪

10月28日 ローマの信徒への手紙1章17節

【小学科上級・中学科】

## 信仰義認

1. ローマ1章16, 17節を読みましょう。

①「福音」とは、何ですか？

②誰に「福音」を伝えるべきですか？

③イエスさまのことを人に話すのは恥ずかしいですか？ それはなぜですか？

④「神の力」を感じたことがありますか？ それはどんなことですか？

⑤この世で「正しいもの」とは、どんな人だと思えますか？

⑥神さまは、私たちがどのように歩むことを喜ばれますか？

11月4日 ヨハネの黙示録1章1～10節

【解説と黙想】

## アルファでありオメガ

黙示録は「この預言の言葉を朗読する人と、これを聞いて、中に記されたことを守人たちとは幸いである」と始まる。「預言の言葉」とはヨハネの言葉というよりも旧約預言のことであり、黙示録を理解するためには、旧約預言の深い理解を要する。

7節の「見よ、その方が雲に乗ってこられる」は、ダニエル書7章13節「見よ、『人の子』のような者が天の雲に乗り、『日の老いたる者』の前に来て、そのもとに進み、権威、威光、王権を受けた」という言葉を踏まえている。

7節2～4行目「すべての人の目が彼を仰ぎ見る、ことに、彼を突き刺した者どもは。地上の諸民族は皆、彼のために嘆き悲しむ」は、ゼカリヤ12章10節「彼らは、彼ら自らが刺し貫いた者であるわたしを見つめ、独り子を失ったように嘆き、初子の死を悲しむように悲しむ」という言葉を踏まえている。なぜ嘆き悲しむのか。

ゼカリヤ12章は、「見よ、わたしはエルサレムを、周囲のすべての民を酔わせる杯とする。(中略) その日、わたしはエルサレムをあらゆる民にとって重い石とする。それを持ち上げようとする者は皆、深い傷を負う」と言われて始まっている。主の怒りの「杯」、「重い石」とは十字架のことである。それを持ち上げようとする(その正しい意味は「取りのけようとする」)者は皆、深い傷を負うことになる。「地のあらゆる国々が集まり、エルサレムに立ち向かう」(12:3)。誰も自分の十字架を背負おうとしない、ということだ。十字架を背負わんとするイエス・キリストを乗せたらば(9:9)とは対照的に、十字架に敵対する者に対して「わたしは打って出て、馬をすべて

うろたえさせ、馬に乗る者をすべて狂わせる。わたしはユダの上に目を開いて、諸国の馬をことごとく撃ち、目を見えなくさせる」(12:4)と、「馬、馬、馬」と3度繰り返して、これを撃つと言う。十字架を背負おうとしない者が負う「深い傷」とは、狼狽、狂気、見えなくされること。しかし、「その日、わたしはエルサレムに攻めてくるあらゆる国を必ず滅ぼす」と主は言われる(12:9)。自分の十字架を背負おうとしない者を必ず滅ぼす、つまり、すべての者を十字架の前にひれ伏させ、自分の罪を嘆かせる、ということだ。強奪するようにして成し遂げられる主の救い。ヨハネは7節を「然り、アーメン」と記して結び、この救いは成し遂げられた、と証言している。ヨハネはゼカリヤ12章10節を非常に強く心に留めていたようで、ヨハネ福音書19章37節でも引用している。

8節はイザヤ書44章6節を踏まえている。同節は「イスラエルの王である主、イスラエルを贖う万軍の主は、こう言われる。わたしは初めであり、終わりである。わたしをおいて神はない」という宣言である。ヨハネは、続く8節の「恐れるな、おびえるな。すでにわたしはあなたに聞かせ、告げてきたではないか。あなたたちはわたしの証人ではないか、わたしをおいて神があらうか、岩があらうか。わたしはそれを知らない」に答えるようにして証しする。

イザヤ書・ゼカリヤ書のこれらの個所に共通しているのは「霊を注ぐ」という約束(イザヤ44:3、ゼカリヤ12:10)。ヨハネはその“霊”に満たされていた。それは「ある主の日のこと」だった(黙1:10)。礼拝においてである。(赤石純也)

《参照聖句》 イザヤ書44章、ゼカリヤ書12章

《教理問答》 「子どもと親のカテキズム」 問26～33、35、42、45

11月4日 ヨハネの黙示録1章1～10節

【説教展開例】

## アルファでありオメガ

◇..... 単元のねらい .....◇

ヨハネが証するイエス・キリストを、預言の言葉から確認する。礼拝は、始めであり終わりである方（父なる神、またイエス・キリスト）を御言葉によって知るところ。それを助けてくださるのが聖霊。ヨハネのように、天におられるイエス・キリストの姿を、目で見ているかのようにリアルに臨在を感じるところ。また、礼拝は、天に送った愛する家族とともに神を礼拝するところでもあるということを知る。

（地上の礼拝と天上の礼拝はイエスにおいて繋がる。礼拝は人生の始めまた終わり）

### 『神である主、今おられ、かつておられ、やがて来られる方』を礼拝する

教会では、毎週日曜日に礼拝が行われています。みんなは、「毎週」教会に来て神さまを「礼拝」していますか。礼拝ではさんびかを歌ったり、お祈りをしたりしますが、何より大切なのは聖書のお話を聞くことです。

きょうの個所の中にも、こういう言葉があります。「ヨハネは、神の言葉とイエス・キリストの証し、すなわち、自分の見たすべてのことを証した。この預言の言葉を朗読する人と、これを聞いて、中に記されたことを守る人たちとは幸いである」（1:2, 3）。聖書のお話を聞いて、聞いた言葉を守って生きていく人は幸いだ、幸せだ、と言われています。今日、教会に来て礼拝しているみんなは、幸いな人です。

「ヨハネは、神の言葉とイエス・キリストの証し、すなわち、自分の見たすべてのことを証した」とありますが、ヨハネのことを知っていますか？ ヨハネはイエスさまの最初からの弟子です。うんと若いときにイエスさまの弟子になりました。でも、若いときはとても激しい人で、自分たちに従わないけれど、イエスさまの名前を使って悪霊を追い出している人たちを見たら、それをやめさせようとしたり（マルコ9:49, 50）、イエスさま一行を歓迎しなかった

サマリア人の村に「天から火を降らせて、彼らを焼き滅ぼしましょうか」などと言ったりするので（ルカ9:52～55）、イエスさまに厳しく叱られていた人でした。でも、イエスさまが十字架にかけられ、その後、復活なさったときに、もう一度イエスさまが聖書の言葉を初めから全部教えてくださいました。そうだったのか！聖書に書いてあることは、あの言葉もこの言葉も全部本当だった。こんな自分を赦してくださいるために十字架にかかってくださったんだ」とわかって、そのことをみんなに何度も話し、また、福音書や黙示録を書きました。気持ちの激しいヨハネですから、そんなヨハネらしく、ヨハネ福音書の最後で、イエスさまに聞いたことや聖書を読んでわかったことを、一つ一つ全部書きたいけれど、書ききれない！と言っています。年をとってからは、イエスさまが「いちばん大切なことだよ」と言って教えてくださいました「互いに愛し合いなさい」という教えを、何度も何度もみんなの前で語りました。そういうヨハネのお話を聞くのが、その当時の礼拝でした。そうしてみんな、聖書の言葉を聞き、その言葉がイエスさまによって本当になった、ということを中心に受け入れて、みんながイエスさまを信じるようになりました。

ヨハネは今日の個所でも、旧約聖書の言葉を使いながら、イエスさまのことを語っています。

7節で「見よ、その方が雲に乗ってこられる」と言っています。これはダニエル書7章に書いてある言葉です。「その方」ってだれのことですか？ダニエル書が書かれたときにはだれにもわかりませんでした。ヨハネは「これはイエスさまのことだよ、イエスさまが『これはわたしのことだよ』と言って教えてくださいましたよ。だからイエスさまは神の子だって言えるんだよ」と伝えました。

7節の次の3行の言葉も、旧約聖書の言葉です（ゼカリヤ書の言葉です）。7節の最後で「然り、アーメン」と言っていますね。「そのとおりです。ほんとうです」という意味です。「ゼカリヤ書に書いてあることは、はじめ全然意味がわからなかったけれど、イエスさまの十字架の出来事を見て、イエスさまにもう一度教えてもらったら、全部そのとおりだったってわかったよ。わたしはこういうふうに救っていただいたんだな、ってわかったよ。わたしはこの言葉が本当だ、って言えるよ」という気持ちです。

8節の「わたしはアルファであり、オメガである」というのは、今度はイザヤ書の言葉です。アルファはギリシャ語のアルファベットの最初の文字の名前です。オメガは最後の文字の名前です。ですから「わたしは初めであり、終わりである」という意味です（元のイザヤ書にはそう書いてあります）。天地創造の最初からおられた神さま、そして、預言の言葉・約束の言葉を全部完成させ、終わらせることができる神さまのことです。

この言葉がもう一度出てきます。17節「恐れるな。わたしは最初の者にして最後の者、

また生きている者である。一度は死んだが、見よ、世々限りなく生きて、死と陰府の鍵を持っている」。一度は死んだが、今また生きている人？イエスさまですね？イエスさまのことでもあるんですね。確かに、イエスさまも、天地創造の初めから父なる神さまと一緒におられました。そして、神さまの約束の言葉を全部本当のことにしてくださったのはイエスさまです。

元のイザヤ書では「わたしは初めであり、終わりである」の次に「わたしをおいて神はない」という言葉が続きます。このお方しか本当の神さまと言えるお方はいないから、私たちは、この神さま・イエスさまを礼拝するのですね。

ヨハネは、主の日に神さまを礼拝していると、「霊」に満たされて、声が聞こえた、と言います（10節）。その声の主を見ようとすると、天におられるイエスさまの姿が見えたそうです。それに、天で神さまを礼拝している人たちの姿も見えたそうです（4章）。私たちが日曜日に礼拝に来て、心を高く神さまの方に向けて、きっとみんなにも、聖霊なる神さまの力が注がれて、天におられるイエスさまの姿が見えるよ。そしてそのイエスさまが私たちに語りかけてくださるのが聞こえるよ。聖書の言葉がどんどんわかるようになるよ。

もし大好きな家族の人を亡くしたばかりだったら、その人のことも思い出してごらん。天国でその人は神さまを礼拝しているよ。私たちと一緒に礼拝しているよ。礼拝に来ると、今は見えないそういう人たちとも会えるんだ。

礼拝とはそういうところですよ。だから毎週日曜日に教会に来て、天と地で、一緒に神さま・イエスさまを礼拝しましょう。

（赤石純也）

#### 《今週の暗唱聖句》

イスラエルの王である主、イスラエルを贖う万軍の主は、こう言われる。

わたしは初めであり、終わりである。わたしをおいて神はない。（イザヤ書44章6節）

11月4日 ヨハネの黙示録1章1～10節

【幼稚科】

## アルファでありオメガ

### 〈ねらい〉

主イエス・キリストは、この世の終わりに備えるよう、預言の言葉に聞き、また守るようにとおっしゃっていることを覚える。

### 〈展開例〉

このヨハネの黙示録は、聖書の一番後ろにある書物の名前です。あるとき、イエスさまの弟子だったヨハネが、パトモス島という今のギリシャの小さな島にいたときに、幻を見ました。その幻はイエスさまを礼拝する日一日曜日に、イエスさまご自身が見せてくださったものでした。神さまはよく、神さまについての「まこと」を、天使を通してお話しになりますが、このときもヨハネに、これから必ず起こることについて、ラッパのように響く大声でお話しされたのでした。しかも、この世の終わりのときが迫っているので、「この黙示録を礼拝の中で読む人と、これを聞いて、中に書かれていることを守る人たちは幸いな人ですよ」、と神さまはおっしゃっています。ここで、父なる神さま、子なるイエスさま、聖霊さま、この「三位一体」の神さまは、「わたしはアルファであり、オメガである」とお話しされます。難しい言葉ですね。どういう意味でしょうか？ “はじめでもあるし、終わりでもある方” という意味です。神さまは今も生きておられる方だし、私たちが造られた方ですからはるか昔からおられます。そして、これからのいつか、この

世を終わらせて新しい状態にする方でもあります。

イエスさまが地上にお生まれになる前に書かれた旧約聖書でも、十字架で死なれたイエスさまが再び雲に乗って天からくるときが来ることが教えられていました。そのときイエスさまを信じていない人は、“信じておけばよかった”と悔しがったり、“どうしよう（涙）”と大きな悲しみに包まれます、とされています。私たちはそのようにならないようにしたいですね。

ではどうすればよいのでしょうか？ それは礼拝をすることです。毎週日曜日に礼拝のために教会に足を運んで、神さまのみ言葉を読んでお話しをよく聞いてください。そして、そのみ言葉に書かれていること、神さまのご意思に従うことができるように祈りましょう。神さまはそうやって、“いつこの世の終わりが来てもいいように、楽しみに待てるように、準備していなさいね”と教えてくださっているのです。

### 〈祈り〉

神さま、私たちが今、そしてこれからどうすればいいかを教えてくださいありがとうございます。アルファでオメガの神さまにいつも信頼して聞くことができるようにさせてください。

### 〈やってみよう〉

賛美しよう♪わたしさえも愛して♪



11月4日 ヨハネの黙示録1章1～10節

【小学科上級・中学科】

## アルファでありオメガ

### 1. ヨハネの黙示録1章1～8節を読みましょう

- ① 「この黙示」はどのように与えられ、伝えられたものですか。
  
  
  
  
  
  
  
  
  
  
- ② 『朗読する人』と『これを守る人』たちは幸いである」のはなぜでしょうか。
  
  
  
  
  
  
  
  
  
  
- ③ 雲に乗って来られる「その方」とはどなたですか。  
※ダニエル書7章13節も読んでみましょう。
  
  
  
  
  
  
  
  
  
  
- ④ 「彼のために嘆き悲しむ」のはなぜですか。  
※ゼカリヤ書12章10節とその前部分も読んでみましょう。
  
  
  
  
  
  
  
  
  
  
- ⑤ 「アルファであり、オメガである」とはどのような意味でしょうか。  
※イザヤ書44章6節も読んでみましょう。

### 2. ヨハネの黙示録1章9～10節を読みましょう

- ⑥ 「ある主の日」は今で言うと、何の日当たるでしょうか。

11月11日 ヨハネの黙示録7章1～17節

【解説と黙想】

## 白い衣を着て

### 〈文脈——神の怒りの日に誰が耐えうるか〉

前の6章において七つの封印のうちの六つの封印が開かれる。そこには終わりの時に起こる様々な災いや天変地異が示されていた。そして8章において第七の封印が開かれる。つまり、この7章は第六の封印と第七の封印の間に挿入された部分である。6章17節には「神と小羊の怒りの大いなる日が来たからである。だれがそれに耐えられるであろうか」とあるが、その問いに対する答えとしてこの7章が挿入されていると考えられる。

### 〈神の刻印を押された十四万四千人〉

ヨハネは、大地の四隅から吹く風を押さえている四人の天使を見る。この風は大地と海とを損い、破壊する力の象徴である。そこに、神の刻印を持ったもう一人の天使が現れ、四人の天使たちに「我々が、神の僕たちの額に刻印を押してしまうまでは、大地も海も木も損なってはならない」と呼びかける。「神の刻印」とは、その人が神の所有（神のもの）であることを示し、保証するものである。そのような刻印を受けた者は、来ようとしている破壊・災いから守られる（エゼキエル9：1以下参照）。そしてヨハネはその人の数が十四万四千人だと聞いた。この数は文字通りに受け取るべきではなく、象徴的な数字である。それはイスラエル部族の十二という数を二乗し、千をかけた数字である。それは神の民の全体性、完全性を強調している。またここに出てくるイスラエル十二部族を民族的な意味で取るか否かが問題となる。14章でも小羊と共にシオンの山に立つ「十四万四千人」が出てくる。それは小羊によって地上から贖われた人々を指している（14：14）。それゆえ、この箇所「十四万四千人」も民

族としてのイスラエルではなく、霊的な意味でのイスラエル、すなわちキリストによって贖われた神の民全体を指していると考えられる。神はご自分の民すべてに、一人残らず刻印を押してしまうまで、地上への災いを押さえておられるのである。

### 〈苦難を通して来た白い衣の大群衆〉

その後、ヨハネは全世界の民族から集まった白い衣を着た大群衆を見る。彼らが手に持っている「なつめやしの枝」は勝利の象徴である（ヨハネ12：13参照）。彼らは自分たちの救いを神と小羊とに帰し、神を賛美し、礼拝する。天使たちの賛美もそれに加わる。長老の一人が、白い衣を着た人々は「大きな苦難を通して来た者」だと説明する。それは、終末に起こる大きな苦難・試練（3：10）を指しているようであるが、同時にそこには、信仰者が神の国に入る前に経なければならない一般的な多くの苦しみも含まれると思われる（使徒14：22、ヨハネ16：33参照）。そして彼らは「その衣を小羊の血で洗って白くした」と言われる。血で洗うと白くなるというのは逆説的であるが、これは小羊の血によって罪の汚れから清められることを意味している。そのように清められた白い衣を着ているからこそ、彼らは神の怒りを恐れることなく、その神の玉座の前に立ち、仕えることができる。そして神はこの者たちの上に、幕屋を張って、彼らと共に住み、彼らを守ってくださる。もはや彼らは飢え渴きや苦しみを味わうことはない。なぜなら、小羊キリストが彼らの羊飼いとして永遠の命の泉へと導いてくださるから。また神が、彼らが苦難の中で流したすべての涙をその目からぬぐい取ってくださるからである（イザヤ25：8参照）。（坂尾連太郎）

《参照聖句》 イザヤ書25章6～10節

《教理問答》 「子どもと親のカテキズム」問39、41

11月11日 ヨハネの黙示録7章1～17節

【説教展開例】

## 白い衣を着て

◇..... 単元のねらい .....◇

子どもたちが、最後の審判（神の怒り）の日が来ることを覚えつつ、それを恐れるのではなく、そこから救われるしるしとして、神がご自分のすべての民に刻印を押してくださることに信頼するように。また子どもたちもこの世で様々な苦しみを経験するであろうが、地上で大きな苦難を通して来た人々が、天上ではキリストの血によって洗われた白い衣を着て、神の御前に立ち、神を礼拝し、神から完全な救いと慰めをいただけるという希望を伝える。

### 「苦難を通して来た白い衣の人々」

みなさん、おはようございます。今朝は、新約聖書の最後にある「ヨハネの黙示録」のみ言葉を読みました。これはヨハネという人が神さまから「これから必ず起こること」を示され、それを書き記したものです（4：1）。普通は見ることのできない、特別な光景がそこには記されています。それはわたしたちが生きている世界とは関係のないことのようにも思えます。しかし、そうではありません。それは「これから後必ず起こること」なのです。ではこれから後何が起こるのでしょうか。いろいろなことが語られていますが、大切な一つは、この世が終わるとき、神さまによって最後の審判がなされるということです。またそれは神さまの怒りが注がれる日とも言われています（6：16, 17）。ではわたしたちはその最後の審判の日、神さまの怒りの日をただ恐れて待っているしかないのでしょうか。そうではありません。

ヨハネは四人の天使を見ました。その天使たちは、地上の四隅から吹く風をしっかり押さえて、大地にも海にも、どんな木にも吹きつけないようにしていました。台風のような強い風が吹くと、木が倒れたり、家の屋根が飛んでしまったり、いろいろな被害が出ますね。そうならないように、この天使たちは風を押さえつけていたので

す。逆に、その天使たちが手を離すと、激しい風が吹きつけ、さまざまな被害が出てしまいます。この風は神さまによる最後の審判を表しています。ヨハネはもう一人の天使が、太陽が出る方角（東）から上ってくるのを見ました。その天使は神さまの刻印（ハンコ）を持っていました。そして風を押さえつけている四人の天使たちに言いました。「我々が、神の僕たちの額に刻印を押してしまふまでは、大地も海も木も損なってはならない」（7：3）。その額に神さまの刻印を押されるということは、その人が神さまのものであるということを保証されるということです。そしてそのような神さまの刻印を押された人は、やがて来ようとしている風による被害を受けず、守られるのです。それは最後の審判、神さまの怒りから守られ、救われるということです。そしてその人の数は14万4千人だとヨハネは聞きました。これは救われる人の数が実際に14万4千人しかない、ということではなく、特別な意味のある数字です。旧約聖書に出てくる神さまの民イスラエルはいくつの部族に分かれていたか知っていますか。12ですね。では12×12は何でしょう。144です。それに千をかけると14万4千になるのです。だから、この14万4千人というのは、神さまの民全体を表す数字なので

す。神さまは、ご自分の民すべてに一人残らず刻印を押してしまうまでは、最後の審判をなされないのです。それはご自分の民を一人残らず確実に救おうとなさる神さまの憐れみ深い御心によることです。だからわたしたちは、来るべき最後の審判を恐れるのではなく、憐れみ深い神さまに信頼していることができます。

続いてヨハネは天上の光景を目にしました。そこには、世界中の国から集まった数えきれないほど多くの群衆がいました。その人たちはみんな「白い衣」を着ていました。この人たちは、神さまによって救われた人たちであり、神さまの前に立って、「救いは、王座に座っておられる神さまと小羊であるイエスさまのものである」と言って神さまを賛美し、礼拝していました。そして天使たちも一緒になって神さまを賛美していました。

神さまの王座の周りには長老もいて、その一人がヨハネに尋ねました。「この白い衣を着た者たちは、だれか。また、どこから来たのか」。ヨハネはわかりませんでしたので、「わたしの主よ、それはあなたの方がご存じです」と答えました。すると長老はヨハネに「彼らは大きな苦難を通過して来た者で、その衣を小羊の血で洗って白くしたのである」と教えてくれました。

白い衣を着た人たちは、地上において大きな苦しみを経験し、それを通ってきた人たちだったのです。そしてその人たちが着ている白い衣は「小羊の血で洗って白くした」ものでした。普通、血で服を洗ったら、白くなるどころか、真っ赤に染まってしまうですね。でも小羊であるイエスさまの血によって洗うと白くなるのです。それはイエスさまの血によって、わたしたちの罪が赦され、その汚れが清められるからです。もしわたしたちの衣が罪によって汚れたままであれば、わたしたちは神さまの前に行くことはできません。その罪と汚れのゆえに神さまの怒りを受けなければならないか

らです(6:16参照)。しかし、イエスさまを信じ、イエスさまの血によって罪から清められ、白い衣を着ることによって、わたしたちは聖なる神さまの前に出ることができるようなのです。そして救いの喜びをもって神さまを礼拝し、神さまに仕えることができます。

そして神さまはその人たちの上に幕屋(テント)を張り、彼らと共に住み、彼らを守ってくださいます。この人たちはもう、飢えたり渴いたり、また太陽の暑さに襲われることはありません。それは小羊であるイエスさまが、彼らの羊飼いとして、命の水の湧き出る泉へ導いてくださるからです。彼らはその泉から命の水を飲むことによって、満たされ、永遠に生きることができるようなのです。また神さまが彼らの目からすべての涙をぬぐってくださいます。

わたしたちはこの地上を生きていく中で様々な苦しみや試練を経験しなければなりません。その中で、目から涙があふれ出してしまうこともあります。クリスチャンであるから、神さまを信じているからといって、苦しいことや悲しいことがないということはありません。わたしたちは最終的には神さまの御国に入れていただけるのですが、そこにたどり着くまでには多くの苦しみというトンネルと通らなければならないのです。そして天の御国にたどり着いたときには、イエスさまの血によって洗い清められた白い衣を着て神さまの前に立ち、救いの喜びをもって神さまを礼拝します。そしてそこではもはや何の苦しみもありません。それまでの苦しみの中で目からあふれ出したすべての涙を神さまがぬぐい取ってくださいます。「悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる」(マタイ5:4)というイエスさまの言葉は、その時、完全に実現するのです。苦しみや悲しみを経験する時にも、その先にある希望と幸いがわたしたちには約束されているのです。

(坂尾連太郎)

《今週の暗唱聖句》

悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる。(マタイによる福音書5章4節)

11月11日 ヨハネの黙示録7章1～17節

【幼稚科】

## 白い衣を着て

### 〈ねらい〉

イエスさまは人間の内側から支配しようとする悪霊に勝ち、人間の生き方を変えてくださる賛美されるべきお方であることを覚える。

### 〈展開例〉

神さまの言うことをきかずに罪を犯してしまった天使のことをなんと言うか知っていますか？「悪霊」といいます。今も神さまを信じない人たちに働いたり、信じている人でも弱っているときなどにいつのまにか心の中に入って、神さまの目に悪いことを起こさせています。特にここで出てくる悪霊は「レギオン」と言って何千ものたくさんの悪霊からなっていました。そのたくさんの悪霊が、この男の人に入っていたというのですから、大変です！ その人は、長い間服も着ないし家にも住まないで、死んだ人が入っているお墓で暮らしていました。そして、その悪霊はイエスさまが「いと高き神の子」であることがわかっていて、地面にひれ伏して「かまわないでくれ。頼むから苦しめないでほしい」と強くお願いしていますね。イエスさまにかかったら負けてしまうとわかっている悪霊は、その男の人がイエスさまと関係を持たないようにしようとします。悪霊やサタンが閉じ込められるろう屋のような「底なしの淵」がありますが、“イエスさま、そこに行けとは命令しないでください”とまたお願いしています。たまらず豚の中に入れさせてもらった悪霊たち。結局そのすべての豚がおぼれ死ぬことで、イエスさまは悪霊に勝ちました。恐ろしい状態になっていた男は、悪霊を出してもらった後はどうなったでしょうか？ 服を来て、普通にイエスさま

のそばに座っていました。

さて、この地方の人たちはどう反応したでしょうか？「ハレルヤ、イエスさまはすごい方だ！」と喜びにあふれたのでしょうか。残念ながらその反対でした。この悪霊にとりつかれていた人が救われたことよりも、自分たちの仕事や財産がなくなってしまったことや恐ろしさの方が勝ってしまったようです。

みんなはどうでしょう。みんなの大事にしているものを神さまが奪ったとしたらどうしますか？ 悲しいでしょう。怒るかもしれません。でもイエスさまを決して自分の外に追い出さないでください。そうやってイエスさまと関わらないようにさせてくる悪魔の働きに気づくことができるように祈りましょう。

神さまは男の人を救ったように、一人の人が救われることをとても大切にしています。そうあなた自身が救われることも。

モノやお金のことを大事にしすぎることなく、神さまを一番大事にできますように。そして、悪霊を追い払ってもらった人のように、神さまに救われたら、神さまはどんなに強いまた沢山の悪霊にも勝利して下さるすばらしい方であることを、語り伝える人になれますように。

### 〈祈り〉

神さま、悪霊にも勝つイエスさまのことを、私たちがもっと信頼できますように。イエスさまが一番と喜んで伝える人になりますように。

### 〈やってみよう〉

賛美♪イエスさまが一番♪

11月11日 ヨハネの黙示録7章1～17節

【小学科上級・中学科】

## 白い衣を着て

### 1. ルカによる福音書8章26～31節を読みましょう

①イエス様とその一行が到着したのはどこですか。また、そこにやってきたのは誰ですか。

②その人はイエス様を見ると、何と言いましたか。なぜそう言ったのでしょうか。

③悪霊がイエス様に願ったことと、その内容について考えてみましょう。

※ヨハネの黙示録20章1～3節も読んでみましょう。

### 2. ルカによる福音書8章32～39節を読みましょう

④悪霊とのやり取りで、イエス様はどうされましたか。その結果はどうになりましたか。

⑤見ていた豚飼いたちは何をしましたか。それからどんなことが起こりましたか。

⑥イエス様は、悪霊を追い出してもらった男に何と言われましたか。それはどんな意味だと考えますか。

⑦この出来事を通して、イエス様と悪霊の関係についてわかることを話してみましょう。

11月18日 ヨハネの黙示録21章9節～22章5節

【解説と黙想】

## 天のエルサレム

ヨハネの黙示録は、終わりの日、イエス・キリストが再びおいでになる時に完成する神の国を示しています。

七人の天使の一人が、幻の内にヨハネに「ここへ来なさい。小羊の妻である花嫁を見せてあげよう」(9節)と語ります。花嫁とあるように、これは旧約聖書で、神の民イスラエルが主なる神の花嫁であった、と語られることに基づきます。そのようにここでは、イエス・キリストに結ばれた新しいイスラエル、キリストの教会の完成が示されています。イエス・キリストを信じ、この方に結ばれるところに、私たちの命があります。そして、その信仰には完成の時があるのです。

この完成した神の都、新しいエルサレムは、終わりの日に神のおられる天から下り(10節)、民はそこで神の栄光を味わうことになります(11節)。21章では、その神の栄光の輝きについて、あらゆる宝石を用いて、その輝きが記されています。また、ここでは十二という聖書の中で特別に用いられる数字が繰り返されます。旧約時代のイスラエルの子らの十二部族(12節)と、小羊イエス・キリストの十二使徒(14節)も終わりの日には一つにされます。旧約時代のイスラエルも、私たちキリストの教会も終わりの日には一つとされるのです。

また、十二の門、十二人の天使、十二の土台も出てきます。都の大きさを示す一万二千スタディオンは十二に十の三乗を掛けた数字、城壁の高さを示す百四十四ペキスも、十二を二乗した数字となります。このように数字を通して、黙示録は新しいエルサレムでの神の栄光を示します。

この都の神の栄光の輝きは、「透き通ったガラスのような純金」(18節)でした。21節にも、都の大通りが透き通ったガラスのような純金であったと言われています。それは傷が無く、透き通った純粋な金です。通常金はガラスのように透き通っていない

ように見えますが、それほどの純粋さと輝きが、新しいエルサレムにはありました。それは、罪の嘆きと悲しみ、痛みから全く解放された純粋な神の都の姿です。

都エルサレムの中心は神を礼拝する神殿にありましたが、ここでの新しいエルサレムには、神殿も、都を照らす太陽や月さえもはや必要ではありません。それは、神と小羊とが神殿であり、神の栄光と小羊の輝きが都を照らしているからです(23節)。「イエスの言われる神殿とは、御自分の体のことだったのである」(ヨハネによる福音書2章21節)とあるように、イエスのあるところに、真の神礼拝があります。したがって、このヨハネの黙示録の中心には、たえず、小羊であるキリストがあります。

終わりの日に実現する都でなされるのは、この小羊を中心とした、神礼拝です。そこに集うのは、「諸国の民」や「地上の王たち」(24節)といった異邦人もその対象です。小羊によって実現された神の救いは、普遍的なものです。そして、この都は決して閉ざされず、いつでも開かれ、私たちを招いています。そこに集う者は、ただイエスを信じる者です。

「命の水の川」(22章1節)や「命の木」(2節)は、私たちに創世記にあるエデンの園を思い出させます。天地創造の始めにあった神の豊かな祝福が、終わりの日に完成します。そして、命は、ただ「神と小羊」(1節)から出るものであることを黙示録は語っています。その中で、神と小羊の玉座の下、神の民たちは神を礼拝し、その王権にも与ることが5節で語られるのです。

この世にあって、私たちには罪から来る悲しみや嘆きがあります。しかし、イエス・キリストが再びおいでになり、新しいエルサレムが実現する時、キリストを信じる一人一人はその全てから解放され、ただ神の御顔を仰ぎ、全き神礼拝の喜びに生きる恵みに与ります。(宮崎契一)

《教理問答》 「子どもと親のカテキズム」 問39、41

11月18日 ヨハネの黙示録21章9節～22章5節

【説教展開例】

## 天のエルサレム

◇..... 単元のねらい .....◇

教会では、子どもたちと共に礼拝を献げるが、その歩みには完成がある。主イエスにより罪赦され救われた私たちが、やがて再び来られる主を待ち望み、神の御顔を仰ぎ見ることを待ち望む者にされたい。

### 「神さまの国のかんせい」

私たちは今日も、こうして神さまを礼拝するために教会に来ました。私たちが礼拝に来続けることの理由はただ一つのことです。それは、自分自身がイエスさまに愛され、罪赦されて、神さまから新しく生きる命をいただいたからです。私たちは、神さまによって、それまでとは全く違った、新しく生きる喜びが与えられました。

聖書の最後にある、ヨハネの黙示録に書かれているのは、この世の終わりについてです。世の終わり、と言うと、みなさんは、少し怖いイメージがあるかもしれません。

でも、今日の聖書の箇所には、そのようなことは書かれていません。この日、神さまの完成した御国が天から下り、イエスさまを信じる一人一人は、その光に照らされます。完成した神の都は、素晴らしい宝石で輝いています。終わりの日、私たちも神さまのすばらしい光に照らされるのです。

その神の都には、イエスさまを信じる人たちが入れられます。そこで一人一人はイエスさまに結ばれて、自分自身を神さまに献げ、心から喜んで礼拝を献げるのです。

みんなが導かれている信仰生活にはゴールがあります。それが、この神さまの国の完成の時です。その時私たちは、毎日の罪

の痛みや苦しみから完全に解放されて、ただ神さまを喜びます。そして、私たちは神さまの顔を仰ぎ見るのです。

この神の都には、輝く命の水の川があり、その両岸には命の木がありました。これを見ると、最初に神さまが人間のために造られたエデンの園を思い出します。天地創造の時、人間を始め神さまに造られた全てのものは、神さまからの全き祝福の中でありました。

けれども、その後、人は神さまに罪を犯し、罪の中で死んで滅びるべき者になってしまいました。旧約聖書のイスラエルの人たちは、神さまに対して罪を犯し、繰り返し神さまを悲しませたり、怒らせてしまうことをしたのです。

でも、そのつど、神さまは私たちに救いを示されました。イスラエルの王国時代に、イスラエルの人たちが神さまから激しい怒りを受けて、神殿が破壊され、外国に追い出された時も、神さまは預言者エゼキエルに、命の水が流れる新しい神殿の幻を示されました（エゼキエル書47章）。神殿は神さまを礼拝する場所です。背きの中にあつた時にも、神さまを礼拝することへの招きがイスラエルにあったのです。



私たちもまた、自分たちの罪のために、繰り返し神さまを悲しませてしまうことがあります。神さまを礼拝することから離れてしまうこともあるかもしれません。でも、神さまはそのような私たちをいつも御自分を礼拝する喜びに招かれています。

黙示録には、イエスさまのことが、「ほふられた小羊」、とされています。「ほふられた」、とあるように、イエスさまは、御自身が私たちの罪のために殺され、十字架に付けられました。そして、三日目にイエスさまは罪と死を打ち破って復活され、

私たちにとっての生きる命となってくさいました。

このイエスさまに結ばれている私たちこそ神さまを喜ぶ礼拝へと導かれています。終わりの日は、イエスさまが再び私たちのところに来てくださる時です。その時に私たちは、大きな喜びの内に、神さまの御顔を見て、その救いの完成を喜びます。私たちに与えられているのは、いつもこのように神さまを喜ぶ礼拝への招きです。

(宮崎契一)

---

《今週の暗唱聖句》

もはや、呪われるものは何一つない。神と小羊の玉座が都にあって、神の僕たちは神を礼拝し、御顔を仰ぎ見る。(ヨハネの黙示録2章3～4節)

11月18日 ヨハネの黙示録21章9節～22章5節

【幼稚科】

## 天のエルサレム

### 〈ねらい〉

イエスさまは、信じる者が世の終わりに住むことができる輝かしい未来を教えてください。ださっていることを覚える。

### 〈展開例〉

みんなが今いる教会はどんな教会ですか？ 同じくらいの年の子がいなくて寂しいなあとか、楽しいこともあるけどつまらないこともある、など色々な思いがあるかもしれませんね。

さて、この世の終わりのとき、神さまを信じる私たちには、どんなことが待っているでしょうか。何よりすばらしいことは、復活したイエスさまが天からもう一度私たちのもとに来てくださることです。これは神さまの国や教会がそのとき完成するということでもあります。イエスさまと一緒に、天から完成された新しい神の国、教会が下りてくるというのですから、なんとすばらしいことでしょう。そのことは、イエスさまが弟子のヨハネを通して、教えてください。ださっています。

完成したすばらしい神さまの教会、国は信じられないほどの輝きを放ち、悪いものが全くなり、人の罪による悲しみや痛みからも全く解放された、きれいで透き通った姿だということです。

そこには太陽や月も必要ないほど、神さまの栄光と救い主イエスさまの輝きが、その教会、国を照らしているということです。イエスさまを信じ、イエスさまと結ばれている世界中のクリスチャン、そして大昔に天国に行った人も、終わりの時生かされて

いるクリスチャンも、命の書に名前が書かれているすべての人たちが、救い主イエスさまを賛美します。その新しい教会、国で、イエスさまが中心の礼拝が豊かにささげられるのです。また、そこには、創世記のエデンの園にあった「命の水の川」や「命の木」もあると教えてください。ださっています。

想像しただけでも、いえ、私たちの想像をはるかに超えてすばらしい、終わりのとき、新しい世界が約束されています。本当に楽しみです。ね。

神さまに逆らう人や、神さまに希望を置いていない人たちにとっては、この世の終わりは怖いことかもしれません。でも、命の書に名前が書かれている主イエスさまを信じる人には、すばらしい世界が約束されているのです。

今たとえどんなに苦しいことや悲しいことがあったとしても、このようなすばらしい神さまからのご褒美が、いつの日にかいただけることを思い出しましょう。そして、この世の終わりがいつきてもいいように、神さまの愛から離れることなくつながって、神さまをほめたたえる人生を歩みましょう。

### 〈祈り〉

神さま、すばらしい希望をありがとうございます。神さまを信じない者ではなく、信じる者にならせてください。

### 〈やってみよう〉

♪さあ、さんびしよう♪

11月18日 ヨハネの黙示録21章9節～22章5節

【小学科上級・中学科】

## 天のエルサレム

### 1. ヨハネの黙示録21章9～14節を読みましょう

①「小羊の妻である花嫁」とは何のことですか。

②「都」はどんな様子でしたか。

### 2. ヨハネの黙示録21章15～21節を読みましょう

③都についての詳しい説明は、何を意味していると思いますか。

### 3. ヨハネの黙示録21章22～27節を読みましょう

④都には、太陽や月が必要ではないとされています。それはなぜですか。

⑤都に入れる者は、誰だと言われていますか。

### 4. ヨハネの黙示録22章1～5節を読みましょう

⑥新しいイスラエルの実現は、今を生きる私たちに何をもたらすでしょうか。

11月25日 ヨハネの黙示録22章6～21節

【解説と黙想】

## キリストの再臨

ヨハネの時代、神の臨在を感じることでできる場所は神殿であった。現代の私たちにとっては教会の礼拝であろう。しかし、新天新地が成るとき、もはや「わたしは、都の中に神殿を見なかった。全能者である神、主と小羊とが都の神殿だからである」(21:22)、「神の僕たちは神を礼拝し、御顔を仰ぎ見る」(22:3,4)と記されている。神と、顔と顔を合わせてお会いできる時・永遠に神と共に在れる世界が来るので、もう特別な場所は必要なくなるのだ。キリストの再臨とはそういう永遠の世界が始まる時・出来事なのである。

「わたしはすぐに来る」が繰り返されている。その当時は迫害の厳しい時代であった。黙示録前半におさめられている7つの教会に宛てた手紙の中でも、以下のように忍耐を要する状況があったことを思わせる言葉が繰り返されている。①「あなたはよく忍耐して、わたしの名のために我慢し、疲れ果てることがなかった」(2:3)、②「わたしはあなたの苦難や貧しさ(気落ち)を知っている」(2:9)、③「わたしは、あなたの住んでいる所を知っている。そこにはサタンの王座がある。しかし、あなたはわたしの名をしっかりと守って、(中略)わたしに対する信仰を捨てなかった」(2:13)、④「わたしは、あなたの行い、愛、信仰、奉仕、忍耐を知っている。(中略)わたしが行くときまで、今持っているものを固く守れ」(2:19,25)、⑤「目を覚ませ。死にかけている残りの者たちを強めよ」(3:2)、⑥「あなたは力が弱かったが、わたしの言葉を守り、わたしの名を知らないと言わなかった。(中略)あなたは忍耐についてのわたしの言葉を守った」(3:8,10)、⑦「あなたは、冷たくも熱くもない。むしろ、冷たいか熱いか、どちらかであってほしい。

(中略)わたしは愛するものを皆、叱ったり、鍛えたりする。だから、熱心に努めよ。悔い改めよ」(3:15,19)と。迫害下で忍耐する者たちにとっては「わたしはすぐに来る」というメッセージは大きな励ましであったことだろう。今は、キリスト教徒に対する当時のような仕方での迫害は数少ないかもしれないが、無視・無関心という形で、やはり迫害にさらされている。キリストの再臨までは、礼拝において「この書物の預言の言葉」(22:7,9,10,18,19)を聞き、これを支えとして生きていくしかない。

そこでヨハネは今日の個所でこの言葉への集中を促す。「これらの言葉は、信頼でき、また真実である」(22:6)「この書物の預言の言葉を、秘密にしておいてはいけない」(22:10)。そしてこれに付け加えたり、ここから取り去ったりすることへの嚴重注意の言葉が並ぶ(22:18,19)。

そして「預言の言葉」のエッセンスとも言える言葉を繰り返している。「わたしはアルファであり、オメガ」(22:13)、「命の木」(22:14)、「ダビデのひこばえ(若枝)」、「明けの明星」(22:16)、「渇いている者は来るがよい。命の水が欲しい者は、値なしに飲むがよい」(22:17)は、どれも預言書の言葉を踏まえている。忍耐が必要な迫害の時代を生き抜くために、御言葉から命の水をくみ続けるように励ます。

「来てください」(22:17,20)と願うとき、現状から救い出していただくことを願うのみならず、「御国を来たらせたまえ」の祈りのとおり、自分の心が、主の御支配で満たされ、この現実の中を生き抜く力を与えてくださることをも願う。礼拝においてその力は、御言葉を通して与えられる。

(赤石めぐみ)

《参照聖句》 創世記3章24節、サムエル下23章1～5節、イザヤ書44章  
《教理問答》 「子どもと親のカテキズム」問39

11月25日 ヨハネの黙示録22章6～21節

【説教展開例】

## キリストの再臨

◇..... 単元のねらい .....◇

救い主イエスを肉眼で見る究極の喜びを描き出し、希望の種を植え付けよう

### 「イエスさまに会えるまで」

世界の終わりの日が来たら、どうなるのかな、と心配になったことはありますか？先週、新しい天と新しい地のお話を聞いたと思います。世界の終わりの日はこわいことがおこる日ではありません。イエスさまが再び来られて、イエスさまに会える日ですから嬉しい日です。今、私たちは毎週教会に来て、目には見えないイエスさまのことを一生懸命思い浮かべながら礼拝をしています。イエスさまが来られたら、わたしとみなさんが今会っているみたいにイエスさまにお会いできるのです。そして日曜日に教会に来ているときだけでなく、毎日イエスさまといっしょにいられるようになるのです。そういう新しい天と新しい地が現われる日ですから、どんな世界が始まるんだろう？ と楽しみにする日です。イエスさまを信じる人にはこういう希望が与えられています。終わりの日にはイエスさまに会えるのですから、死ぬのもこわくないし、世界の終わりもこわくないのです。イエスさまを信じているって、心強いことですね。

でも、みんながイエスさまを信じていたらいのですが、私たちの周りには特に、イエスさまをまだ信じていない人でいっぱい。だからもしかしたら、みんなは、「イエスさまを信じているんだ」「教会に行っているんだ」とお友だちに話したときに「え～？」と言われたりして、悲しい気持ちに

なったことがあるかもしれません。

黙示録を書いたヨハネの時代はもっと大変でした。イエスさまを信じていることがわかると、追いかけられたり、牢屋に入れられたり、殺されたりしてしまうことがありました。日本でも、500年くらい前にそういうことがありました。それがこわくて、イエスさまを信じることをやめてしまう人もいました。

神さま（イエスさま）は、そして聖書は、そういう人たちのことをいつも御言葉で励ましてくださいました。苦しかったり悲しかったりしていっぱい泣いたかもしれないけれど、終わりの日には目から涙をことごとくぬぐい取る、と約束してくださいました。イエスさまが来られたら、もう死ぬことはないし、悲しくなることも、苦しくなることもなくなるよ、とも約束してくださいました。それを聞いた人たちは、その約束を信じて、苦しいことに耐えました。そして神さまはまた、「そういう苦しい目にあっても、よく忍耐して、わたしのためによく我慢してくれたね」と励まされました。

毎日の生活は、楽しいことばかりではありません。怒られちゃったり、いやな言葉で傷ついてしまったり、悔しくなったり、ずるいことを考えちゃったり、マジギレしてしまうような目にあったりすることもあります。でも、私たちは神さまの子ですか

ら、最後まで神さまの子でいたい、天国に行ったら、イエスさまに「よくやった」といって迎えていただきたいですね。

だから、私たちは神さま（イエスさま）からの励ましの言葉をいただいて、毎日を生きていきたいのです。そのために私たちは、今、教会での礼拝を続けています。御言葉を聞くためです。

6節を見てください「これらの言葉（聖書の言葉）は、信頼でき、また真実である。預言者たちの靈感の神、主が、その天使を送って、すぐにでも起こるはずのことを、御自分の僕たちに示されたのである。見よ、わたしはすぐに来る。この書物の預言の言葉を守る者は、幸いである」。

聖書の言葉を聞いて、それを守り、行って生きていきましょう。そういう人は幸せだ、と言われていました。ヨハネは「この書物の預言の言葉を、秘密にしておいてはいけない。時が迫っているからである」と言われて、聖書の言葉についてイエスさまから教わったことを一生懸命たくさんの人に伝えました。それを聞いた人たちは励まされて、正しい人はもっと正しいことをするように、聖なる者と言われていた人はもっと神さまの子どもらしい清い人になっていきました。逆に、悪い心で、ちゃんとお話を聞かない人は、もっと悪く、もっと心が汚くなって行ってしまいました（11節参照）。御言葉を聞いて行う人になりたいと思います。

そしてイエスさまのことを正しく知る人にもなりたいたいですね。イエスさまは「アルファであり、オメガである。最初の者にして、最後の者。初めであり、終わりである」と言われました（13節）。イエスさまは天地創造の初めから神さまと共におられて、

この世界を完成させ、終わりの形にしてくださいのお方です。イエスさまはまた「ダビデのひこばえである」ともおっしゃいました。ダビデに約束された救いを実現したお方、「ダビデの子メシア（救い主）」として来てくださったのでしたね。すべて、旧約聖書に書いてあるとおりに神さまの救いを実現してくださったお方です。それを聖書から正しく知っていることが大切です。

苦しいとき・悲しいとき、早くイエスさまに助けに来てほしい、と思います。そういうとき、私たちはいつもイエスさまに「来てください」と祈りましょう。イエスさまは「わたしはすぐに来る」と言っています。でも、世の終わりがすぐに来てしまう、ということではありません。私たちが「来てください」と祈るときには、「わたしの心が神さま（イエスさま）の心と同じになれるように、神さまの御心を知って、神さま（イエスさま）に信頼していることができますように。イエスさまがすぐそばにいらっしゃることを今感じることが出来ますように」という気持ちで祈ります。そういう心に、イエスさまは「すぐに来」てくださいます。

「来てください」というお祈り、すぐに思い出せますか？ 私たちがいつも祈っている主の祈りにはその言葉があります。「御国を来たらせたまえ」と祈っていますね。イエスさまは「来てください」という祈りを忘れないためにも、主の祈りを私たちに教えてくださったのです。いつもこの祈りを祈り、そして教会の礼拝で御言葉を聞いて、毎日の生活を神さまの子らしく歩んでいきましょう。イエスさまにお会いできるのを楽しみにしながら……。 (赤石めぐみ)

《今週の暗唱聖句》

「然り、わたしはすぐに来る。」アーメン、主イエスよ、来てください。(ヨハネの黙示録22章20節)

11月25日 ヨハネの黙示録22章6～21節

【幼稚科】

## キリストの再臨

### 〈ねらい〉

すぐにまた私たちのもとに来てくださると約束してくださったイエスさまは、今のときを忍耐するよう励ましてくださっていることを覚える。

### 〈展開例〉

イエスさまは、十字架で死なれて復活したあとに、天にのぼり、信じる私たちに聖霊さまを与えてくださいました。そして、お弟子さんたちは聖霊のお働きによってそれぞれで神さまのことを書き、それが神さまからの大きなラブレターとして聖書になりました。今日は神さまからのラブレターの最後に何が書かれているかを見てみましょう。

「わたしはすぐに来ますよ」というイエスさまの言葉が何回も書かれています。

みんなは、迷子になったときやケガをして痛い思いをしたとき、お父さんやお母さんになるべく早く来てもらいたいと思うでしょう。

この世の中には人間の罪（神さまの目に悪い心）によって戦争や地球の温暖化、悲しいことや心が痛むことがたくさんあります。だから、信じている人には聖霊が与えられて助けも与えられますが、人間の罪深さに「神さま早く私たちを助けにきてください」という思いになります。ましてやこの最後のラブレターが書かれたときには、救い主イエスさまを信じる人へのいじめがひどい時だったので、「わたしはすぐに来ますよ」と何回も神さまが言ってくださっ

たことに、クリスチャンたちはとても励まされたことでしょう。

天使は、次のようなことをイエスさまの弟子ヨハネに伝えています。……わたしが話す神さまの言葉は信じてよい本当のことです。この言葉をそのまま人々に伝えてくださいね。イエスさまはすぐに来ます。それまで神さまを礼拝し続けましょう。この預言の言葉を守る人は幸いな人ですよ。この世の終わりのときが近づいています。神さまに、「ごめんなさい」と悔い改めようと思っても間に合わないときがきます。そのようなときが来る前に私たちは悔い改めて（神さまに向き直って）、イエスさまの救いを受けましょう。わたしたちを造ってくださった神さまの子どもとして、お父さんが来てくれることを待ちながら、これからも神さまの子どもとして歩みましょう。神さまからのラブレターをいつも読んで祈り、サタンの働きから自分を守って、たくさんのお愛をもらって歩みましょう、と。

神さまがきつと、そうさせてくださいます。神さま、私たちの信じる心を強めてください。

### 〈祈り〉

神さま、ありがとうございます。与えてくださった約束を信じ、あなたといつも一緒に歩ませてください。

### 〈やってみよう〉

♪主イエスとともに♪を賛美しましょう。

11月25日 ヨハネの黙示録22章6～21節

【小学科上級・中学科】

## キリストの再臨

### 1. ヨハネの黙示録22章6～11節を読みましょう

①天使は言葉について、ヨハネに何を語っていますか。

②天使は、地上にいる者たちは何をするように言っていますか。

### 2. ヨハネの黙示録22章12～17節を読みましょう

③イエス様が来られる時や、ご自身の説明、私たちがすべきことが書かれています。それを抜き出して、それぞれの意味について話してみましょう。

### 3. ヨハネの黙示録22章18～21節を読みましょう

④「この書物」とは何ですか。また「この書物」について、イエス様はどんな約束をしてくださっていますか。

### 4. ヨハネの黙示録22章6～21章を読みましょう

⑤この中で、強調されている箇所は何ですか。そのことは私たちに、何を与えてくださることになりますか。



12月2日 ルカによる福音書21章25～36節

【解説と黙想】

## 人の子が来る

21章5～38節は、「ルカ福音書の小黙示録」と呼ばれ、終わりの時についての教えがまとめられている。5～6節は神殿の崩壊の予告、7～19節は終末のしるしについて、20～24節はエルサレム滅亡の予告、25～28節は人の子の到来について、29～33節は「いちじくの木」のたとえ、34～36節は終末に備えて生きる生き方を教えている。

終末のしるしとして、偽キリストが現れること、戦争や暴動が起こること、飢饉や病気、天変地異が起こること、さらに教会とキリスト者に対する迫害も起こることが示されている。そのような、私たちをおびえさせることが告げられるが、この小黙示録の基本的メッセージは、「おびえてはならない」(21:9)ということであり、落ち着いて備えていることである。この箇所は、信仰者を不安に陥れるために書き留められたのではない。主イエスは、忍耐によって命を勝ち取る(21:19)ために、「いつも目を覚まして祈りなさい」(21:36)と、信仰者を励ましてくださったのである。

25～28節では、終末の本質が示されている。地上の諸国の民を不安に陥れるような天変地異的な自然現象が起こるであろう。それは大地震や異常気象などによって、しばしば経験されていることである。人々はそれらによって不安に陥るであろう。けれども、それらに終末の本質があるわけではない。終末の本質は、「人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来る」ことにある。「力と栄光を帯びて雲に乗って」とは、人の子キリストがまことの神であることが誰にも明らかな仕方で来られるということである。今は、聖霊によって信仰を与えら

れた者でなければ、人の子をまことの神として認めることはできない。けれども、終わりの時には、すべての人がキリストをまことの神、まことの王と認める仕方で来られるのである。それゆえ、私たち信仰者は、キリストの再臨を恐れるのではなく、身を起こし、頭を上げて、喜びと期待をもって待ち望む。

29～33節では、終末のしるしを見て、神の国が近づいていることを悟ることが求められている。農夫がいちじくの木に葉が出始めたことを見て夏の到来を悟るように、終末のしるしを見て私たちは神の国が近いことを思い起こす。「すべてのことが起こるまでは、この時代は決して滅びない。天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない」。私たちはしばしばこの天地が永遠であると思込んでいる。けれども、この天地は神の被造物に過ぎず、始まりがあるように終わりがある。真実には変わらないものは、神の御言葉であり、神ご自身である。そのことを忘れてはならない。

34～36節では、いつも目を覚まして祈ることが求められている。キリストの再臨を待ち望む信仰的な感覚を鈍らせてしまう、放縦や深酒、生活の煩いに注意すべきである。「このくらいなら大丈夫」と思って深酒すると失敗するように、「このくらいの罪なら」「このくらい礼拝を休んでも」という思いが私たちの信仰的な感覚を麻痺させる。聖書の御言葉を聞いて祈り、礼拝する生活が「目を覚まして祈る」生活である。それらによって、私たちは、「主イエスよ、来てください」(黙示録22:20)と祈って歩むのである。(望月 信)

《参照聖句》 黙示録22章20節

《教理問答》 「子どもと親のカテキズム」問39

12月2日 ルカによる福音書21章25～36節

【説教展開例】

## 人の子が来る

◇..... 単元のねらい .....◇

この世界には終わりがあがあるが、信仰者はそのことで不安に陥る必要がない。それは、終わりの時の本質が主イエス・キリストの再臨にあるからである。この単元は、キリストの再臨を待ち望む、落ち着いた信仰生活へと励ますことを目的とする。

### 「人の子が来る」

世界には終わりがああるということをお考えたことがありますか。昨日が過ぎて、今日がああって、あしたがあ来る。そして、あさって、しあさって、そうやって次の日があ来るのは当たり前だと思いませんか。実は、決して当たり前ではありません。

ぼくが子どもの頃、「もうすぐ世界の終わりが来る」と、よく言われていました。「ノストラダムスの大予言」が流行して、「1999年の9の月に世界は終わる」と言われたりしました。もうそれから20年近くたちますが、まだ世界は終わっていません。

ぼくは、『ノストラダムスの大予言』のような、世界はいついつ終わるといったような話を信じていません。けれども、一つ、本当のことがあります。大切なことがあります。それは、この世界には終わりがああるということです。この世界は初めからあつたのではなく、神さまがあ造られました。神さまが「光あれ」とおっしゃって、この世界があ造られた。だから、この世界がああります。そうであるならば、神さまがあ決めておられる終わりの時がああります。それがいつであるのかは分かりません。けれども、始まりがああるのだから、終わりもある。

今日、皆さんと一緒に読んだ御言葉に、こうありました。「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない」。これは、天と地、この世界のことです。この世界には終わりがあある。「滅びる」というのは、神さまがあこの世界を終わりにされるということです、神さまがあ決めておられる終わり

の時がああります。それに対して、「わたしの言葉は滅びない」、「わたし」とはイエスさまです。ですから、イエスさまの言葉は滅びない、神さまの御言葉は決して滅びることがない。イエスさまはそうおっしゃいました。そして、神さまの御言葉が滅びることがない、それは神さまがあ変わらないお方だからです。神さまは初めから終わりまで変わらない、いや、それだけでなく、この世界の始まる前からおられ、この世界の終わりのさらに向こうにおいてもおられる、それがまことの神さまなのです。

イエスさまは、私たちが神さまのものとされていることを教えてくださいました。私たちが、ただこの世界の中で生きているだけだったら、世界の終わりの時に一緒に終わりになるでしょう。けれども、イエスさまの御言葉を聞いて、神さまを信じる生き方をしていれば、たとえこの世界が終わりになっても、その終わりの時を越えて、イエスさまと一緒にどこまでも生きるものとされるのです。イエスさまは、そのために、十字架につけられて死なれ、罪と死の力に打ち勝って復活されました。そのイエスさまと結ばれて、私たちは、たとえ世界の終わりが来たとしても、生きることができます。なんと素晴らしい神さまの御業でしょう。

世界には終わりの時がああります。けれども、それは私たちが終わるときではありません。むしろ、終わりの日は、私たちにとつ

ては喜びの日です。

世界の終わりという、天変地異が起こると思うかもしれませんが。大地震や洪水が起こるのではないかと思うかもしれませんが。それらは、終わりの時が近づいているしるしではありますが、それらが起こるからといって、すぐに終わりの時になるわけではありません。

世界の終わりは、神さまの御業として起こります。その日、私たちの救い主であるイエスさまが再び来られます。イエスさまは今、天におられる、その天から、やがて再び来てくださる。終わりの日に来られます。それは、誰もがこのお方がまことの神、まことの王であると分かる仕方で来られます。今は、教会に来て、礼拝をささげている私たちだけです、イエスさまがまことの王さまだと知っているのは。けれども、終わりの日には、誰もがイエスさまが神さまとしての権威と力をお持ちである、神さまの栄光を帯びておられるお方である、そのことが分かるのです。そうして、イエスさまは、この世界を神さまのものとして新しくしてくださいます。そのときに、私たちイエスさまを信じている人たちの罪が赦されていること、イエスさまによって新しい命を生きるものとされていること、そのことも明らかになります。本当だったのだと、はっきりと分かるのです。

終わりの日は、そのようにして、これまででは信じて待ち望むしかなかったことが、すべて明らかになる日です。だから、私たちは終わりの日を恐れるのではなく、待ち望むことができます。「イエスさま、来てください」と言って、待ち望むのです。

イエスさまを待ち望む、それは、イエスさまの言葉を聞いて、神さまの御言葉を信じて礼拝をささげて、待ち望みます。

イエスさまは、「いつも目を覚まして祈りなさい」とおっしゃいました。それは、

私たちが神さまに心に向けて、神さまを礼拝する生き方をすることです。神さまの御言葉を聞いて、御言葉を蓄えて、私たちの心を神さまに向けていることです。私たちの心が神さまに向かっているならば、私たちは、神さまのものとされています。私たちが地上のいろいろな楽しみに心奪われて、神さまを忘れてしまうならば、私たちの心は神さまに向かいません。それが、目が覚めていないということ、信仰が眠ってしまうということです。

「今日くらいお祈りしなくていいや」、「今日くらい礼拝をお休みしていいや」と考えることがあるでしょうか。そうすると、いつの間にか私たちの信仰は眠ってしまいます。心が神さまから離れて、地上のことに向かってしまうからです。イエスさまは、そのことを戒めておられます。

イエスさまがいつ再び来られるのか、それは私たちには分かりません。分かりませんが、近づいていることは間違いありません。いつイエスさまが来られてもお迎えできるよう、備えていることが大切なのです。私たちは、毎週日曜日に礼拝しています。欠かすことなく礼拝すること、これが目を覚まして祈っていることです。また、私たちは毎日聖書を読み、お祈りしています。『リジョイス』の「いのちのパン」を読んでいるお友だちもいるでしょう。それも目を覚まして祈っていることです。

天におられるイエスさまは、「主イエスよ、来てください」と祈る私たちに聖霊を与えて、今、聖霊において一緒にいてくださいます。聖霊によってイエスさまを信じることができる、天の御父を「アッバ、父よ」と呼ぶことができる幸いが与えられています。今、共におられるイエスさまに守られて、やがて来られるイエスさまを待ち望むのです。「主イエスよ、来てください。」  
(望月 信)

《今週の暗唱聖句》

アーメン、主イエスよ、来てください。(ヨハネの黙示録22章20節)

12月2日 ルカによる福音書21章25～36節

【幼稚科】

## 人の子が来る

### 〈ねらい〉

神さまがこの世の終わりに備えて今を生きるよう励ましていることを覚える。

### 〈展開例〉

この世の終わりに、具体的にはどんなことが起こるのでしょうか？ イエスさまがこの地上にいた時に、お弟子たちに直接教えてくださったことが、今日のお話です。

ニセモノのキリストが現れること。戦争が起こったり、人々がみんなで暴力で不満をぶつけたり、食べ物が無くなって何も食べられなくなったり。病気がはやったり、天や地でいろいろな自然さいがいが起こったり、教会とイエスさまを信じる人たちに對する迫害（いじめ）も起こる、と言うのです。

こういうことを聞くと、怖いなあと思えますね。世界をみわたすと、実際にもう起こっていることもあります。でもこういう出来事があっても「おびえてはいけませんよ」、「いつも目を覚まして祈っていないさい」、「私の言葉（聖書のみ言葉）は変わりませんよ」と、イエスさまを信じる人たちに、落ち着いて準備をしているよう、励ましてくださっています。

「目を覚まして祈る」というのはどういうことでしょうか。寝ている間はもちろん

お祈りはできませんね。でも、聖書のみ言葉を聞いてお祈りして、神さまを礼拝する生活をするということ。喜んで感謝して生きること。そのことが目を覚まして祈ることです。いつも神さまのみ言葉に親しみましょう。神さまとお祈りしてお話しましょう。

この世の終わりのとき、神さまのひとり子のイエスさまは、はかりしれない力と栄光で、キラキラ輝きながら、雲に乗って来てくださいます。イエスさまを信じていない人にも、あの方はほんとうの神さまだ！ 本当の王さまだ！ とわかる方法で。

神さまを信じる私たちは、こわがる必要はありません。喜んで、期待して、もう一度来るイエスさまを待ち望みましょう。そして、この世の終わりの前に、ひとりでも多くの人たちが神さまを信じることができるように、祈っていきましょう。

### 〈祈り〉

神さま、イエスさまをこの世に送ってくださってありがとうございます。わたしがいつも目を覚まして神さまに目を向けて祈ることができるようにさせてください。

### 〈やってみよう〉

賛美しよう♪ぼくのこころの中が♪

12月2日 ルカによる福音書21章25～36節

【小学科上級・中学科】

## 人の子が来る

1. ルカ21章25～28節を読みましょう。

①「人の子」とは、誰のことですか？

②「人の子」が来る時、どんなことが起こりますか？ 人々は、それをどう感じますか？

③イエスさまを信じる私たちにとっては、どんな時なのですか？

2. ルカ21章29～33節を読みましょう。

④25～28節のことが起こるのは、何のしるしですか？

⑤決して滅びないものは、何ですか？

3. ルカ21章34～36節を読みましょう。

⑥「心が鈍くなる」とは、どんなことですか？

⑦「その日」が来るまで、私たちはどのように過ごせば良いですか？

12月9日 ルカによる福音書3章1～20節

【解説と黙想】

## 歴史の中で示された救い

「神さまの言葉が荒野で……ヨハネに降った」（2節）と記されています。ここに記されている「荒野」というのはパレスチナの特定の地域を指しているだけではなく、人々が置かれた状況をも荒野という言葉で表現していると言えます。

当時ユダヤはローマ帝国に支配され、ローマから監督者として総督が送り込まれていました。異国人に支配されることは屈辱です。しかもローマ人は偶像礼拝を行う人たちです。唯一の神さまを信仰することを誇りとするユダヤ人にとってはなお一層耐え難いことでした。しかしそれだけではありません。ユダヤの指導者達もまた民衆を虐げていました。ヘロデ家の人々はユダヤ人でありながらローマ皇帝に媚びつつ、自分たちの都合の良いように国を分割して、それぞれが権力者として好き放題振舞っていたのです。

宗教的指導者も同様でした。本来、一人であるはずの大祭司が二人いました。義理の親子が自分たちの一族の繁栄のためにこの地位を利用していたのです。このようにユダヤの指導者たちは、自分に都合よく行動し、民衆を顧みなかったのです。このような指導者たちに支配されている状況が荒野として描かれているのです。この人間の悲惨を深く受け止めるようにと洗礼者ヨハネは荒野に導かれたのです。

神の言葉が降った洗礼者ヨハネは人々に旧約聖書のイザヤ書を示しました。そのイザヤ書にも「荒野」という言葉が出てきます。それが指していたのはバビロンという国です。ユダヤの民はバビロンに捕虜として捕え移されていたのです。なぜそのよう

な事態になったのか。それはユダヤの指導者たちが神を忘れ、私欲におぼれ、民を顧みなかったからでした。このように荒野というのは人間が、その罪の結果追いやられる場所として聖書では記されているのです。

今日の箇所には、「わたしたちはどうすれば良いのですか」という人々の戸惑いの声が繰り返し記されています。この声は全ての人間にとって根源的な叫びです。誰もが荒野からの脱出を願いつつもその方法が分からないのです。

そのような人たちに神さまは洗礼者ヨハネを通して脱出への道を示されました。しかし領主ヘロデはヨハネの言葉を無視しそれを封印しようとして、彼を牢に閉じ込めました。それは領主ヘロデが特別罪深かったからではありません。誰もが荒野へと追いやられる罪があり、人間の力ではそこから脱出できないということが記されているのです。

神さまは人の絶望的状况から救おうとされ、救いの御計画を立てておられました。それをエジプトやバビロンからの帰還という形で見せて下さっていました。そして最終的に、イエスさまを通して示して下さいました。それこそ荒野からの本当の帰還を可能にするものであり、神さまの元へ帰って永遠にそこで憩うということを実現してくれるものでした。このイエスさまさえも受け取ろうとしない罪が人間の中にはありますが、イエスさまを受け取らないことは永遠に荒野からの帰還を不可能にします。私たちの救いであるイエスさまを深く受け止めたいと思います。（常石召一）

《参照聖句》 使徒言行録2章37～42節

《教理問答》 「子どもと親のカテキズム」問22、25

12月9日 ルカによる福音書3章1～20節

【説教展開例】

## 歴史の中で示された救い

◇..... 単元のねらい .....◇

私たち人間は今どこにいて、どこに行くのでしょうか？そして神さまの救いに与るためにはどのようにすれば良いのでしょうか？このような問いは全ての人にとって大切です。神さまは私たちのために歴史の中で答えを示して下さっています。それを知ることは全ての人にとって最も大切なことです。

### 「荒野に降った神の言葉」

洗礼者ヨハネを皆さんは知っていますか？ヨハネは荒野にいる不思議な人物です。荒野というのはどういう所かと言うと、雨がほとんど降らず、そのために草木がほとんど生えない、動物もほとんどいない所です。人間が生活するのは難しい危険です。どうしてヨハネはそんな所にいるのでしょうかね。ヨハネがどうして荒野に住むようになったのかは聖書に書かれていませんが、神さまに導かれたのは確かです。

ヨハネが荒野にいたある時、神さまの言葉がヨハネに降りました。神さまは天からヨハネに話しかけられたのです。神さまが人間に対してどのような思いを抱いておられるのか、また神さまがこれから何をしようとしておられるのかを、ヨハネに伝えられたのです。神さまの言葉を受けたヨハネは人々に洗礼を受けるように勧めました。神さまは、あなたたちが神さまの元に帰って来ることが出来るようにして下さい、だから罪の歩みを止めて神さまの元に帰って来るように、その決意として洗礼を受けなさい、こう呼び掛けたのです。

人々は洗礼を授けてもらおうとしてヨハネの所にやって来ました。ヨハネが語っているのは本当に神さまの言葉だと信じ、この言葉に従おうと思ったのです。彼らは聞く耳のある人たちでした。しかしそのような人たちにヨハネはとても厳しいことを言いました。「蝮の子らよ」、こんな言葉で呼

びかけたのです。蝮というのは毒を持った蛇のことです。唾液に毒を持ち、牙を用いて相手に毒を注入する。中には口から毒を吐いて相手に浴びせかける蝮もいます。あなたたちはそういう者だ、と言うのです。

ヨハネはさらに「差し迫った神の怒りを免れると、誰が教えたのか」と問います。神さまはあなたのおしていることに対して怒っておられる、あなたは本当に悪いことをしている、神さまから裁かれないかとも思っているかも知れないがそんなことはない、と言うことです。

そしてこう続けました。「斧は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる」。神さまがお裁きになる日は近い、神さまはその準備をすでに終えておられる、後は行動に移されるだけだ、今すぐにもそれは起こる。その時、人は火に投げ込まれて、灰になってしまつて、何もなくなってしまう、そう宣言したのです。

これを聞いた人たちは、びっくりしてしまいました。自分にそこまでの罪があるとか、裁きの日がそれ程近づいているなどとは思ってもみなかったのです。ヨハネの言葉は余りにも厳しくて、逃げ出したくなる、あるいは聞かなかつたことにしたくなるようなものでした。しかし群衆は逃げ出さないうでヨハネにこう質問しました。「では、わたしたちはどうすれば良いのですか」。

何とかして神さまの怒りから免れる方法があるならばそれを教えて欲しい、と思ったのです。

徴税人もやって来て言いました。「先生、わたしたちはどうすれば良いのですか」。徴税人とは天国に行けるはずがない悪人と見なされていた人たちです。悪いことをどうしてもやめられない人たちでした。

兵士もやって来ました。兵士というのは武器を持っている人たちです。ヨハネを無理やり黙らせることも出来た人たちです。しかし彼らもまた「このわたしたちはどうすれば良いのですか」と聞きました。

みんな「どうすれば良いのですか」と同じ言葉で質問しています。繰り返されているということは、全ての人間が同じ問題を抱えているということです。神さまの言葉に照らされて自分の真実の姿を知らされる時、人は絶望して「どうすれば良いのですか」と叫ぶしかないので。

ところが領主ヘロデという人は、自分の罪を厳しくヨハネに指摘された時、「どうすれば良いのですか」と言いませんでした。自分にはヨハネを黙らせる力があると思っていただけでしょう。黙らせることによって自分の力を見せつけてやろうと思ったのでしょうか。今まで自分がやって来たことを変えようとせず、ヨハネを牢屋に閉じ込めました。それは一人の人を牢屋に閉じ込めたというだけでなく、神さまの言葉を牢屋に閉じ込めたのと同じことです。

このように罪には、何としてでも神さまに背を向けさせようとする力があります。神さまの呼びかけから遠ざかる所に救いはありません。神さまはそうならないようにと私たちに語り掛けて下さいます。頑なにならずには神さまの呼びかけに応じて欲しいと望んで下さっているのです。

「どうすれば良いのですか?」。その答え

が私たちにはあるのでしょうか。実は人間は正しい答えを持っていません。しかし神さまは示して下さいました。この答えは使徒言行録に記されています。ペトロがイエス様について人々に話をした時、「あなたたちが神の子を十字架につけて殺したのです」と指摘しました。これを聞いた人々は言いました。「私たちはどうすればよいのですか」。今日の箇所と同じ言葉です。神さまの正しさと自分の罪に直面させられると、人はこのように質問せざるをえなくなるのです。それに対してペトロはこう言いました。「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい」。悔い改めるというのはただ反省するという意味ではありません。方向を変えて神さまの元に帰って来るということです。荒野をさ迷うような状態から神さまのところに帰って来なさい、そして洗礼を受けなさい、そうすれば神さまは赦して下さいます、とペトロは語ったのです。

人間には深い罪があります。それは人間を悲惨に貶めるものです、周りの人を深く傷つけるものです、また神さまに背中を向けさせるという性質もあります。その罪から自由になることは人間には出来ません。だから悲惨から自由になることは出来ません。しかし神さまはイエスさまを信じることによって罪と罪の結果を解決する道を開いて下さいました。実は、その日が来るということを神さまは旧約の歴史の中で少しずつ示して下さいました。今や私たちにはイエスさまを信じることによって救いに至ることが出来るようにされました。イエスさまを信頼することによって荒野から神さまの所に帰って行くことが出来るようにされたのです。(常石召一)

---

#### 《今週の暗唱聖句》

悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。(使徒言行録2章38節)



12月9日 ルカによる福音書3章1～20節

【幼稚科】

## 歴史の中で示された救い

### 〈ねらい〉

神さまは、イエスさまが地上での働きをされる前に、ヨハネを用いて救いを受け入れる準備をさせたことを覚える。

### 〈展開例〉

悲しいことやひどいなあと思ったこと、どうしてこうなるの？と思うことはありませんか？お友だちやきょうだいに何かを横取りされたり、仲間に入れてもらえなかったり。優しくしようと思ってもうまくできなかつたり……。人間の罪—神さまの目で見ても悪い心は、みんなのような小さい子どもにもあります。

洗礼者ヨハネさんがいた時代も、沢山の人間の罪があふれていました。本当の荒れ野にヨハネさんは住んでいましたが、人の罪もいっぱいあった、まさに「荒れ野」のような中で生きていました（今の時代もそうですね）。でもそんなとき、天の神さまがヨハネに伝えたのが、「たくさんの人たちが神さまのもとに帰らせなさい」ということです。それははるか昔から預言者イザヤさんを通して神さまが命令していたことでもあります。

「神さまのもとに帰る」ってどういうことでしょうか。私たちの住んでいる家がありますが、私たちの本当の家は神さまの国にあって、神さまの子どもになることでその本当の家に帰ることができるのです。では、どうすれば神さまの子どもになることができるのでしょうか？それは、「悔い改めて洗礼を受ける」ことです。悔い改めてというのは今まで向いていた方向から向き

を全く変えるということです。「荒れ野」で自分の方ばかり向いて迷っていたところから、神さまの方に、くるっと向き直ることです。そして、「そうします」という思いを表すために洗礼を受けるということです。

ところが、ヘロデというその地域で偉かった人は、洗礼者ヨハネさんに自分の罪をきびしく言われたとき、ヨハネさんに「じゃあどうすればいいんですか？」と聞かずに、逆に怒ってヨハネさんを牢屋に閉じ込めてしまいました。思いと考えを固くして、ヘロデさんのように無理やり力で抑えたり神さまを否定するのではなく、神さまの呼びかけにこたえて信じる人になりましょう。この洗礼者ヨハネさんが「すぐに来るよ」と人々に伝えていた救い主イエスさまは、もう私たちのところに来てくださって、私たちの罪を背負って十字架で罪をゆるしてくださいました。そのイエスさまを信じて、イエスさまのお名前によって洗礼を受けましょう。そして、罪をゆるして頂き、神さまに感謝する人生を送れますように。

### 〈祈り〉

神さま、私たちが神さまの子どもになれるように、あなたの呼びかけにこたえて神さまの方に向き直ることができますように。

### 〈やってみよう〉

賛美しよう♪祈ってごらん、わかるから♪

12月9日 ルカによる福音書3章1～20節

【小学科上級・中学科】

## 歴史の中で示された救い

1. ルカ3章1～6節を読みましょう。

①そのころ、ユダヤの国を誰が治めていましたか？

②ヨハネはどこで、何をしましたか？

③イザヤは、ヨハネの働きを何と預言しましたか？

2. ルカ3章7～14節を読みましょう。

④群衆は、なぜヨハネのところに集まりましたか？

⑤群衆、徴税人、兵士の質問に、ヨハネはそれぞれ何と答えましたか？

3. ルカ2章15～20節を読みましょう。

⑥ヨハネは、メシア（イエスさま）について、どのように教えましたか？

⑦なぜ、ヨハネはヘロデに捕らえられたのですか？

12月16日 ルカによる福音書1章39～55節

【解説と黙想】

## マリアの讃歌

クリスマスの喜びの日の備えのために「マリアの讃歌」と呼ばれる歌を学べる幸いを感謝致します。この歌は、ラテン語の歌いだしの一句が、崇める（Magnificat）であるところからマニフィカトと呼ばれ、バッハをはじめ多くの有名な楽曲が生まれています。黙想の助けとなるかと思えます。

### 1. マリアの祝福の根拠（39～45節）

少女マリアは、生ける神の独り子の母となるべく選ばれました。彼女は、神の空前絶後の奇跡が他ならない自分に起こることを受け入れました。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身になりますように。」(38)と「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた」(45)のです。

当時、祭司はユダの山地の村里に住んでいました。マリアは急いで親類ザカリアの妻エリサベトに会いに行きました。エリサベトはマリアを「祝福された方」と呼びます。確かに、女性として救い主の母となること以上に誇らしい出来事はないように思います。しかし同時に、ここでアクセントがおかれているのは、彼女ただ一人に与えられたユニークな祝福のことであるよりも、主とその約束の御言葉を信じる信仰が与えられているということです。ちなみに、後にマリアが主の母なので幸いだと言われたとき、主イエスは「いや恵まれているのは、むしろ神の言葉を聞いてそれを守る人たちである」(11:28)と訂正されました。さらに、「神の御言葉を聞いて行う者こそ、

わたしの母、わたしの兄弟なのである」(8:21)とも語られました。つまり、真の幸い、祝福とは、生きておられる唯一の神の言葉でいらっしゃるイエスキリストとの交わりに生きる人のことです。具体的には、聖書の朗読と説教によって命と救いがつねに新しく注がれ、神に感謝と賛美をささげる人です。そしてまさにその意味でも、神の母マリアは、キリスト者の幸い、祝福を見事に証言することができた人です。それは彼女の讃歌に溢れ出ています。

マリアは三か月、ザカリアの家に滞在します。おそらく、ここでの信仰の交わりが彼女の信仰にいよいよ大きな影響を与えたであろうと思います。またこの讃歌への影響を否定することはできないだろうと思います。

### 2. 神を大きくする人の幸い

マニフィカトは、エリサベトの祝福の挨拶に対する応答歌となっています。「わたしの魂は主をあがめ」(47) マリアは開口一番、「あがめます」と主を賛美します。これは、「大きくする」という意味です。それはただちに、自らを主の器にすぎないものとして自らを小さくすることを意味します。彼女は、自分の身分、経済的な貧しさ、とるにたらない者であることを喜んで認めます。同時に、神の偉大なご計画の前には、それら人間的劣等感は何の意味も持たないのです。むしろ、「力ある方がわたしに偉大なことを」(49) なさったことを、

際立てせることに用いられてしまいます。人は、真実に神の祝福を受けたとき、彼女のように、ただ神にのみ栄光を帰する以外になにもできません。もしできるとすれば、それは、神の祝福がなお不十分であるということを、暗に証言していることになってしまうのではないのでしょうか。

### 3. クリスマスの政治的な意味

「権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ、飢えた人を良い物で満ちし、富める者を空腹のまま追い返されます。」(52, 53) クリスマスの出来事の政治的な意味を見事にあらわす詩です。クリスマスは永遠の神が永遠の人となられ、神の国が地上に決定的に始まることを意味します。神の御業はもはや不可逆的になります。つまり、取り消されないのです。神の国は神の主権的支配の完成です。それを端的に言えば、自分こそ唯一の権力者であると吹聴し、騙し、人間を身分の低い者、経済的に貧しい者を固定化するこの世の国と真逆な価値観で支配される場所のことです。したがって、偽りの権力者つまり神から権力を委託されたことを認め、謙虚にその力を行使しようとしないうちもは、その思い上がりを打ち散らされるのです。クリスマスはまさにこの新しい時代の始まりを顕在化し、実現なさる神の偉大な御業です。問われるのは、私どもは今すでに始まっているハズのこの現実にとどのように真実に向き合っているかなのだと思います。確かに、

権力ある者を引き降ろせるのは神であり教会の頭でいらっしゃるお方です。しかしもし、頭と体である教会とが相応しい主従関係にあれば、教会もまたこの讃歌を今こそ高らかに、しかも、教会の外で歌うことです。

70周年宣言「福音に生きる教会」の結びの「完成の日をめざして」の冒頭、この箇所が長く引用されています。「これこそキリストの福音がもたらす神の国の秩序である。わたしたちは終わりの日に実現するこの恵みと命の秩序を、今すでにこの世において先取りする。」宣言した主体である教会(大会、諸中会、各個教会)は今、具体的に何をどうすべきか、問われます。しかも契約の子たちにも、固有の出番があるはずです。

### 4. 少年少女の力

なお少女とも言いえるマリアの告白に驚かされます。一方で、詩編第8編で「主よ、わたしたちの主よ、あなたの御名は、いかに力強く、全地に満ちていることでしょう。天に輝くあなたの威光をたたえます。幼子、乳飲み子の口によって。あなたは刃向かう者に向かって砦を築き、報復する敵を絶ち滅ぼされます」とあります。権力から最も遠い子どもたちこそ、神の国の証人として用いられるはずです。世界中で、神をあがめる歌が真実に歌われるとき、御国の到来はいよいよ早められるでしょう。

(相馬伸郎)

---

《参照箇所》 出エジプト記20章3節、申命記5章7節

《教理問答》 「子どもと親のカテキズム」問26、62、63

12月16日 ルカによる福音書1章39節～55節

【説教展開例】

## マリアの讃歌

◇..... 単元のねらい .....◇

御子なる神の受肉のために用いられたマリアの存在は、すべての人間、とりわけ女性の尊厳にとって決定的で象徴的な意義を与えました。彼女は神に救われるべき人類と女性の確かな保証でもあります。彼女はまさに信仰の人でしたから、ただみ言葉に信頼し服従する「信仰」を学びましょう。また讃歌を通して、クリスマスの祝福とは神の国の到来であり、個人的救済のみならずこの世を雄々しく生きる希望と権力に真実に対抗する力の源泉であることをも学びたいと思います。

### 「マリアと共に歌おう」

アドベントの最後の主の日です。いよいよ来週、みんなで最高のクリスマス礼拝式をお祝いできるようにいたしましょう。どうしたら最高のクリスマスになるでしょうか。そのために、クリスマスの当事者となったマリアさんのことを学びましょう。

クリスマスの知らせは先ずマリアさんに告げられました。天使ガブリエルは、「おめでとう、恵まれた方」と挨拶します。そしてすぐに神さまからの伝言を告げます。「あなたは身ごもって男の子を産みます。その子をイエスと名付けなさい。その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない」。そのときマリアは、「はい、分かりました」と答えたでしょうか。できませんでした。「まだ結婚もしていない私にそんなことが起こるはずがありません。いえ、そんなことが起こってはなりません」と言いました。当然です。マリアは結婚できなくなってしまいます。ヨセフにも家族や親せきにも災いが降りかかってしまいます。子どもを身ごもったな

ら石打の刑で殺されてしまいます。ですからガブリエルは、やさしく説明します。「マリア、聖霊なる神さまがあなたに特別に注がれます。生まれる子は聖なる人間。神の子と呼ばれます。あなたの親戚のエリサベトだって高齢者にもかかわらず男の子をみごもっているのです。マリア、神さまにできないことは何ひとつありません」。マリアはついにその場にひざまずいて言います。「分かりました。わたしは主のはしためなのですから、喜んで神さまのお言葉に従います。仰ったことがそのままわたしの身に実現しますように」。実に、この瞬間、神さまの御子は聖霊によってマリアのお腹に宿られました。

さて、マリアは天使の告げた御言葉を信じるからこそそれを確かめようとします。こうして、親類エリサベトの家を訪ねます。マリアは、一部始終をすべて打ち明けます。するとどうでしょう。エリサベトもまた、いっしょに信じ、そればかりか天使が告げた通りお腹の赤ちゃんが喜び躍ったということです。エリサベトも言います。「主がおつ

しゃったことは必ず実現すると信じたあなたは、なんと幸いな人でしょう」。

さて、何故、マリアはイエスさまのお母さんに選ばれたのでしょうか。ひとつには、彼女がダビデ家の出身のヨセフのいいなずけだったからです。イエスさまはダビデの家から生まれることになっていました。もう一つは、何とんでもこのマリアさんは、私たちの信仰のまさにお手本になるような人だからです。信仰とは、神さまそのものに他ならない御言葉を信じることです。神がおっしゃったというただそれだけを頼りに信じ、そして、そのために自分のすべてを明け渡し、差し出すことです。確かに、そのようなことは毎日あるわけではありません。マリアさんのようなことは二度と起こりません。けれども、やがてあなたにも、神さまが「あなたは、こうなりますから、わたしがこうしてあげますから、今、わたしについて来なさい」と語って下さるときが来ます。何度も来るはずですよ。そのとき、マリアのことを思い出してください。そうすれば僕たち私たちも、マリアのように、神さまの救いのご計画を前に進めることができます。

最後に、マリアさんが歌った讚美歌から学びましょう。マリアさんは、クリスマスの出来事を思いめぐらしたとき、心の底か

ら神さまへの賛美が溢れ出てきました。「主をあがめます！」と歌い始めます。これは、神さまを大きくしますという意味があります。「神さまは神さま！ 神さまだけが神さまとしてほめたたえられますように。そのためならわたしがどんどん小さくなくても嬉しいです。」そんな意味です。信仰を与えられていてもやっぱり心の中に「神さまだけがほめたたえられるのではなく、神さまのためにしている自分のこともほめてね」という気持ちがあります。でも、よく考えましょう。本当に神さまのすばらしさがあらわされるとき、私たちができることは小さなことでしかないことが分かってきます。聖書を読むと、本当に神さまのお働きのお役に立てた人は、マリアさんのように自分のことを小さくしています。僕たち私たちも、本当に神さまのお役に立てるように祈りましょう。そのとききっとあなたもマリアのように、「主をあがめます」と歌っているはずですよ。

マリアさんは「権力ある者をその座から引き降ろす」と歌いました。それは、イエスさまだけが本当の権力者、つまり唯一の王さまだということです。世界中で、本当のクリスマスが正しくお祝いされるとき、世界に平和が実現し、愛と正義によって地上に住む全ての人に喜びが広がります。来週、そのようなクリスマス礼拝を皆でお捧げしましょう。(相馬伸郎)

---

《今週の暗唱聖句》

わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である主を喜びたたえます。(ルカによる福音書1章47節)

12月16日 ルカによる福音書1章39節～55節

【幼稚科】

## マリアの讃歌

### 〈ねらい〉

神さまは、ただその人の信仰を見ておられ、神さまに信頼しそのお言葉に従うマリアをイエスの母として選ばれたことを覚える。

### 〈展開例〉

いよいよ来週がクリスマスをお祝いする礼拝ですね。イエスさまが誕生した約二千年前は、女の人は結婚する年が早かったのですが、たった12歳くらいのマリアさんのところに、神さまの言葉を伝える天使がやってきました。「おめでとう、恵まれた方……あなたは身ごもって男の子を産みます。その子をイエスと名づけなさい。その子は～」、そう言われてマリアはまだ結婚していなかったので、とても戸惑いました。でも天使ガブリエルは、「マリア、聖霊なる神さまがあなたに特別に注がれます。生まれる子は聖なる人、神の子と呼ばれます。あなたの親戚のエリサベトも年をとっているのに男の子をみごもっているのです。マリア、神さまにできないことは何ひとつありません」と言い、マリアはその場にひざまずいて「分かりました。わたしは主のはしため（召使い）ですから、喜んで神さまのお言葉に従います。おっしゃったことがそのままわたしの身になりますように」と、驚きの知らせにも、そのように受け入れ、神さまにゆだねて従うことができたのでした。そして、同じように神さまによって身ごもったザカリアおじさん家族のもとに行って、3ヶ月間すばらしい交わりを行い

ました。ザカリアの奥さん、エリサベトのお腹には、洗礼者ヨハネさんがいました。2人のお母さんは「神さまがおっしゃったことは必ずそのとおりにになると信じた人はなんと幸いでしょう」と喜びあったのです。マリアさんに起こった奇跡はもう二度と起こりませんが、あなたのような小さい子どもであっても、神さまがすばらしいことを見せてくださるかもしれません。神さまを本当の王さまとして礼拝し、み言葉がその通りになると信じるなら。神さまとのお交わりの中で「あなたはこうなります。わたしがこうしてあげますから、今、わたしについて来なさい」、そうお話しくなさるとき、マリアさんのことを思い出しましょう。その神さまの呼びかけにこたえて従うとき、神さまの救いのご計画が進んでいくでしょう。

そして、神さまを心から賛美したマリアさんのように、神さまがしてくださったことに心からの感謝をし、ただひとりの本当の王さまをほめたたえましょう。本当のクリスマスが、この世界中でお祝いされますように。

### 〈祈り〉

神さま、すばらしい出来事をありがとうございます。マリアさんのように、神さまの言葉をちゃんと聞いて従うことができるようにさせてください。

### 〈やってみよう〉

♪ハレル、ハレル主をほめたたえよう♪

12月16日 ルカによる福音書1章39節～55節

【小学科上級・中学科】

## マリアの讃歌

1. ルカ1章39～45節を読みましょう。

①マリアはなぜ、エリザベトのところへ行ったのですか？（1章26～38節参考）

②エリザベトは何を喜んだのですか？

2. ルカ1章46～55節を読みましょう。

③マリアの讃歌は、誰に対してのことばですか？

④マリアは神さまをどんな方だと言っていますか？

⑤神さまの祝福は、私たちにも与えられていますか？

⑥私たちも、このように自分のことばで神さまをほめたたえることができるでしょうか？



12月23日 ルカによる福音書2章1～20節

【解説と黙想】

## 主の降誕

“主”イエス・キリストの誕生は、羊飼いたちに現れた天使によって、「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシア（ギリシャ語キリストス：口語訳は、キリスト）である」（ルカによる福音書2章11節）と告げられた。

それは、「恐れるな、わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる」（10節）と告げられたとおりに、突然の「主の栄光」によって周りを照らされ、驚きと恐れを覚える、羊飼いたちに真っ先に伝えられた「大きな喜び」である（9節）。

四福音書の中で、ルカによる福音書は、イエス・キリスト誕生の日を告げる、ただ一つの福音書である。

その時は、「皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た」時。皇帝アウグストゥスの時代（B. C. 31年～A. D. 14年）は、“ローマの平和”（パックス・ロマーナ）の時代と呼ばれる地中海世界が帝政によって統一された時代。

「キリニウスがシリア州の総督であったときに行われた最初の住民登録」（2節）は、軍備と課税のために行われたもので、ユダヤ人たちは、ローマ軍への徴兵を免除されていた。ちなみに、アウグストゥスという称号は、「尊厳者」「威厳者」という意味。この称号の意味するように、多くの人々の崇拜、所によっては、礼拝の対象とされた時代のただ中に、まことの神、“主”メシア〔キリスト（油注がれた王）〕はお生ま

れになった（11節）。

ルカによる福音書は、“主”という御名を、主の栄光、主の天使、主メシア〔キリスト〕と繰り返す。

「天の大軍」による神賛美では、「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ」と歌われ、世の外面的な栄光と平和とは異なる、御子イエス・キリストの主権的な支配と人々の本当の社会的平和の実現を宣言する。

このように、事実、主なる神は、ご自身の契約と誓いを、預言のとおり、神の独り子、イエス・キリストの降誕において、実現（成就）された（イザヤ書9章5、6節）。

この神の独り子、イエス・キリストの降誕は、「布にくるまって飼う葉桶の中に寝ている乳飲み子」（12節）として、「あなたがへのしるし」（同）された、恵みの出来事であった。

羊飼いたちは、「主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」（15節）と話し合い、「マリヤとヨセフ、飼う葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた」（16節）。今日、わたしたちが、この“主”の降誕を知ることは、ただ、最初のクリスマスの日を思い起こすことにとどまらない。それは、この“主”こそ、信じる者すべてに、神を喜んで生きる、本当の豊かさを与えてくださるお方である。子どもたちに、この“主”の貧しさを十字架への道をもって伝えつつ、共に、本当のクリスマス喜び、祝いたい。（宮武輝彦）

《参照聖句》 歴代誌上17章11節、ミカ5章1節、2コリント8章9節、フィリピ2章6～11節

《教理問答》 「子どもと親のカテキズム」問26～29、ウェストミンスター小教理問答 問21、22、26

12月23日 ルカによる福音書2章1～20節

【説教展開例】

## 主の降誕

◇..... 単元のねらい .....◇

①イエスさまは、私たちと同じようにお生まれになった。②しかし、その誕生は、「降誕」（こうたん）と呼ばれる、神さまの約束に実現であり、世界の歴史が二分される大きな出来事であった。③永遠の神の御子、イエスさまの誕生は、最初に羊飼いたちに伝えられた。④そして、今日、羊飼いたちに伝えられた「大きな喜び」を、今、私たちは共にし、世界の人々とともに、神さまを賛美し、神さまによる救いの恵みを分かち合いたい。⑤聖霊の恵みを祈り求め、イエスさまの十字架・復活・昇天・再臨を信じ、イエスさまこそ“主”（真の神、すべての人の王：油注がれた方）との信仰告白へ導かれたい。

### 「本当の救い主、イエスさまのご降誕（こうたん）」

クリスマスおめでとうございます！クリスマスは、イエスさまがお生まれになった日ですね。

みなさんは、自分が生まれた日を知っていますか。そうですね、20〇〇年に生まれたのですね。

先生は、19〇〇年に生まれました。ところで、この年数は、いったい何をもとにしていると思いますか？

それは、イエスさまがお生まれになってからです。正確には、少し誤差がありますが、もともと基準にしたかったのは、イエスさまのお生まれになった年です。

ということは、世界の歴史は、イエスさまが生まれてから後と、生まれる前に分けられるということですね。

ところで、歴史のことを、英語でヒストリー（HISTORY）と言います。それは、「彼の」歴史という字で、「キリストの」歴史と覚えることができます。

世界の歴史は、イエスさまのことがどのように伝えられていったか、ととても深い関係があります。

日本でも、イエスさまのことが広く人々に伝わっていくとき、社会が少しでも良くなってきたように思います。

反対に、国と国が争っているような時には、イエスさまのことを伝えたくても、なかなか伝わっていきません。

じつは、イエスさまがお生まれになった時代は、ローマ皇帝が治める“ローマの平和”と呼ばれた時代でした。でも、この平和は、けっして、人々の暮らしがよかったのではなく、ローマの軍隊の力を強くし、また、必要な税金を人々から取って、同時の地中海のまわりに広がっていた世界の人々を治めようとしていたのです。

イエスさまのお父さん、ヨセフさんとお母さん、マリアさんは、このローマの時代に、人口調査のため登録するために、ふるさとのダビデの町ベツレヘムに行きました。

羊飼いたちは、多くの人々が、人口調査をするためそれぞれの生まれたところに集まっていた時、その数に入らない、貧しい人たちでした。

でも、神さまは、羊飼いたちの心をよく知っておられました。それは、本当の救い主が来られることを信じて待つ信仰です。

ある夜、羊飼いたちが、野宿しながら、羊の番をしていたときです。

あたりが急に明るくなって、神さまから

遣われたみ使い、天使の声が聞こえました。

「恐れることはありません。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げます。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主キリストです。

あなたがたは、布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしです。」

すると、突然、この天使に大勢の天使たちが加わって、神さまを賛美して言いました。「いと高きところには栄光、神にあれ。地には平和、御心に適う人にあれ」。

天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主なる神さまが知らせてくださったその出来事を見ようではないか」と話し合いました。

そして急いで行って、マリアさんとヨセフさん、また飼葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てました。

みなさんは、イエスさまが生まれて寝かされた、「飼葉桶」とは何か知っていますか。

そうですね。牛や、ロバなどが食べる飼葉、牧草を入れた桶です。イエスさまは、永遠の神さまの独り子でありながら、「豊かさ」ではなく、「貧しく」なられたお方です。

人口調査のために、ベツレヘムの宿はどこも一杯で泊まる場所がなかったのですが、「飼葉桶」の置かれた家畜のいるところ、家畜小屋、あるいは洞穴とも言われますが、イエスさまはお生まれになったのです。

聖書をよく読むと、「布にくるまれて」と書いてあります。羊飼いたちに告げた、天使たちも、同じことを言いました。

イエスさまは、マリヤさん、ヨセフさんの手によって、大事に育てられたんですね。皆さんも、神さまに守られて、生まれる

前から、生まれた時から、本当に、お母さん、お父さん、家族の人たちに、大事に育てられて、大きくなったと思います。

それと同じ様に、イエスさまも、神さまに守られて、恵みによって、成長されていきました。

そして、イエスさまは、十字架の上で、私たちの身がわりとなって、死んでくださり、三日目に復活され、弟子たちの見ている前で、天に上げられました。

「飼葉桶の中に布にくるまっている乳飲み子」こそ、私たちのために、十字架に死なれた救い主、贖い主である、イエスさまです。

ローマの皇帝アウグストゥスや、ユダヤの王さまは、立派な宮殿に住んでいましたが、イエスさまは、貧しい仕方でお生まれくださり、神さまの栄光をあらわしてくださったのです。

イエスさまのお生まれになることを預言した、イザヤという預言者はこう言いました。

「ひとりのみどりごが私たちのために生まれた。ひとりの男の子が私たちに与えられた。権威が彼の肩にある。その名は、『驚くべき指導者、力ある神 永遠の父、平和の君』と唱えられる」（イザヤ書9章5節）。

これは、イエスさまこそ、すべての人々の中に、本当の平和を与えてくださる、本当の王さまであることを教えています。

救いのお約束、契約において、イエスさまが来られることを約束してくださった、神さまは、イエスさまを世界の人々を治める王としてくださり、イエスさまがお生まれになった「大きな喜び」を人々に伝えてくださっているのです。

クリスマスの日、世界のすべての人々、教会の人々と共に、みんな、いっしょに、本当の救い主であり、本当の王さまでいます、イエスさまのご降誕（こうたん）をお祝いしましょう。（宮武輝彦）

#### 《今週の暗唱聖句》

あなたがたは、布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。（ルカによる福音書2章12節）

12月23日 ルカによる福音書2章1～20節

【幼稚科】

## 主の降誕

### 〈ねらい〉

神さまはイエスさまの誕生を、当時、のけものにされていたような羊飼いたちに最初に知らせたことを覚える。

### 〈展開例〉

クリスマスおめでとうございます！ みんなはどこで生まれたかお母さんから聞いていますか？ ほとんどの人がどこかの病院か自分の家で生まれているでしょう。それでは、イエスさまはどこで生まれたか知っていますか？ ベツレヘムという町の、ある家畜小屋（洞窟）でした。お部屋に泊めてくれる人が誰もいなかったのに、本当の王さまなのに、温かくきれいな場所で生まれたのではなく、ふんの匂いや動物の鳴き声もしていたような寒くて汚い家畜小屋で生まれたのでした。

そしてそのイエスさまのお誕生を最初に知らされた人は誰だったのでしょうか？ どこかの偉い人ではなく、その頃のけものにされていたような羊飼いたちでした。いつもと同じように夜も寝ないで羊の様子をみていた羊飼いたちに、いきなり天使からすばらしい出来事が伝えられました。そして光輝く数え切れないほどの天使たちが神さまを賛美するすばらしい様子を羊飼いたちは見ることができたのです！

イエスさまは、貧しく低い、汚い中に生まれてくださった方。私たちの汚い心の中に住んでくださって、ゆるしと喜びを与えてくださる方。私たちを救うため、十字架

で死んで復活するために、生まれてくださった神さまのひとり子です。

天使たちがすばらしい賛美をしたように、羊飼いたちはイエスさまと出会って、心から神さまをほめたたえ喜んで、また羊たちのもとに戻って行きました。

私たちも、どんなに小さく弱くても、“今イエスさまに会いに行きなさい”と神さまがあなたに声をかけてくださっています。自分を低くして神さまのお言葉に耳を傾け、そのお言葉のとおりにする人には、神さまの平和が、そしてすばらしい出来事が起こるでしょう。

世界中の人が救い主イエスさまの誕生を喜ぶことができますように。

あなたとあなたの家族に、クリスマスの喜びがあふれますように。

### 〈祈り〉

神さま、イエスさまを私たちのために与えてくださってありがとうございます。どんなに小さく弱くても神さまが愛して下さることに感謝します。ひとりでも多くの人たちがイエスさまと出会うことができますように。

### 〈やってみよう〉

- ・ 賛美しよう♪もろびとこぞりて♪
- ・ 聖句を覚えよう「いと高きところには栄光、神にあれ。地には平和、御心に適う人にあれ」

12月23日 ルカによる福音書2章1～20節

【小学科上級・中学科】

## 主の降誕

1. ルカ2章1～7節を読みましょう。

①人々は、何のために旅をしたのですか？

②ヨセフとマリアは、どこへ向かいましたか？

③ベツレヘムで二人に起きた出来事は、何でしたか？

2. ルカ2章8～20節を読みましょう。

④羊飼いたちは、天使から何を知らされましたか？

⑤天使が去った後、羊飼いたちはどうしましたか？

⑥この出来事について、マリアは何を思いめぐらしたのでしょうか？

⑦羊飼いたちは、どんな気持ちで帰っていきましたか？

12月30日 ルカによる福音書2章41～52節

【解説と黙想】

## 少年イエス

私たちは4つの福音書によって主イエスの生涯を知ることができるが、少年期については『ルカによる福音書』にしか記されていない。この箇所では、12歳の少年イエスがすでに《神の子》としての自己認識を持たれている姿と、同時に《人の子》として両親に対して謙遜に仕える姿が描かれている。

### 〈41～45節 少年イエスを見失う両親〉

父ヨセフ、母マリアのもとに生まれた少年イエスの家庭は、「律法に定められた」ことを忠実に守っていた(2:22～24,39)。それゆえ、過越祭[イスラエルの民がエジプトにおける奴隷状態から救われたことを記念する祭り(出エジプト記12:24～27)]を祝うために毎年エルサレムへ上った。彼らが住んでいたガリラヤのナザレからエルサレムまでの距離は120キロ以上あり、通常は4日ほどかかる道のりであった。その道中は、追い剥ぎや強盗に狙われやすいため、「親類や知人」などが群れをなし隊列を作るのが慣習となっていた。その群れは、先頭に子どもたち、次に女たち、最後尾が男たち、隊列の前後に少年たちが自在に走り廻っていたようである。大きな群れを作って、共同で群れを守っていた。両親は、「イエスが道連れの中にいるものと思い、」安心しきっていた。しかし、我が子がいないうちに気づくと、エルサレムへ慌てて引き返していったのである。

### 〈46～50 少年イエスの自己認識〉

その頃、少年イエスは「神殿の境内で学者たちの真ん中に座り、話を聞いたり質問したりしておられた。ユダヤ式の教育法は質問を多用する問答形式で行われる。教師が生徒に質問したり、生徒に質問させたりすることにより、答え方とともに質問の仕方にも訓練される。ここで少年イエスは生徒として、周りの大人や教師たちから学び、分からなければ質問し、知恵を習得されて

いた。そのやりとりを「聞いている人が皆イエスの賢い受け答えに驚いていた」一方、両親は「一日分の道のり」を最悪の状況も考えながら必死になって、エルサレムの都を休むことなく走り回って探したのであろう。ようやく見つけた時には、ほっとして溜息をつくと同時に、「なぜこんなことをしたのか、心配して探していた」と我が子を問い詰める言葉を抑えることはできなかった。その問いに対して少年イエスは、「どうしてわたしを探したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だ」と答えられた。「当たり前」と訳されている語は、「当然である、～するべきである」という決定的な必然性を表すものである。ここに少年イエスの自己認識が現れている。すなわち、真の「自分の父」はヨセフではなく神であること、自分自身は《神の子》であること、神の子は「父なる神の家(神殿)にいるべきである」という認識である。しかし、この言葉の意味が両親には理解できなかった。

### 〈51～52 両親に仕える少年イエス〉

けれども、少年イエスは《神の子》という自己認識を持ちながら、このあと公に姿をあらわすまでおよそ18年間、《人の子》としてナザレで両親に仕えて生活を送られた。少年イエスの物語にキリストの生涯がよく現れている。後の時代に教会が信仰告白したように、まさに「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした」(フィリピ2:6～8)。私たちも神と人ともに愛され、自分自身が本来いるべき場所を認識しつつ、置かれている環境の中で謙遜に仕える者でありたい。(古澤純人)

《教理問答》 「子どもと親のカテキズム」問71

12月30日 ルカによる福音書2章41～52節

【説教展開例】

## 少年イエス

◇..... 単元のねらい .....◇

イエスさまが子どもの頃どのように過ごしておられたのか、聖書は詳しく記していません。私たちが知ることができるのはこの箇所からだけです。けれども、子どもたちの模範となる姿、否、大人も含めて神の子としての生き方が示されています。少年イエスの物語はキリストの生涯の縮図と言えます。契約の子の代表であるイエスさまの少年時代の幸いな姿に、子どもも大人も一緒に学びましょう。

### 「私たちがいるべき場所」

先週はイエスさまの誕生をお祝いするクリスマスでした。イエスさまのお父さんはヨセフさん、お母さんはマリアさんでしたね。その二人に大切に育てられたイエスさまは、神さまの教えを守り、たくましく育っていきました。

今日のお話は、イエスさまが12歳になられたときのことです。家族で毎年のように過越しのお祭りに出かけていました。過越祭というのは、大昔にエジプトでの苦しい生活から神さまが救い出してくださったことを記念するお祭りです。神さまが毎年お祝いしなさいと教えられたので、イエスさまの家族は皆でお祭りに行っていました。私たちが毎年クリスマスをお祝いするのと似ていますね。

しかし、そこで一つの事件が起こります。お祭りが終わって家に帰っていく途中、両親はイエスさまの姿を見失ってしまいます。この時代、過越祭のような大きなお祭りに行くときは、家族だけでなく親戚や友だちなど大勢が一緒になって隊列を作って旅をしていました。その旅は歩いて4日ほどかかったので、子どもたちにとっては道

中を遊びながら自由に動き回っていました。一日分の道のりを移動してから、両親はイエスさまが見当たらないことに気づきました。両親はイエスさまが隊列の中のどこかにいるのだろうと思い込んでいたのかもしれない。そこで、慌てふためいて探し回りますが見つかりません。二人は周りの人たちに「ウチの子を知りませんか」と尋ねながら来た道をと引き返していきました。

そのころ、イエスさまは神殿の境内で学者たちの真ん中に座り、話を聞いたり質問したりしていたということです。これは学校のようなもので、今私たちがしている教会学校（聖書学校）と同じように、聖書のお話を聞いていたのでしょう。暗証聖句もしていたかもしれません。聖書はとても分厚い本ですね。その中にいろいろなお話があります。それは私たちがどのように生きていったらいいのかを教えてください。同じ話を何度も聞くことがあるかもしれませんが、それでも、繰り返し学んで、聖書の言葉が自然と思い出せるようになるといいですね。イエスさまはとても「賢い受け答え」をしていたので周りの大人たちが驚いたそ

うです。

さて、両親はようやく三日目になってイエスキリスを見つげ出しました。お母さんのマリアさんは思わず、「なぜこんなことをしてくれたのです。ご覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです」と言いました。マリアさんがこう言うのも無理はありませんね。本当に心配して、三日間も必死に捜しまわっていたのですから。しかし、イエスキリスはそんなお母さんにこう答えたのでした。「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか」。イエスキリスは、神さまを礼拝する神殿のことを「父の家」と呼びました。両親にはその言葉に意味が分かりませんでした。それもそのはず、イエスキリスのお父さんのヨセフさんの家は遠く離れたところにあります。ここでイエスキリスが言われた「父」とは、天の父なる神さまのことです。イエスキリスは自分が神さまの子どもであることを知っていました。そして、神さまの子どもがいるべき場所も分かっていました。両親はイエスキリスのいる場所が分からず、捜しまわっていましたが、イエスキリスは自分がいるべき場所を分かっていました。神さまの子どもであれば、神さまと一緒にいるのは「当たり前だ」と。

私たちもイエスキリスによって神さまの子どもとされました。神さまの子どもの代表であるイエスキリスによって、神さまが私たちと共にいてくださいます。ですから、私たちのいるべき場所は父なる神さまの家です。イエスキリスが神殿で聖書を学ばれてい

たように、私たちは教会で聖書のお話を聞くことができます。聖書を通して神さまは私たちに語りかけてくださいます。教会の礼拝で神さまは私たちにお会いしてくださいます。神さまは教会という私たちがいるべき場所を与えてくださいました。イエスキリスは私たちの本当のお父さんが天の父なる神さまだということを教えてくださいました。

では、私たちの両親は大切にしなくてもいいのかというと、そうではありません。このあとイエスキリスは、人間の両親と一緒に自分の住んでいる家に帰っていきました。そして、「両親に仕えてお暮しに」になりました。イエスキリスは、父なる神さまを礼拝し、聖書を学び、神さまの子どもであると分かっているながら、お父さんやお母さんを心から敬いました。また、先生や目上の人たちを尊敬し、友だちや年下の人たちも大切にしました。神さまはそのような人に祝福を豊かに与えると、特別に約束してくださっています（子どもと親のカテキズム問71）。私たちは自分が神さまの子どもであるということをしっかり覚えておきながら、同じ神さまの子どもである周りの人たちを大切にしましょう。

イエスキリスの生涯は「神と人とに仕える」ものであったとすることができます。神さまの子どもでありながら、イエスキリスはまず自分の父母に仕えて生きることを大切にされたのです。両親に仕えることを通して神さまに仕えることを学ばれました。自分の思いではなく神さまの御心に従って歩む姿を示されました。（古澤純人）

---

#### 《今週の暗唱聖句》

すると、イエスは言われた。「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。」（ルカによる福音書2章49節）



12月30日 ルカによる福音書2章41～52節

【幼稚科】

## 少年イエス

### 〈ねらい〉

イエスさまは父なる神さまの独り子でありながらも人として両親に仕え、従順に歩まれたことを覚える。

### 〈展開例〉

先週はイエスさまのお誕生をお祝いするクリスマスでした。お父さんのヨセフさんとお母さんのマリアさんに育てられたイエスさまは、神さまの教えを守って賢く、そしてたくましく育ち、神さまの恵みに包まれていました。そして12歳になって家族でエルサレムでのお祭りに行った帰りに、ある事件が起きました。お祭りが終わって家に帰る途中、一日分くらいの道のりを歩いたところで両親はイエスさまの姿がないことに気づきました。親戚みんなと大勢で移動していたので、わかりませんでした。イエスさまの両親はそれは慌てたでしょうね。探し回りました。

そのときイエスさまはどうしていたかという、お祭りのあったエルサレムの神殿の庭で、聖書の学者さんたちの真ん中に座ってお話を聞いたり質問したりしていたのです。イエスさまはとても賢い受け答えをしていたので、周りの大人たちは驚いていました。

そんなとき3日間も探し回った両親がようやくイエスさまを見つけました。みんなが3日間お父さんやお母さんと離れ離れになったらどうでしょうか。両親に泣きながら“寂しかった、怖かったよー”と抱きつくかもしれませんね。でもイエスさまは平気で大人たちと神さまのお話をしていまし

た。「なぜこんなことをしてくれたのです！」とマリアさんが言いました。心配だったのでですから当然ですね。でもイエスさまは「どうしてわたしを探したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを知らなかったのですか」と答えたのです。キョトンとしますね。イエスさまは神さまを礼拝する神殿を「父の家」と言いました。マリアさんたちは意味がわかりませんでした。でも、イエスさまは、自分の本当のお父さんは天の父なる神さまで、神さまを礼拝する場所が自分の本当のいる場所だとわかっていました。

そしてあなたもイエスさまと同じです。イエスさまを通してあなたも神さまの子どもにされたのです。ですから、毎週教会で礼拝をし聖書のお話を聞くのです。み言葉を覚えて毎日口ずさんで父なる神さまとお祈りしてお話しましょう。

そして、イエスさまもお手本を見せてくださったように、実際に育ててくれているお父さんお母さんも敬って、大切にしましょう。そしてあなたと同じく神さまの子どもである周りの人たちも大切にしましょう。神さまは、神さまと人を大切にするあなたを豊かに祝福してくださるはずですよ。

### 〈祈り〉

神さま一年間守ってくださいありがとうございます。イエスさまのように神さまと人を大事にできますように。

### 〈やってみよう〉

♪ぼくの心の中が♪

12月30日 ルカによる福音書2章41～52節

【小学科上級・中学科】

## 少年イエス

1. ルカ2章41～52節を読みましょう。

①イエスさまと両親は、何のためにエルサレムへ行きましたか？

②息子が見つからなくなり、両親はどんな気持ちだったと思いますか？

③イエスさまは、両親と離れて何をしていましたか？イエスさまは不安だったのでしょうか？

④「自分の父の家」とは、どういう意味ですか？

⑤なぜ、両親にはイエスさまの言ったことが理解できなかったのでしょうか？

⑥あなたと、少年イエスさまに共通することは何ですか？

<p>10月7日</p> <p>あなたがたは食べるにしろ飲むにしろ、何をするにしても、すべて神の栄光を現すためにしなさい。</p> <p>【1コリント10：31】</p> 	<p>10月14日</p> <p>何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。</p> <p>【マタイ6：33】</p> 	<p>10月21日</p> <p>最後まで耐え忍ぶ者は救われる。</p> <p>【マタイ24：13】</p> 
<p>10月28日</p> <p>福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。「正しい者は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。</p> <p>【ローマ1：17】</p> 	<p>11月4日</p> <p>わたしは初めであり、終わりである。わたしをおいて神はない。</p> <p>【イザヤ44：16】</p> 	<p>11月11日</p> <p>悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる。</p> <p>【マタイ5：4】</p> 
<p>11月18日</p> <p>もはや、呪われるものは何一つない。神と小羊の玉座が都にあって、神の僕たちは神を礼拝し、御顔を仰ぎ見る。彼らの額には、神の名が記されている。</p> <p>【黙示録22：3, 4】</p> 	<p>11月25日</p> <p>「り、わたしはすぐに来る。」アーメン、主イエスよ、来てください。</p> <p>【黙示録22：20】</p> 	<p>12月2日</p> <p>アーメン、主イエスよ、来てください。</p> <p>【黙示録22：20】</p> 

12月9日

悔<sup>く</sup>い改<sup>あらた</sup>めなさい。めいめい、  
イエス・キリストの名<sup>な</sup>によっ  
て洗<sup>せんれい</sup>礼<sup>らい</sup>を受け、罪<sup>つみ</sup>を赦<sup>ゆる</sup>して  
いただきなさい。【使徒<sup>しと</sup>2：38】



12月16日

わたしの魂<sup>たましい</sup>は主<sup>しゆ</sup>をあがめ、わ  
たしの霊<sup>れい</sup>は救<sup>すく</sup>い主<sup>ぬし</sup>である神<sup>かみ</sup>を  
喜<sup>よろこ</sup>びたたえます。【ルカ1：47】



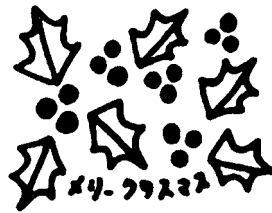
12月23日

あなたがたは、布<sup>ぬの</sup>にくるまっ  
て飼<sup>か</sup>い葉<sup>は</sup>桶<sup>か</sup>の中<sup>なか</sup>に寝<sup>ね</sup>ている乳<sup>ち</sup>  
飲<sup>の</sup>み子<sup>こ</sup>を見<sup>み</sup>つけるであらう。  
これがあなたがたへのしるし  
である。【ルカ2：12】



12月30日

どうしてわたしを捜<sup>さが</sup>したので  
すか。わたしが自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の父<sup>ちち</sup>の家<sup>いえ</sup>  
に居<sup>あ</sup>るの<sup>の</sup>は当<sup>あ</sup>たり前<sup>まえ</sup>だとい  
うことを、知<sup>し</sup>らなかつたので  
すか。【ルカ2：49】



## 2019年1～3月カリキュラム (第72号)

—救済史に基づく2年サイクル 第1年—

月日 教会暦・行事	主 題	聖書箇所	暗唱聖句
	単元の目標		
1月6日	主は羊飼い	詩編23編	詩編23：4
	神は私たちに必要なすべてのものを与えて、楽しむことができるように祝福して下さる。		
1月13日	ソロモンの知恵	列王上3：1－28	1コリント1：30
	一年を始めるにあたって、神の知恵とともにある歩みを覚える。		
1月20日	父母の教え	箴言1：1－19	箴言1：8
	神と教会との正しい関係を模範にして、親子の関係を改めて問う。		
1月27日	若い日の信仰	コヘレト12：1－14	コヘレト12：1
	神中心に生きることを教え、そこにこそある安息を受け取るように促す。		
2月3日	祈りに応える父	ルカ11：1－13	ルカ11：9
	神は聖霊によって祈りに応えて下さることを伝え、祈り続ける生活へと導く。		
2月10日	愚かな金持ち	ルカ12：13－21	1テサロニケ3：12
	人の命はお金によって保証されない。神の前に豊かな生き方を考えよう。		
2月17日	天に宝を積み	ルカ12：22－40	マタイ6：33
	神の支配を求める者こそ富める人であることを知り、神に喜ばれる生き方を選ぶ。		
2月24日	時を見分ける	ルカ12：49－56	ルカ9：23
	今は恵みの時、救いの時。新しい時代にふさわしい生き方を身に着けよう。		
3月3日	安息日の癒し	ルカ13：10－17	マタイ8：17
	イエス・キリストにこそ悪魔から人々を解放する唯一の道があることを伝える。		
3月10日	義人ヨブ	ヨブ1：1－2：13	ヨブ2：10
	神が与え、守り、育まれる信仰を、誰も奪い取ることはできない。		
3月17日 レント	サタンの誘惑	ルカ4：1－13	申命記6：5
	勝利の秘訣をしっかりと学び、主に感謝し、雄々しく信仰の歩みを続ける。		
3月24日 レント	悔い改めねば滅びる	ルカ13：1－9	ルカ13：18, 19
	神の国の到来を喜ばしい知らせとして受け入れるために悔い改める生き方を選ぶ。		
3月31日 レント	イエスの嘆き	ルカ13：31－35	2ペトロ3：9
	主イエスの従順によって私たちの救いが開かれる。		

# 子どもと親のカテキズム

## 神さまと共に歩む道

日本キリスト改革派教会大会教育委員会

### 『子どもと親のカテキズム』の目指すもの

～「あとがき」より～

このカテキズムは、契約の子どもたちの信仰継承の前進、地域の子どもの伝道の進展、成人求道者の洗礼教育、現代を生きるキリスト者の信仰の確立を願って、作成されました。

どうか父なる神が、ご自分の子どもたちをこのカテキズムを用いて主イエス・キリストの福音の真理の内に養ってくださり、聖霊の交わりのうちに親子の信仰の対話を祝福して信仰を告白する喜びに導き、教会と世界に感謝をもって仕える民として成長させてくださいますように。

カテキズム作成のために多大な労苦を払われた前大会教育委員会小委員会の牧田吉和委員、三川栄二委員、相馬伸郎委員に感謝しつつ、今ここに『子どもと親のカテキズム』をお届けします。

2014年10月

日本キリスト改革派教会大会教育委員会



2014年10月15日発売

四六判・並製・64頁

ISBN978-4-7642-6454-0

販売価格 **400**円 (税込)

書店での販売価格は540円 (税込) ですが、大会教育委員会を通じての販売価格は400円 (税込) です。

申込先 E-mail [shintoko\\_ch\\_pastor@yahoo.co.jp](mailto:shintoko_ch_pastor@yahoo.co.jp) 長田詠喜

振込先 01620-8-39213 長田詠喜

※『子どもカテキズム』とは申込先が異なりますので、ご注意ください。

**教文館**

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1 TEL03-3561-5549 FAX03-5250-5107  
HPをご利用ください。 <http://www.kyobunkwan.co.jp/publishing/> 【呈・図書目録】

大会教育委員会

# 「教会学校教案誌」

継続発行のための

## 50万円 自由募金のお願い

弊誌のためにお祈りとご購読をもってお支え下さいます事を、心から感謝するとともに御礼を申し上げます。

大会教育委員会の重要な使命と任務は、日本キリスト改革派教会独自の教案を作成することです。そのために委員会は、なにより「内容」を磨くことに全力を注いでおります。しかしそのためには、教案誌の「安定的発行」が不可欠です。

かつて執筆者には1000円の図書券を贈呈し、最低限の礼を尽くしてまいりました。現在は、何の御礼もさしあげていません。ひとえに誌代を維持したいからです。ギリギリの厳しい状況が続いています。自由募金に積極的にご参加ください。

教会だけではなく、個人としてのご協力をも伏してお願い致します。

*Soli Deo Gloria!*

※ 購読申し込みは、西堀 元（熊本伝道所：✉boribori89@gmail.com）

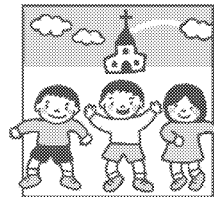
〒862-0924 熊本県熊本市中央区帯山2-13-74 ☎ファクス (096)382-7630

お問い合わせは、相馬伸郎（iwanoue@me.ccnw.ne.jp）まで。

目標金額 50万円

送金先 郵便振替 伊藤治郎

00890-2-148183



※振替通信欄に、「自由募金」とご明記くださいませ。

●表紙のデザインを担当して下さっている高橋乃亜長老が巻頭言を記してくださいました。いつも素晴らしいイラストを提供して下さる中村未生氏にも感謝しています。いつか原画の展覧会ができるといいですね。

●誌面を飾るカットを描いてくださるイラストレーターを募集中です。応募される方は下記の牧野までお願いします。

●これまで書記を務めて来られた吉田崇教師が委員会を退かれます。先生の忠実なお働きで教案誌発行が支えられたことに感謝します。(牧野信成)

●編集奉仕者たちの間で「巻頭部分」と呼んでいる原稿もとても大切です。今号も永久保存版としたいものが目白押しです。この部分だけ抜き取って全会員に読んで頂きたいと願うほどです。

公教育に携わるキリスト者の労苦と光栄。彼らのために祈る責任を痛切に思われます。最も大切なもの「だけ」は教えない教育システム。まさに画龍点睛を欠きます。近代日本が抱え続け、むしろいよいよ深刻になっています。「神の学校」(教会)の役割と責任を自覚します。

日曜学校に長く仕えておられる姉妹の貴重なお声。当該教会の特別な歴史の興味深さにとどまらず、広く大きな示唆と励ましを与えられます。

さっそく盛岡教会のホームページを拝見しました。すごい！すばらしい！小麦の収穫からパンつくりへ！

いよいよ各個教会の実践や受けた恵みを分かち合う交流の場としましょう。お気軽

にご投稿ください。(相馬伸郎)

●今一度研鑽の時を持つため、編集部のお働きを退くことになりました。編集部の一員として全国各地で献身的にご奉仕される兄弟姉妹方や教会教育の諸課題に間近で向き合えたことは私にとって貴重な財産となるはずです。今後も祈りに覚えてまいりたいと願います。(吉田 崇)

●子どもに限らず、洗礼や信仰告白のタイミングはとても難しいものです。自分自身でも「自分は何もわかっていないのに無理ではないか」と思っていた記憶があります。ある時、信仰告白はゴールではなくスタートであると気がつかせられました。そもそも「十分な信仰」等というものはありえないのです。

信仰告白を促す立場になって感じるのは、思いを持った時を逃さないために、多少鬱陶しいくらいに声をかけ続けることだと思います。(長田詠喜)

●小学校の前で教会学校のチラシを配っていたら「夏休みなんて大嫌い！」という子がいました。休み中ずっと学童に行かないといけないみたいです。いろいろと考えさせられます。(西堀 元)

※バックナンバーを御希望の方は下記までご連絡ください。

長野佐久伝道所 牧野信成

〒385-0051

長野県佐久市中込3-9-1

Tel & Fax : 0267-62-2409

E-mail: rcjnaganosaku@gmail.com



## 執筆者一覧

まえがき	赤石 純也 (伊丹教会牧師)
高橋 乃亜 (湘南恩寵教会長老)	坂尾連太郎 (南与力町教会牧師)
巻頭説教	宮崎 契一 (西部中会休職教師)
坂井 孝宏 (勝田台教会牧師)	赤石めぐみ (伊丹教会)
キリスト教と公教育	望月 信 (鈴蘭台教会牧師)
富井 篤 (宝塚教会長老)	常石 召一 (大阪教会牧師)
教会学校訪問	吉田 崇 (坂出飯山教会牧師)
名古屋恒彦 (盛岡伝道所)	相馬 伸郎 (名古屋岩の上教会牧師)
CS 教師の一言	長田 詠喜 (新所沢伝道所宣教教師)
片桐 京子 (新所沢教会)	宮武 輝彦 (男山教会牧師)
洗礼へと導かれて	古澤 純人 (徳島教会牧師)
市川 太陽 (名古屋岩の上教会)	
執事職について (3)	分級展開例
相馬 伸郎 (名古屋岩の上教会牧師)	島野美佳子 (坂戸教会付属新潟伝道所)
長老職について (3)	畑中 寿子 (田無教会)
吉岡 契典 (板宿教会牧師)	愛智 愛 (新座志木教会)
聖書黙想・説教展開例	イラスト作画
小澤 寿輔 (高知教会牧師)	表紙 中村末生 (春日井教会・IBUKI)
西堀 元 (熊本伝道所宣教教師)	高橋乃亜 (湘南恩寵教会・IBUKI)
袴田 清子 (灘教会)	本文 岡野美佳 (青葉台キリスト教会)

## 編集部

相馬 伸郎 (長)	名古屋岩の上教会牧師・大会教育委員会
吉田 崇	坂出飯山教会牧師・大会教育委員会
牧野 信成	長野佐久伝道所宣教教師・大会教育委員会
長田 詠喜	新所沢伝道所宣教教師・大会教育委員会
西堀 元	熊本伝道所宣教教師・大会教育委員会

### 日本キリスト改革派 大会教育委員会 『教会学校教案誌』 第71号

2018年10・11・12月号 (季刊)

2018年9月1日発行

発行	日本キリスト改革派教会 大会教育委員会
発行所	日本キリスト改革派教会 大会教育委員会 名古屋岩の上教会 牧師 相馬伸郎 〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012 Tel/Fax 052-895-6701
郵便振替口座	00890-2-148183 「伊藤治郎」
編集・印刷	株式会社あるむ
頒価	900円 (本体価格)

Reformed Church in Japan  
Board of Education

